

CA ARCserve® Backup for Windows

Agent for Microsoft SQL Server ユーザ ガイド

r12.5



本書及び関連するソフトウェア ヘルプ プログラム(以下「本書」と総称)は、ユーザへの情報提供のみを目的とし、CA はその内容を予告なく変更、撤回することがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複製、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。本書は、CA または CA Inc. が権利を有する秘密情報でかつ財産的価値のある情報で、アメリカ合衆国及び日本国の著作権法並びに国際条約により保護されています。

上記にかかわらず、ライセンスを受けたユーザは、社内で使用する場合に限り本書の合理的な範囲内の部数のコピーを作成でき、またバックアップおよび災害復旧目的に限り合理的な範囲内で関連するソフトウェアのコピーを一部作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を各コピーに添付することを条件とします。ユーザの認可を受け、プロダクトのライセンス条項を遵守する、従業員、法律顧問、および代理人のみがかかるコピーを利用することを許可されます。

本書のコピーを印刷し、関連するソフトウェアのコピーを作成する上記の権利は、プロダクトに適用されるライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、そのライセンスが終了した場合には、ユーザは CA に本書の全部または一部を複製したコピーを CA に返却したか、または破棄したことを文書で証明する責任を負います。

該当するライセンス契約書に記載されている場合を除き、準拠法により認められる限り、CA は本書を現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対する不侵害についての黙示の保証を含むいかなる保証もしません。また、本書の使用が直接または間接に起因し、逸失利益、業務の中断、営業権の喪失、情報の損失等いかなる損害が発生しても、CA はユーザまたは第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害について明示に通告されていた場合も同様とします。

本書及び本書に記載されたプロダクトは、該当するエンドユーザ ライセンス契約書に従い使用されるものです。

本書の制作者は CA および CA Inc. です。

「制限された権利」のもとでの提供:アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212, 52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、及び、DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

本書に記載された全ての製品名、サービス名、商号およびロゴは各社のそれぞれの商標またはサービスマークです。

Copyright © 2009 CA. All rights reserved.

CA 製品リファレンス

このマニュアル セットは、以下の CA 製品を参照します。

- BrightStor® ARCserve® Backup for Laptops and Desktops
- BrightStor® CA-Dynam®/TLMS Tape Management
- BrightStor® CA-Vtape™ Virtual Tape System
- BrightStor® Enterprise Backup
- BrightStor® High Availability
- BrightStor® Storage Resource Manager
- CA Antivirus
- CA ARCserve® Backup Agent for Advantage™ Ingres®
- CA ARCserve® Backup Agent for Novell Open Enterprise Server for Linux
- CA ARCserve® Backup Agent for Open Files on NetWare
- CA ARCserve® Backup Agent for Open Files on Windows
- CA ARCserve® Backup Client Agent for FreeBSD
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Mainframe Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for NetWare
- CA ARCserve® Backup Client Agent for UNIX
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Windows
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for AS/400
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for Open VMS
- CA ARCserve® Backup for Microsoft Windows Essential Business Server
- CA ARCserve® Backup for Windows
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for IBM Informix
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Lotus Domino
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft Exchange
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SharePoint

- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SQL Server
 - CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Oracle
 - CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Sybase
 - CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Virtual Machines
 - CA ARCserve® Backup for Windows Disaster Recovery Option
 - CA ARCserve® Backup for Windows Disk to Disk to Tape Option
 - CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Module
 - CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for IBM 3494
 - CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
 - CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for StorageTek ACSLS
 - CA ARCserve® Backup for Windows Image Option
 - CA ARCserve® Backup for Windows Microsoft Volume Shadow Copy Service
 - CA ARCserve® Backup for Windows NDMP NAS Option
 - CA ARCserve® Backup for Windows Serverless Backup Option
 - CA ARCserve® Backup for Windows Storage Area Network (SAN) Option
 - CA ARCserve® Backup for Windows Tape Library Option
 - CA Dynam®/B Backup for z/VM
 - CA VM:Tape for z/VM
 - CA XOsoft™ Assured Recovery™
 - CA XOsoft™
 - CA 1® Tape Management
 - Common Services™
 - eTrust® Firewall
 - Unicenter® Network and Systems Management
 - Unicenter® Software Delivery
 - Unicenter® VM:Operator®
-

CA への連絡先

テクニカル サポートへのお問い合わせ

本製品を便利にお使いいただくために、CA では Home Office、Small Business、および Enterprise CA の各製品で必要な情報にアクセスするためのサイト (<http://www.ca.com/jp/support/>)を提供しています。

マニュアルの変更点

本マニュアルでは、前回のリリース以降に、以下の点を更新しています。

- [新機能](#) (20 ページ) -- CA ARCserve Backup が Microsoft SQL Server 2008 の機能をどのようにサポートするかを説明します。
 - [バックアップおよびリカバリ戦略の計画](#) (31 ページ) -- CA ARCserve Backup を使用する前に知っておくべき Microsoft SQL Server の重要な基本原理、および SQL Server 2008 の新機能について説明し、リストア プロセスを容易にするための一連のチェック リストが用意されています。また、バックアップ マネージャのエージェント オプションに関するトピックも修正されています。
 - [Microsoft SQL Server データベースのリストア](#) (79 ページ) -- このセクションには Microsoft SQL Server 7.0 のクラスタ環境についてのトピックが含まれなくなりました。r12 から、SQL 7.0 および NT 4 のクラスタが CA ARCserve Backup エージェントによってサポートされなくなりました。
-

目次

第 1 章: エージェントの紹介	11
アーキテクチャの概要	12
エージェントの動作	13
バックアップ リクエストの動作の仕組み	14
リストア リクエストの動作の仕組み	14
バックアップにおけるデータの流れ	15
エージェントのサービス	15
アクセス要件	16
インストール時の注意事項	16
その他の機能	18
複数のインスタンスのサポート	18
バックアップおよびリストア オプション	18
新機能	20
エージェント アクティビティ ログ	20
SAP R/3 データベースのオンライン バックアップ	20
Agent for ARCserve Database	21
第 2 章: エージェントのインストール	23
インストールの前提条件	23
基本的な前提条件	23
Microsoft SQL Server 2000、2005、および 2008 クラスタ環境での前提条件	23
エージェントのインストール	24
標準の Microsoft SQL Server 環境へのエージェントのインストール	24
Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 クラスタ環境へのエージェントのインストール	24
インストール後の手順	25
Microsoft SQL Server のエージェント用のバックアップとリストアのパラメータの設定	25
第 3 章: バックアップと復旧計画の作成	31
Microsoft SQL Server データベースに関する基本知識	31
ファイルとファイル グループ	32
パフォーマンスの向上方法	34
復旧モデル	37
システム データベース	38
Microsoft SQL Server クラスタ環境でのバックアップとリストアに関する考慮事項	39

バックアップの概念	39
バックアップの考慮点	40
リストアの概要	48
リストアの種類と方式	50
依存性のチェックリスト、種類別	50
Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメント	58
マスタ データベースのリストア	59

第 4 章: Microsoft SQL Server データベースのバックアップ 61

バックアップの概要	61
バックアップ マネージャのエージェント オプション	62
動のおよび明示的なジョブ パッケージ	69
動的なジョブのパッケージ	70
動的なジョブ パッケージのオブジェクト作成	71
明示的なジョブのパッケージ	71
明示的なジョブ パッケージのオブジェクト作成	72
データベースのバックアップ	73
Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 クラスタ環境でのバックアップ	75
サーバ、プロトコル、セキュリティ、およびバックアップ方式の選択	75

第 5 章: Microsoft SQL Server データベースのリストア 79

リストア オプション	80
自動選択オプション	81
[ログによる Point-in-Time リストア]オプション	82
[回復完了状態]オプション	83
データベースの整合性チェック(DBCC)オプション	84
リストアで強制的に名前付きパイプを使用する	86
チェックサムでエラーが発生してもリストアを続行する	86
その他	86
データベース ファイル オプション	88
ツリー単位のリストア方式でリストアする	91
セッション単位のリストア方式でリストアする	94
SQL エージェント フィルタ オプション	97
[セッションの自動選択]を使用した、代替ディスク場所へのリストア	97
ディスクの代替場所への[セッション単位]のリストア	98
[セッション単位]のリストアを 1 回のリストア ジョブで実行する	98
[セッション単位]のリストアを、セッションごとに個別のリストア ジョブで実行する	99
[ツリー単位]のリストアを、セッションごとに個別のリストア ジョブで実行する	100

Microsoft SQL Server 2005 または 2008 を使用したオフラインの破損ページの修正	102
Microsoft SQL Server 2005 または 2008 Enterprise、Data Center、または Developer Editions を使用したオンラインの破損ページの修正.....	103
Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 クラスタ環境でのツリー単位のリストア.....	104
Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 環境でのセッション単位のリストア	107

付録 A: トラブルシューティングと惨事復旧 111

CA ARCserve Backup およびエージェントの一般的な注意事項	111
Agent for Microsoft SQL のアップグレード時の注意事項	113
バックアップ時のデータベース ファイルのスキップまたは組み込み	114
エージェントおよび CA ARCserve Backup のエラー メッセージ	116
Microsoft SQL Server のエラー メッセージ	119
Microsoft SQL Server データベースの制限事項	120
Microsoft SQL Server のレプリケーション	121
バックアップに適さないデータベースのエージェント動作の設定	121
Microsoft SQL Serverの惨事復旧.....	123
マスタ データベース.....	123
惨事復旧の事例	125
Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 クラスタ環境での惨事復旧の実行.....	126

付録 B: Microsoft SQL Server のセキュリティ設定 127

Microsoft SQL Server 認証の種類.....	127
認証要件.....	127
ユーザ認証を変更する方法	128
Microsoft SQL Server の認証方法の確認と変更	128
エージェントのアカウント設定の更新	129
ODBC 設定の確認と変更	130
バックアップ マネージャの更新	132

索引 133

第 1 章: エージェントの紹介

CA ARCserve Backup は、アプリケーション、データベース、分散サーバ、およびファイル システム向けの、包括的かつ分散的なストレージ ソリューションです。データベース、ビジネス クリティカルなアプリケーション、およびネットワーク クライアントにバックアップ機能およびリストア機能を提供します。

CA ARCserve Backup が提供するエージェントの 1 つに、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server があります。このエージェントを使用すると、以下の操作を実行できます。

- データベースをオフラインにしたりユーザのデータ入力を禁止することなく、CA ARCserve Backup を使用して Microsoft SQL Server データベースをバックアップ
- Microsoft SQL Server データベースのバックアップのリモート管理
- スケジュールを設定したバックアップ操作
- さまざまなメディア ストレージ デバイスへのバックアップ
- CA ARCserve Backup を使用した Microsoft SQL Server データベースのリストア

バックアップ ジョブおよびリストア ジョブを実行中に CA ARCserve Backup と Microsoft SQL Server との間で発生する通信は、すべてこのエージェントで処理されます。この処理には、Microsoft SQL Server と CA ARCserve Backup との間で交わされるデータ パケットの作成、取得、処理などがあります。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[アーキテクチャの概要](#) (12 ページ)

[エージェントの動作](#) (13 ページ)

[その他の機能](#) (18 ページ)

[新機能](#) (20 ページ)

[エージェント アクティビティ ログ](#) (20 ページ)

[SAP R/3 データベースのオンライン バックアップ](#) (20 ページ)

[Agent for ARCserve Database](#) (21 ページ)

アーキテクチャの概要

CA ARCserve Backup は、ローカル処理の場合には Agent for Microsoft SQL Server と同じホストにインストールできます。また、両方を別々のシステムにインストールすることもできます。CA ARCserve Backup を 1 つインストールすれば、多くのシステム上のエージェントと連動して、1 つのバックアップ サーバで複数のマシンをバックアップすることができます。CA ARCserve Backup とエージェントは連動して、Microsoft SQL Server の データベース オブジェクトをバックアップおよびリストアします。

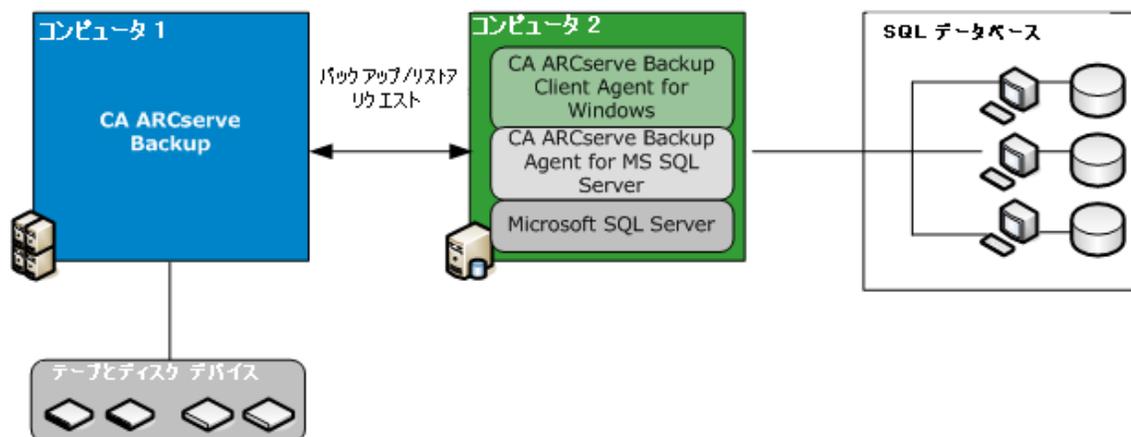
エージェントは、CA ARCserve Backup で Microsoft SQL Server データベースをバックアップおよびリストアするためのサービスを提供します。エージェントは、Microsoft SQL Server と同じサーバ上に常駐させるか、Microsoft SQL Server を含む Microsoft Cluster Service 環境の各ノードのローカル ドライブ上に常駐させる必要があります。クラスタ内のエージェントは、Microsoft SQL Server インスタンスと仮想サーバ名の間の関連付けを動的に処理し、また各インスタンスがどのノードで実行されているかを認識します。

注：Microsoft SQL Server のクラスタ化されたインスタンスを使用して ARCserve データベースを格納する場合は、スタンドアロンのインストーラを使用して、CA ARCserve Backup のインストール時にインスタンスがアクティブでないクラスタのノードに Agent for ARCserve Database をインストールする必要があります。

ただし、ARCserve データベース用に Microsoft SQL Server 2005 Express Edition オプションを使用して、クラスタ化された CA ARCserve データベースのプライマリ サーバをインストールする場合、このインストールは必要なくなります。クラスタ向けに ARCserve プライマリ サーバが設定される前に、CA ARCserve Backup と共にエージェントが各ノードに自動的にインストールされるからです。

以下の図に示すように、エージェントは構造上、SQL サーバをホストしているマシン上の CA ARCserve Backup と Microsoft SQL Server との間に位置付けられます。

CA ARCserve Backup と Microsoft SQL



エージェントの動作

CA ARCserve Backup とエージェントは連動して、SQL Server データベースをバックアップまたはリストアします。CA ARCserve Backup は、データベースのバックアップを開始するときに、このエージェントにリクエストを送信します。エージェントは、Microsoft SQL Server のデータベースのある時点のイメージまたはそのトランザクションログを、論理データ ストリームの形式で取得して、CA ARCserve Backup に送信します。CA ARCserve Backup では、完全なデータベース イメージがメディアにバックアップされます。リストアの際もエージェントは同様に動作し、バックアップされているデータベースを CA ARCserve Backup から Microsoft SQL Server に転送します。

エージェントでは、Microsoft SQL Server のデータベースおよびトランザクション ログのダンプによるバックアップ方式を利用します。ダンプでは、データベースまたはトランザクション ログのバックアップを 1 回の手順で実行できます。これによって、データベースの一貫したイメージがバックアップできます。

バックアップ用にサブミットされた各データベースまたはトランザクション ログに対し、エージェントは Microsoft SQL Server でダンプを開始します。Microsoft SQL Server は、データベースを複数のグループに分けてエージェントに送信します。エージェントはデータを、1 回に 1 グループずつ受信して、CA ARCserve Backup に直接渡します。渡されたデータはバックアップ メディアに記録されます。

リストアの際は、対象となる各データベースまたはトランザクション ログのバックアップについて、エージェントが Microsoft SQL Server で読み込みを開始し、データがバックアップ時に提供されたときと同じ方法で、Microsoft SQL Server にバックアップしたデータが返されます。1 つのデータベースをリストアするのに複数のバックアップを使用する必要がある場合、CA ARCserve Backup は正しい順番でリストア処理を行い、データベースを完全にリストアするように支援します。

バックアップ リクエストの動作の仕組み

バックアップ ジョブは、以下のように処理されます。

1. CA ARCserve Backup でバックアップ ジョブを開始します。
2. CA ARCserve Backup がエージェントにデータベースのバックアップをリクエストします。
3. エージェントは、Microsoft SQL Server から特定のデータベースまたはトランザクション ログを取り出します。SQL Server は、データを複数のグループに分けてエージェントに送信します。
4. エージェントは、複数のデータ グループを取得して CA ARCserve Backup に転送します。CA ARCserve Backup は、指定されたストレージ メディアにデータをバックアップします。

リストア リクエストの動作の仕組み

リストア ジョブは、以下のように処理されます。

1. CA ARCserve Backup からリストア コマンドを発行します。
2. CA ARCserve Backup は、エージェントにリストア ジョブを通知します。
3. エージェントは、Microsoft SQL Server にデータを受信する準備をするよう指示します。
4. CA ARCserve Backup によってストレージ メディアにアクセスし、データのリストアを開始します。

5. CA ARCserve Backup はデータをエージェントに転送します。
6. エージェントはデータを Microsoft SQL Server に転送します。
7. Microsoft SQL Server はデータベースを回復します。

バックアップにおけるデータの流れ

以下の手順は、CA ARCserve Backup が Agent for Microsoft SQL Server を使用して Microsoft SQL Server のインスタンスをバックアップするときのデータの流れを示します。

1. CA ARCserve Backup がエージェントにデータベースのバックアップをリクエストします。
2. エージェントからの指示により、Microsoft SQL Server は特定のデータベースまたはログのバックアップを実行します。
3. Microsoft SQL Server は複数のグループに分けたデータを、データベースから 1 回に 1 つずつエージェントに返します。
4. エージェントは Microsoft SQL Server から複数のデータ グループを受信して、CA ARCserve Backup に転送します。
5. CA ARCserve Backup はメディアにデータを書き込みます。

データが完全にバックアップされるまで、これらの手順が繰り返されます。エージェントと Microsoft SQL Server のバックアップ機能により、データベースは確実にバックアップされます。

エージェントのサービス

Agent for Microsoft SQL Server は、CA ARCserve Universal Agent サービスのコンテキスト内で実行されます。このサービスは、バックアップとリストア操作にアクセスするための 1 つのポイントとして、その他のエージェントと共有されます。このサービスは、インストールが完了すると自動的に開始し、新規エージェントがインストールされると、それを動的に認識します。

アクセス要件

Windows データベース サーバを含むジョブをサブミットすると、CA ARCserve Backup によって、データベースが存在するシステムのシステム ユーザ名とパスワードが要求されます。CA ARCserve Backup では、このユーザ名とパスワードを使用してリモートサーバにアクセスします。

一部のデータベース インスタンスにアクセスするには、Microsoft SQL Server のユーザ ID とパスワードも必要です。ユーザ ID とパスワードを要求された場合は、Microsoft SQL Server のシステム管理者(sa)用のユーザ ID とパスワード、または同等のアクセス権を持つユーザ ID とパスワードを入力します。エージェント セキュリティ設定の詳細については、「Microsoft SQL Server のセキュリティ設定」を参照してください。

注: エージェントで使用できるデータ転送メカニズムは 2 種類あり、必要な権限がそれぞれ異なります。名前付きパイプを使用したバックアップでは、バックアップされる特定のデータベースの Backup Operator 権限のみが必要で、リストアを実行するには、Database Creator の役割が必要です。仮想デバイスを使用したバックアップでは、システム管理者権限が必要です。また、名前付きパイプによる方法は、Microsoft SQL Server 7.0 および 2000 でのみ使用できます。

インストール時の注意事項

CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server をインストールする前に、次の点を検討する必要があります。

- 64 ビットマシンに 32 ビット コンポーネントをインストールすると、マシン上に PortsConfig.cfg ファイルが 2 つ生成されます。64 ビット コンポーネントの PortsConfig.cfg ファイルは c:\Program Files\CA\SharedComponents\CA ARCserve Backup にあり、32 ビット コンポーネントの PortsConfig.cfg ファイルは c:\Program Files (x86)\CA\SharedComponents\CA ARCserve Backup にあります。どちらかに変更を加えた場合、もう一方にも同じ変更を加えないと、コンポーネントが互いに通信できなくなることがあります。
- エージェントは、必ずコンピュータのハードウェアにネイティブなバージョンでインストールします。
- 一部の MSDE ベース アプリケーションは、システム管理者アカウントを提供しません。アプリケーションのベンダーから、Backup Operator 権限を持つバックアップユーザのみが提供されている場合があります。このような MSDE インスタンスは、名前付きパイプを使用してバックアップする必要があります。お使いの MSDE インスタンスにこの制限があるかどうか分からない場合は、アプリケーションのベンダーにお問い合わせください。

注：MSDE アプリケーション ベンダが System Administrator と Backup Operator アカウントを用意していない場合、CA ARCserve Backup Agent for Open Files のボリューム シャドウ コピー サービス サポートを使用する必要があります。

- ODBC 通信には、デフォルトの TCP/IP プロトコルを推奨します。名前付きパイプでは、ODBC は失敗します。
- Microsoft SQL Server または MSDE インスタンスをアンインストールすると、他の Microsoft SQL Server や MSDE インスタンスがマシン上で使用しているコンポーネントが登録解除されることがあります。これには、バックアップを実行している仮想デバイス メカニズムも含まれます。この場合、エージェントはエラー AE50015 (バックアップに失敗しました)、または AE51004 (リストアに失敗しました)の中で、バックアップ エージェント エラー 511 (Virtual Device Interface の作成中にエラーが発生しました。COM クラスが見つかりませんでした。)を出力します。このエラーに対処するには、以下の手順に従います。
 1. 最新バージョンの Microsoft SQL Server または MSDE に属する sqlvdi.dll バージョンをマシンで検索します。
 2. コマンド プロンプトで、選択した sqlvdi.dll を含むディレクトリに変更し、以下のコマンドを入力して Virtual Devices コンポーネントを再度登録し、バックアップ処理を再度有効にします。

```
regsvr32 sqlvdi.dll
```
- 同じマシンに複数のバージョンの SQL Server を同時にインストールすると、複数のバージョンの SQLVDI.DLL ファイルが作成されるため、競合によりデータベース バックアップ ジョブが失敗します。SQLVDI.DLL の競合を解決するには、SQL Server のすべてのインスタンスに最新のサービス パック、セキュリティ パッチ、修正プログラムを適用してください。また、失敗した SQL Server インスタンスを再起動して新しい SQLVDI.DLL ファイルを再ロードしたり、マシンを再起動したりする必要があります。
- Microsoft SQL Server 2000 でエージェントをインストールする場合、Agent for Microsoft SQL Server には、Microsoft SQL Server 2000 (Service Pack 3、Service Pack 3a、または Service Pack 4)が必要です。
- Windows Small Business Server 2003 Standard Edition には、Microsoft SQL Server 2000 は含まれていません。Microsoft SQL Server 2000 を別途インストールすることもできますが、その場合は Service Pack 3、Service Pack 3a、または Service Pack 4 をインストールする必要があります。

注：Windows Small Business Server 2003 Premium Edition には、Microsoft SQL Server 2000 (Service Pack 3)が含まれています。

- クラスタ環境では、Agent for Microsoft SQL Server のインストール時に接続の切断エラーが表示される可能性があります。このエラーは、クラスタ化された SQL を CA ARCserve Backup データベースとして選択した場合に、プライマリ/スタンドアロン インストールで発生します。このエラーを避けるには、Agent for CA ARCserve Backup データベース パッケージを各クラスタ ノードにコピーして、セットアップを手動で実行します。詳細については、「CA ARCserve Backup 管理者ガイド」を参照してください。

- クラスタ対応環境で SQL Server インスタンスを保護するには、クラスタ対応環境内のすべてのノードに Agent for Microsoft SQL Server を手動でインストールする必要があります。
- Agent for the CA ARCserve Backup データベースをクラスタ対応環境内の他のノードにインストールする場合は、インストール後、SQLAgentRmtInst.exe を実行して、アカウント環境設定ユーティリティの DBAConfig.exe をインストールします。さらにこれを実行して、クラスタ ノードの正しい名前とパスワードを入力し、セットアップ処理で ODBC 通信を作成できるようにします。

その他の機能

Agent for Microsoft SQL Server を Microsoft SQL Server 2000 および Microsoft SQL Server 2005 と共に使用する場合は、複数のインスタンスのサポートを使用して、名前付き SQL Server インスタンスにおけるデータベースのバックアップおよびリストアを実行できます。詳細については、「複数のインスタンスのサポート」と「バックアップおよびリストア オプション」を参照してください。

複数のインスタンスのサポート

この機能は、同一コンピュータ上で並行して稼働している Microsoft SQL Server の複数インスタンスのバックアップおよびリストアをサポートします。各インスタンスには、ほかのインスタンスとは共有しない固有のシステム設定とユーザ データベースがあります。アプリケーションは、リモートのコンピュータ上で稼働している Microsoft SQL Server に接続する場合と同じ方法で、ローカルのコンピュータ上にある Microsoft SQL Server の各インスタンスに接続できます。

Agent for Microsoft SQL Server は、Microsoft SQL Server の複数インスタンスのバックアップおよびリストアをサポートしています。バックアップ マネージャには、ローカル コンピュータのインスタンスおよびリモート コンピュータのインスタンスが表示されます。デフォルトのインスタンスは「Microsoft SQL Server」です。名前付きインスタンスの場合はその後ろにインスタンス名が追加されます。

バックアップおよびリストア オプション

バックアップ オプションを使用して、以下の処理を実行できます。

- データベースのフル バックアップまたは差分バックアップを実行
- データベース全体または特定のファイルやファイル グループのセットのバックアップ、変更可能なデータを含むファイル グループのセットを自動的に選択してバックアップ

- データベースのトランザクション ログのバックアップ (切り捨てあり/なし)
- トランザクション ログのバックアップ後に、自動的にデータベースをオフラインに切り替えてリストア状態を維持
- バックアップの前後でのデータベースの整合性のチェック
- 1 つのバックアップ ジョブで、データベースのデータとトランザクション ログの両方のバックアップを実行
- SQL Server のネイティブ エラー チェック情報をバックアップ データの一部として含める

バックアップ オプションの詳細については、「Microsoft SQL Server データベースのバックアップ」の章を参照してください。

リストア オプションを使用して、以下の処理を実行できます。

- データおよびトランザクション ログのリストア
- 1 回のリストア ジョブで整合性が保たれたライブのデータベースを作成できるよう、リストアするバックアップの順序を自動的に決定
- トランザクション ログを使用したリストアにより、特定の時点または指定されたトランザクションの開始時点や終了時点のデータにリストア
- データベース全体のリストア、または選択したデータベース ファイルとファイル グループのサブセットのリストア
- データベースの選択したサブセットを新規データベースとしてリストア
- データベースがオンラインの場合でも、破損ページ修正を実行
- リストア後のデータベースへのアクセスを制限
- リストアされたデータベースのレプリケーション設定の保持またはクリア
- データとトランザクション ログ ファイルのディスクでの物理的な保存場所を変更
- リストア完了後、データベースの物理的な整合性のみをチェック
- SQL Server のネイティブ エラー チェック情報で見つかった不整合を無効にする

リストア オプションの詳細については、「Microsoft SQL Server データベースのリストア」の章を参照してください。

新機能

パーティション分割

SQL 2005 および SQL 2008 で使用可能。パーティション分割により、定義したルールに基づき、複数のファイル グループにわたるテーブルのセグメント化が可能になります。これにより、データ サブセットのファイルおよびファイル グループを別々に管理でき、データベースの拡張に対応できるようになります。

データベースのミラーリング

SQL 2005、および、完全復旧モデルを使用しているデータベース上でのみ使用可能。ミラーは隠されているため、バックアップされません。ミラー データベースは、フェールオーバー中にプライマリ サーバになるまでは、バックアップに適しません。

データ型 FILESTREAM

SQL 2008 で使用可能。ビデオや写真、ある種のドキュメントなど、通常はデータベースに保存されない非構造化データを特別のファイル グループに保存できるようになり、通常もデータベースに保存されるような情報と共にバックアップできるようになりました。

SQL Server の詳細については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

エージェント アクティビティ ログ

Agent for Microsoft SQL Server によって生成されたログには、バックアップ ジョブまたはリストア ジョブの情報とそれらジョブのステータスが収められています。このアクティビティ ログは、sqlpag.log という名前で、エージェントをインストールしたディレクトリに格納されています。CA ARCserve Backup ジョブのログにエラーが記録されている場合は、アクティビティ ログを調べ、エラーの原因について詳しい情報を得るようにします。

SAP R/3 データベースのオンライン バックアップ

Microsoft SQL Server 7.0 またはそれ以上を SAP R/3 のデータベース サーバとして使用している場合、Agent for Microsoft SQL Server を使用して、SAP R/3 データベースのオンライン バックアップが実行できます。SAP R/3 用に独立したエージェントは不要です。オンライン バックアップの手順は、Microsoft SQL Server のデータベースに対して実行する場合と同様です。

注： Agent for Microsoft SQL Server を使用して、Microsoft SQL Server で SAP R/3 データベースのオフライン バックアップを行うことはできません。

Agent for ARCserve Database

CA ARCserve Backup Agent for ARCserve Database は、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server の一種です。これは CA ARCserve Backup をインストールするときに自動的にインストールされるか、あるいは CA ARCserve Backup データベースの場所が変更された後、またはクラスタの複数のノードにインストールする場合には、特別なユーティリティを使用して手動でインストールされます。Agent for ARCserve Database では、CA ARCserve Backup データベース自体をバックアップし、リストアできます。また、CA ARCserve Backup データベースを含む Microsoft SQL Server インスタンスから、システム データベースや惨事復旧エレメントをバックアップし、リストアできます。Agent for Microsoft SQL Server と共に Agent for ARCserve Database をインストールすると、Agent for Microsoft SQL Server で CA ARCserve Backup データベースの存在を認識できるようになります。さらに、CA ARCserve Backup と連携して、CA ARCserve Backup データベースに適用できる特別な復旧方式が提供されます。

Agent for ARCserve Database は Agent for Microsoft SQL Server の一種なので、システムにインストールされているプログラムのリストでは、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server として表示されます。Agent for ARCserve Database と Agent for Microsoft SQL Server の両方が存在する場合、1 つのエントリのみが表示されます。いずれか 1 つをアンインストールする必要がある場合は、どちらを削除するか選択するメッセージが表示されます。

以下のいずれかの状況では、Agent for ARCserve Database をインストールするスタンドアロンのユーティリティを使用できます。

- CA ARCserve Backup データベースを移動した場合
- 誤ってエージェントを削除してしまったために、再インストールする場合
- クラスタの追加ノードにエージェントをインストールする場合
- CA ARCserve Backup インストーラで直接リモート コンピュータにエージェントをインストールできない場合

このユーティリティは、CA ARCserve Backup のインストール時に、ホーム ディレクトリの「Packages」サブフォルダ内にある「ASDBSQLAgent」というフォルダに格納されます。CA ARCserve Backup サーバでないコンピュータにこのエージェントをインストールする必要がある場合は、エージェントをインストールするシステムに「ASDBSQLAgent」フォルダをコピーして、そのマシンでこのユーティリティを実行します。

第 2 章: エージェントのインストール

Agent for Microsoft SQL Server は、以下の 2 種類の環境にインストールできるクライアント プログラムです。

- Microsoft SQL Server がインストールされたサーバ マシン
- Microsoft SQL Server を含む Microsoft Cluster Service クラスタの各ノードのローカル ドライブ

この章では、両方の設定における Agent for Microsoft SQL Server のインストール方法について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストールの前提条件](#) (23 ページ)

[エージェントのインストール](#) (24 ページ)

[インストール後の手順](#) (25 ページ)

インストールの前提条件

このセクションでは、標準的な Microsoft SQL Server 環境または Microsoft 2000/2005 クラスタ環境で Agent for Microsoft SQL Server をインストールするために満たす必要がある前提条件を示します。

基本的な前提条件

標準の Microsoft SQL Server 環境に Agent for Microsoft SQL Server をインストールする前に、Readme ドキュメントに記載されている情報に目を通し、基本的な構成に対する要件を満たしていることを確認します。

Microsoft SQL Server 2000、2005、および 2008 クラスタ環境での前提条件

Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 クラスタ環境に Agent for Microsoft SQL Server をインストールする前に、基本的な前提条件に加え、以下の作業を行います。

- システム管理者権限を持つ MSCS ドメイン ユーザのユーザ名とパスワードを控えておきます。
- Microsoft SQL Server の仮想サーバ名、クラスタ サーバのユーザ名、およびクラスタ サーバのパスワードを控えておきます。

- MSCS クラスタに属するすべてのノードのローカル ドライブに、初めてインストールするエージェントの一部として Agent for Microsoft SQL Server をインストールします。

エージェントのインストール

インストールの前提条件が満たされていて、必要なインストール前のタスクを実行したことを確認します。これらのタスクを完了し、必要な情報を収集したら、インストールを開始できます。

注： 同じマシンに複数バージョンの Microsoft SQL Server がインストールされている場合、マシンに登録されている SQLVDI.dll のバージョンは、Microsoft SQL Server の最新バージョンのものである必要があります。最新バージョンでない場合、最新バージョンのインスタンスに対するバックアップ処理に失敗します。

標準の Microsoft SQL Server 環境へのエージェントのインストール

標準の Microsoft SQL Server 環境に Agent for Microsoft SQL Server をインストールするには、CA ARCserve Backup のシステム コンポーネント、エージェント、およびオプションの標準的なインストール手順に従います。この手順の詳細については、「実装ガイド」を参照してください。

Agent for Microsoft SQL Server をインストールするように選択すると、[アカウントの設定]ダイアログ ボックスが表示されます。

このダイアログ ボックスで、標準の Microsoft SQL Server の各インスタンスについて適切な情報を入力します。

- [SQL 認証]または[Windows 認証]を選択します。
- Microsoft SQL Server のインスタンスのうち SQL Server 認証を指定したものについて、システム管理者権限を持つ Microsoft SQL Server ユーザのユーザ名とパスワードを入力します。

Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 クラスタ環境へのエージェントのインストール

Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 クラスタ環境に Agent for Microsoft SQL Server をインストールするには、CA ARCserve Backup のシステム コンポーネント、エージェント、およびオプションの標準的なインストール手順に従います。この手順の詳細については、「実装ガイド」を参照してください。

Agent for Microsoft SQL Server をインストールするように選択すると、[アカウントの設定]ダイアログ ボックスが表示されます。

Microsoft SQL Server 2000 または 2005 の仮想サーバの各インスタンスについて適切な情報を入力します。

- Microsoft SQL Server の仮想サーバ インスタンスを追加するには、[インスタンス]列で「新しいインスタンスを追加するには、ここをクリックしてください」と示されているセルをクリックします。
- [認証]列で、Windows 認証または SQL Server 認証のいずれかを指定します。SQL Server 認証を指定した場合は、そのインスタンスに対するシステム管理者 (sa) 権限を持つ Microsoft SQL Server ユーザのユーザ名とパスワードを入力します。パスワードを確認します。
- 各インスタンスに関連付けられている Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 の仮想サーバの名前を入力します。
- システム管理者権限を持つ MSCS ドメイン ユーザのログイン ID とパスワードを入力します。パスワードを確認します。

インストール後の手順

エージェントをインストールした後で、仮想デバイスのストライプ数など、データ転送設定をカスタマイズする必要があることがあります。

Microsoft SQL Server のエージェント用のバックアップとリストアのパラメータの設定

Microsoft SQL Agent 環境設定ユーティリティを使用すると、Agent for Microsoft SQL Server によるバックアップとリストアのパラメータを Microsoft SQL Server 7.0、Microsoft SQL Server 2000、2005、および 2008 に対して設定できます。これらのパラメータには、Microsoft VDI (Virtual Device Interface) オブジェクトの設定およびリモート通信の設定などがあります。

Agent for Microsoft SQL Server 用のバックアップとリストアのパラメータを設定する方法

1. Windows エクスプローラを開き、以下のディレクトリを参照します。
C:\Program Files\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\UniAgent
2. admin.exe という名前のファイルをダブルクリックします。
[ARCserve Backup Agent 管理]ダイアログ ボックスが開きます。
3. プルダウン リストから、[CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server]をクリックし、ツールバーの[環境設定]ボタンをクリックします。

[SQL Server DBAgent 環境設定]ダイアログ ボックスが開きます。

4. [共通設定]タブをクリックし、[エージェント ログ設定]の下の[詳細レベル]と[同期記録]を以下のとおり指定します。

詳細レベル

エージェントのアクティビティ ログとデバッグ ログに記録される詳細レベルを指定します。アクティビティ ログの設定では、詳細レベルに「通常(0)」を指定すると、エージェント アクティビティに関する基本情報がログに含まれます。「詳細(1)」を指定すると、エージェント アクティビティに関するより詳細な情報が含まれます。「デバッグ(2)」の場合は、適度に詳細なレベルでデバッグ ログに記録できます。「トレース(3)」の場合は、非常に詳細なレベルでデバッグ ログに記録できます。アクティビティ ログは、参照のためにローカライズされています。デバッグ ログは、CA サポートが使用することを想定しているため、複数の言語では使用できません。

同期記録

このオプションを有効にすると、ログ メッセージが転送されるたびにアクティビティ ログに自動的に書き込まれます。このオプションを無効にすると、複数のメッセージを取得して、グループとしてまとめて書き込むことによって、負荷の高いシステムでのパフォーマンスを改善できます。

5. [インスタンス設定]タブをクリックします。以下の画面が表示されます。

SQL Server DBAgent 環境設定

共通設定 インスタンス設定

インスタンスの選択: ARCSERVE_DB

仮想デバイス環境設定:

ストライプ数	1
バッファ数	1
データブロックサイズ (バイト)	65536
最大転送サイズ (バイト)	2097152
最大 VDI 待機時間 - バックアップ (ミリ秒)	600000
最大 VDI 待機時間 - リストア (ミリ秒)	9000000

名前付きパイプ環境設定:

最大接続待機時間 (ミリ秒)	400
----------------	-----

リストア後の処理待機時間:

ポーリング間隔 (秒)	60
最大タイムアウト待機時間 (分)	180

適用

OK キャンセル

6. デフォルトのインスタンス(MSSQLSERVER)または Agent for Microsoft SQL Server の環境設定を変更するインスタンス名 (Microsoft SQL Server 2000 および SQL Server 2005 の場合)を選択します。

7. [仮想デバイス環境設定]で、パラメータを以下のとおり設定します。

ストライプ数

バックアップに使用する CPU の数が決まります。この値をデータベースサーバに搭載されている CPU の数にすると、一般的には最高のバックアップパフォーマンスが得られます。デフォルト設定は 1 で、最大値は 32 です。

バッファ数

バックアップとリストアに使用する VDI バッファの総数(最大転送サイズのもの)です。デフォルト設定は 1 です。この数は、ストライプの数未満にはできません。

データ ブロック サイズ(バイト)

すべてのデータ転送サイズは、この値の倍数になります。値は、512 バイト以上 64 KB 以下の値で、2 の n 乗である必要があります。デフォルト設定は 65536 (64 KB)です。

最大転送サイズ

Microsoft SQL Server からデバイスに送られる最大入出力要求サイズです。これは、バッファのデータ部分です。このパラメータ値は、64 KB の倍数である必要があります。値の範囲は 64 KB から 4 MB までです。デフォルト設定は 2097152 (2 MB)です。

最大 VDI 待機時間 - バックアップ(ミリ秒)

仮想デバイス オブジェクトがバックアップ処理中に Microsoft SQL Server からの応答を待つ時間をミリ秒単位で示します。この設定はまた、一部のリストア処理などにおいて、並行処理が同期するのを待つ場合やバックグラウンド処理が完了するのを待つ場合に、エージェントによって使用されます。デフォルト設定は、60000 ミリ秒(10 分間)です。

最大 VDI 待機時間 - リストア(ミリ秒)

仮想デバイス オブジェクトがリストア中に Microsoft SQL Server からの応答を待つ時間をミリ秒単位で示します。リストアされるデータベースのデータベースファイルが大容量の場合、この値を大きくします。デフォルト設定は、9000000 ミリ秒(2.5 時間)です。

8. [名前付きパイプ環境設定]で、リモート接続に失敗した場合に、Agent for Microsoft SQL Server が名前付きパイプを閉じるまで待機する時間(最大接続待機時間)をミリ秒単位で指定します。デフォルト設定は 400 ミリ秒です。

9. [リストア後の処理待機時間]のパラメータは、以下のとおり設定します。

ポーリング間隔(秒)

データベース ステータスの確認を行う間の待ち時間です。デフォルト設定は、60 秒(1 分間)です。

最大タイムアウト待機時間(分)

待機プロセスを終了するまでの待ち時間です。タイムアウト待機時間が経過しても、リストアするトランザクション ログ セッションがジョブにある場合、SQL Server の準備ができていないため、それらのセッションは失敗する可能性があります。デフォルト設定は、180 分(3 時間)です。

10. [適用]をクリックして、変更した設定をそのインスタンスに適用します。

別のインスタンスの設定を変更する場合、ドロップダウン リストから該当するインスタンスを選択して、ステップ 4 に戻ります。

第 3 章: バックアップと復旧計画の作成

データの損失は、1 つのディスク ドライブ上の 1 つのファイルのみの場合から、データセンター全体にわたる場合まであります。理想的には、保守が必要な各データベースごとに計画を作成する必要があります。計画の際には、ビジネス上の重要性に加え、データベース サイズやアクティビティについても考慮してください。この重要な分析フェーズでの決定が、CA ARCserve Backup で使用できるバックアップおよびリストアのオプションを決定することになります。以下の情報を使用して、計画を作成してください。

重要: SQL Server データベースの設定に必要な情報については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Microsoft SQL Server データベースに関する基本知識](#) (31 ページ)
[バックアップの概念](#) (39 ページ)
[リストアの概要](#) (48 ページ)

Microsoft SQL Server データベースに関する基本知識

CA ARCserve Backup を使用して Microsoft SQL Server データベースを最適な方法でバックアップするため、データベースに関する以下の基本情報を参照してください。

データベースはテーブルの集合であり、行とレコードから構成されています。各行には列があり、レコードに関する構造化された情報が含まれます。データベースのデータは、データ ファイルとログ ファイルの 2 種類のオペレーティング システム ファイルに保存されています。

- データ ファイル -- ユーザ データおよびメタデータを含みます。
 - プライマリ データ ファイル -- データベースを構成するほかのファイルへの参照を含む、データベース自体に関する情報を含みます。ユーザ定義のデータおよびオブジェクトは、通常はセカンダリ データ ファイルに保存されますが、単純なデータベースでは、プライマリ データ ファイルに保存されることがあります。各データベースには、1 つのプライマリ データ ファイル(.mdf)があります。
 - セカンダリ データ ファイル -- 営業関連の数字や、従業員情報、製品の詳細など、ユーザ定義のデータおよびオブジェクトを含みます。データベースの拡張を管理するため、複数のディスクにわたるデータベース 情報を保存するには、セカンダリ データファイル(.ndf)を使用してください。

データ ファイルには、フル テキスト検索カタログが含まれ、これにより、データベースに格納されたフル テキスト カタログを検索できます。実際にはデータ ファイルではありませんが、FILESTREAM データを使用して、通常はデータベースの外に格納されるビデオ、写真、およびその他のドキュメントを格納して、データベース内のファイルとして扱うことができます。

- ログ ファイル -- 惨事が発生した場合に特定の時点までデータベースをリストアするのに必要な、トランザクション レベルの情報を含みます。各データベースには、少なくとも 1 つのログ ファイル(.ldf)があり、必要に応じて追加することができます。

SQL Server では単一ディスク システムがサポートされていますが、データとログ ファイルは別々のディスクに保存してください。

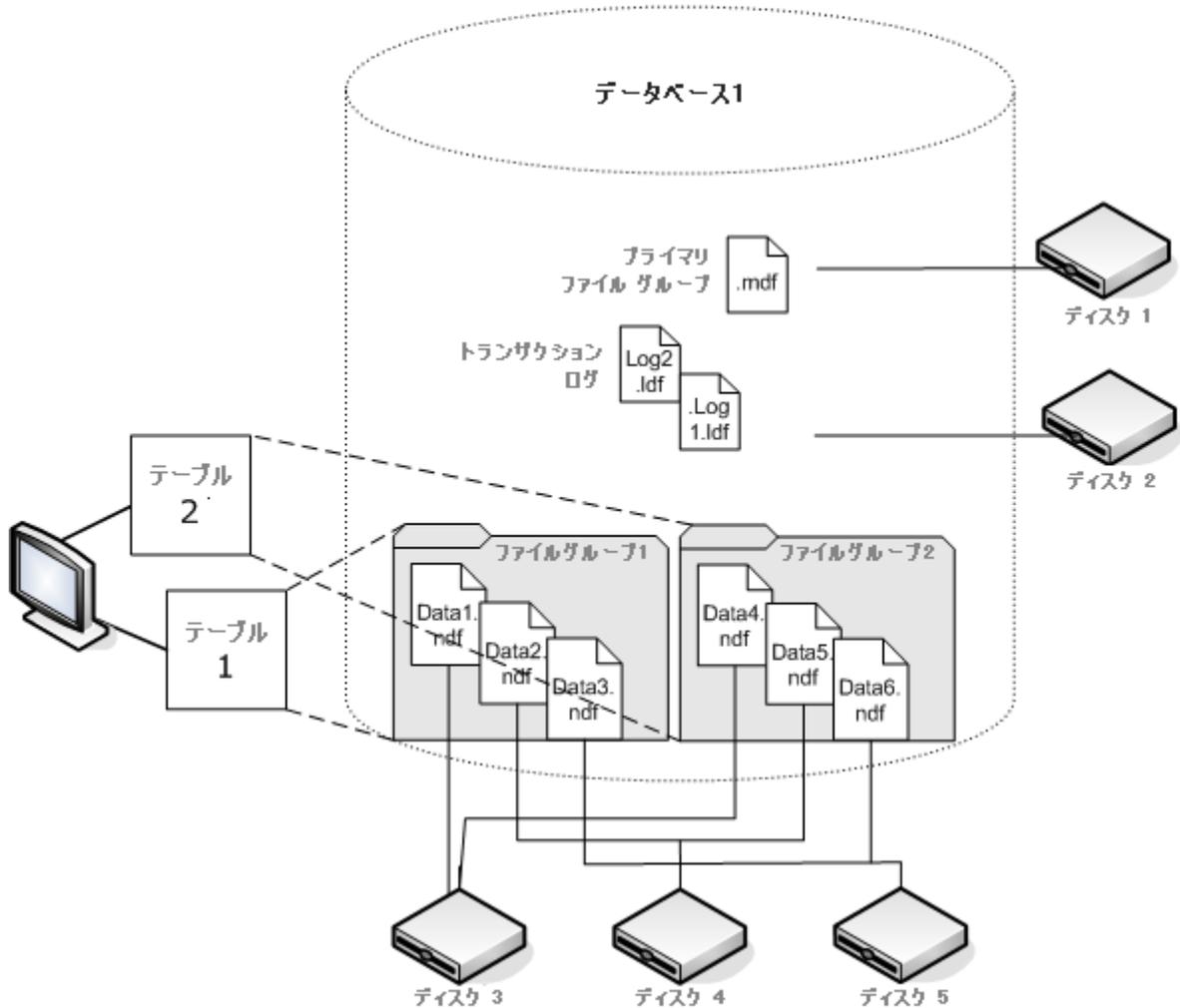
ファイルとファイル グループ

各データベースには、プライマリ ファイル グループがあります。デフォルトでは、プライマリ データ ファイル、および、作成されたセカンダリ データ ファイルはプライマリ ファイル グループに保存されます。しかし、セカンダリ ファイルの保存用として、ユーザ定義のファイル グループを作成することができます。ファイル グループは、データベースのパフォーマンスや拡張の管理、データ割り当てなどに使用します。

注: ファイルは 1 つのファイル グループにのみ含まれます。1 つのファイルまたはファイル グループは、1 つのデータベースによってのみ使用されます。トランザクション ログ ファイルはファイル グループには含まれません。

例

以下の図は、6 つのユーザ定義セカンダリ データ ファイル(.ndf)が 2 つのユーザ定義ファイル グループにグループ化され、3 つの異なるディスクに保存されている状態を示しています。各ファイル グループごとにテーブルを作成することができ、テーブル内のデータのクエリを同時に 3 つのディスクに割り当てることができるため、パフォーマンスの向上が可能です。トランザクション ログおよびプライマリ データ ファイルはユーザデータとは別に保存されることにも注意してください。



フル テキスト検索カタログ

SQL Server 2005 では、1 つ以上のフル テキスト カタログのバックアップおよびリストアを可能にするフル テキスト検索機能が追加されました。データベースのデータと共にカタログをバックアップしたり、データベース データとは別にバックアップすることが可能です。

1 つのデータベースは 1 つ以上のフル テキスト カタログを持つことができますが、1 つのカタログは 1 つのデータベースにしか属することができません。1 つのフル テキスト カタログは、1 つ以上のテーブルについて作成されたフル テキスト インデックスを持ちますが、1 つのテーブルは 1 つのフル テキスト インデックスしか持つことができません。

フル テキスト カタログは、通常のデータ ファイルには含まれませんが、データベース内のファイルとして扱われるため、バックアップが可能なデータベース ファイル セットに含まれます。フル テキスト カタログは、完全(フル)バックアップまたは差分バックアップ、およびリストアが可能です。特定のテーブルについて作成された個々のフル テキスト インデックスは、ファイル グループに割り当ててから、通常通りバックアップまたはリストアを実行することができます。

FILESTREAM データ

SQL Server 2008 では、FILESTREAM ストレージが導入されました。FILESTREAM データは、概して非常に大きく、構造化されていないデータで、通常はデータベースの外に保存されます。テキスト文書や画像、ビデオ、音楽ファイルなどです。SQL Server 2008 では、FILESTREAM データは、FILESTREAM オブジェクト自体ではなく、ファイル システム ディレクトリのみを含む別のファイル グループに保存されます。

注: 大容量の FILESTREAM コレクションは予測に大幅に時間がかかるため、プロパティ リストの生成が遅くなります。

パフォーマンスの向上方法

I/O 時間の短縮

高トラフィックが予想されるテーブルと、そうでないテーブルとを分離して、別々のファイル グループに入れます。高トラフィックのテーブルはパフォーマンスの高いディスクに保存し、それ以外のファイルは別のファイル グループとして別のディスクに保存します。こうすることで、高トラフィックのテーブルへのクエリは、最も速いデバイスに対して行われることとなります。

ファイルおよびファイル グループは、できるだけ多くの異なるデバイス上に作成します。こうすると、これらのテーブルへのクエリが複数の読み取り/書き込みデバイスで処理されます。

同じクエリで使用される複数のテーブルは、別々のファイル グループに入れると、データ検索を同時平行で実行できます。

トランザクション ログ ファイルは、データ ファイルを含まないディスクに保存します。

Microsoft SQL Server 2005 以降では、複数のファイル グループにテーブルをパーティション分割して、クエリ アクセス時間を短縮し(クエリはデータ全体ではなく一部をスキャンします)、インデックスの再構築などのタスクを単純化させることができます。行方向または列方向のパーティション分割を検討してください。詳細については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

バックアップおよび復旧

ファイルおよびファイル グループを割り当てる際は、データの安定性を考慮してください。たとえば、履歴として使用する静的データは、読み取り専用のファイル グループに割り当てます。SQL 2005 以降の場合、「データベースの一部」オプションを使用して、読み取り専用のファイル グループをバックアップ計画から除外し、バックアップ時間を短縮します。

複数のファイル グループを使用するデータベース内のファイルを個別にリストアすることができます。データベースが複数のデバイスに割り当てられており、ディスクの 1 つに障害が発生した場合、そのディスク上のファイルのみをリストアすればよいこととなります。

データベースの拡張

データ量の増加スピードが速いと予想されるファイルは、別のファイル グループまたはデバイスに保存します。

ファイル、ファイル グループ、部分バックアップ/リストアによるデータベースのパフォーマンス最適化を利用できるように、データベースの物理レイアウトを考慮してください。

ファイルがいっぱいになったら、既存のファイル グループにファイルおよびディスクを追加して、SQL Server が新しいファイルにデータを保存できるようにします。

パーティション分割

SQL Server 2005 では、パーティション分割という手法が導入されました。これは、1 つのクエリ実行中に読み取るデータ量を制限することで、大規模なデータ セットの管理を容易にします。 テーブルのパーティション分割には 2 種類あります。

列方向のパーティション分割

データへのアクセス傾向を分析します。 テーブルを列方向にパーティション分割すると、ファイル グループには、同じ数の列と、より少ない数の行を含むこととなります。 この分割は、時間の経過と共に蓄積されるデータを含むテーブルに対してよく行われ、クエリで検索される対象期間を短くすることができます。

行方向のパーティション分割

テーブルを行方向にパーティション分割すると、ファイル グループには、より少ない数の列と同じ数の行を含むこととなります。 行方向のパーティション分割には 2 種類あります。

正規化

テーブルにある重複する列を、プライマリ キーで関連付けられたより小さいテーブルに移動します。

行分割

テーブルを、列数が少ない複数の小さいテーブルに分割します。各テーブルの n 番目の行は、連結させると元のテーブルの行になります。

パーティション分割されたテーブルは、データベースの複数のファイル グループに分割することができます。 パーティション分割を計画する際は、パーティションを作成するファイル グループを 1 つまたは複数指定してください。 別々のファイル グループにパーティションを割り当てると、独立したバックアップおよびリストアを実行することができます。

データベース ミラーリング

SQL Server 2005 では、データベースの可用性を向上させる、データベース ミラーリングという手法が導入されました。 データベース ミラーリングでは、異なる場所のコンピュータ上に存在する 2 つのデータベースの 1 つがプリンシパル サーバとして、もう 1 つがミラー サーバとして機能します。 データベース ミラーリングは、完全復旧モデルを使用するデータベース上でのみ許可されており、master、msdb、model の各データベースでは許可されていません。

ミラー サーバとして機能するデータベースはバックアップすることができません。 このため、これらのデータベースが「アクティブ」にならない限り、CA ARCserve Backup はこれらのデータベースを表示しません。 ただし、SQL Server 全体をバックアップするように選択すると、ミラーリングされたデータベースがアクティブになり、ジョブが作成されたときに「ミラー」として機能していた場合でも、デフォルトでバックアップに含まれます。

復旧モデル

SQL Server の復旧モデルとは、惨事が発生した場合に、トランザクション ログを使用し、損失データのリスクを管理する方法です。データベースごとに異なる復旧モデルを採用して、データベース保守管理を行うことができます。

1 つの SQL Server インスタンスにおいて、データベースに以下の復旧モデルを混在させることができます。

- 単純復旧モデル -- 直前のバックアップまでしかデータベースを復旧させることができません。トランザクション ログ バックアップは許可されておらず、直前のバックアップより後に実行された作業は再度実行する必要があります。SQL 2005 以降ではデータベースの部分バックアップは許可されていますが、ファイルおよびファイル グループのバックアップは許可されていません。直前のバックアップより後のすべての変更について、データ損失の危険性があります。
- 完全復旧モデル -- 惨事が発生した時点までデータベースを復旧させることができます。特定の時点まで復旧させるには、トランザクション ログ バックアップを含める必要があります。ファイルおよびファイル グループのバックアップ、または、データベース差分バックアップも任意で含めることができます。これは、データ損失の危険性が最も低く、復旧中の柔軟性が最も高いモデルです。
- 一括ログ復旧モデル -- 高パフォーマンスのバッチ処理ができます。トランザクション ログのバックアップが必要ですが、直前のバックアップまでしか復旧させることができません。トランザクション ログを定期的に切り捨てるために、トランザクション ログ バックアップを実行する必要があります。ファイルおよびファイル グループのバックアップ、または、データベース差分バックアップも任意で含めることができます。

Microsoft SQL Server のバージョン、および、データベースに継承された復旧モデルによっては、CA ARCserve Backup のバックアップ オプションの中に使用できないものがある場合があります。

バックアップ方式	単純復旧モデル	完全復旧モデル	一括ログ復旧モデル
データベース フル	必要	必要	必要
データベース差分 ¹	オプション	オプション	オプション
トランザクション ログ	使用できません	必要	必要
ファイルおよびファイル グループ ³	使用できません	オプション	オプション
データベースの一部 ²	オプション	オプション	オプション
データベースの後にトランザクション ログをバックアップする		オプション	オプション

注:

¹ このオプションは、master データベースでは使用できません。

² このオプションを使用するには、Microsoft SQL Server 2005 以降のバージョンが必要です。部分バックアップはフル バックアップまたは差分バックアップの場合があります。

³ ファイルおよびファイル グループの差分バックアップには SQL 2000 以降のバージョンが必要です。ファイルおよびファイル グループ バックアップは、フル バックアップまたは差分バックアップの場合があります。

システム データベース

CA ARCserve Backup を使用して SQL Server システム データベースを管理および保護できます。

master データベース

master データベースは、SQL Server インスタンス用のすべてのシステム レベル情報を保存します。

msdb データベース

msdb データベースは、SQL Server の Automation Agent サービスがアラートおよびジョブをスケジュールするのに必要なすべての情報を保存します。

model データベース

model データベースは、SQL Server インスタンス上に作成されるすべてのデータベースのテンプレートとして機能します。これには、データベースのサイズ、復旧モデル、その他のオプションなど、作成した各データベースによって継承されるメタデータが保存されます。

リソース データベース (SQL Server 2005 以降)

リソース データベース ファイルは読み取り専用です。これには、SQL Server に必要なシステム オブジェクトが含まれます。アクティブ データベースとしてマウントされていないため、ファイルはデータベース バックアップではなくファイル システム バックアップに含まれます。

tempdb データベース

tempdb データベースには、メモリ常駐型オブジェクトや、クエリ操作に必要な結果などの一時オブジェクトが保存されます。

ディストリビューション データベース

サーバがレプリケーション ディストリビュータとして設定されている場合は、レプリケーション ディストリビューション データベースも使用できます。このデータベースは、レプリケーション トランザクションに関するメタデータおよび履歴情報を保存し、レプリケーション データベースとして参照される場合もあります。

拡張 SQL Server サービス向けデータベース

特定の機能やセカンダリ サーバのコンポーネントおよびサービスによって、追加的なデータベースが作成され、使用される場合があります。ほとんどの場合、これらは通常の運用データベースと同様の方法で処理されます。

重要: 3 種類の主要システム データベース (master、msdb、model) は、グローバル ジョブ バックアップ方式、またはローテーション ジョブ バックアップ方式の対象外です。これらの方式を選択しても、結果はフル バックアップになります。

Microsoft SQL Server クラスタ環境でのバックアップとリストアに関する考慮事項

CA ARCserve Backup では、Microsoft Clustering Server (MSCS) 環境のクラスタ化された Microsoft SQL Server をサポートします。

CA ARCserve Backup と Agent for Microsoft SQL Server を使用して、クラスタ化されている Microsoft SQL Server をバックアップおよびリストアする方法は、基本的にはクラスタ化されていない通常の Microsoft SQL Server インスタンスの場合と同じです。ただし、以下の重要な相違点があります。

- Agent for Microsoft SQL Server を、クラスタのすべてのノードのローカル ドライブにインストールする必要があります。

注: Agent for Microsoft SQL Server のインストールについては「標準の Microsoft SQL Server 環境へのエージェントのインストール」を参照してください。

- バックアップ ジョブの実行中に、クラスタ化された Microsoft SQL Server インスタンスのノードでフェールオーバーが発生すると、バックアップ ジョブも失敗し、メークアップ ジョブが生成されていない場合はジョブの再実行が必要になります。

バックアップの概念

バックアップとは、別のデバイス(通常はメディア ドライブ)に保存されたデータベース、トランザクション ログ、ファイルまたはファイル グループの集合のコピーまたはイメージのことです。差分バックアップとは、データベースに対して加えられた変更または差分の集合で、以前のバックアップとあわせて、より最新のイメージを作成します。CA ARCserve Backup と Agent for Microsoft SQL Server を使用して、SQL Server の BACKUP ステートメントによるバックアップを生成することができます。

データベースのバックアップとは、データベースのテーブル、データ、およびユーザ定義オブジェクトのコピーを作成することです。データベースおよびトランザクション ログを定期的にバックアップしておく、障害が発生した場合でも、データベースを回復できます。

重要: データベースのフル バックアップおよび差分バックアップでは、トランザクション ログはバックアップも切り捨ても行われません。トランザクション ログのバックアップおよび切り捨てを行うには、トランザクション ログ バックアップを別途実行するか、[データベースの後にトランザクション ログをバックアップする]を使用し、[アクティブでないエントリをトランザクション ログから削除する]を選択してログ ファイルを切り捨てます。トランザクション ログのバックアップの詳細については、この章の「トランザクション ログ バックアップ」を参照してください。

CA ARCserve Backup を使用して、Microsoft SQL Server データベースのバックアップを開始すると、Agent for Microsoft SQL Server はデータベースまたはトランザクション ログのオンライン バックアップを開始します。データベースが使用中であっても、バックアップが実行されます。ただし、バックアップされるデータは、ステートメントが実行された時点の状態になります。実行中のトランザクションはバックアップされません。バックアップを開始した後に変更されたデータは、データベースのバックアップ コピーには取り込まれません。

バックアップの考慮点

作成したら、直ちにデータベースをバックアップし、その後は、データベースまたはメディアに障害が発生したときに、スムーズかつ確実にデータベースを回復できるよう、定期的なバックアップをスケジュールします。以下のデータベースを含め、すべてのデータベースを定期的にバックアップするようにします。

- master データベース、msdb データベース、および model データベース
- すべてのユーザ データベースおよびすべての SQL Server 拡張サービス データベース
- distribution データベース(サーバがレプリケーションのディストリビューション サーバとして設定されている場合)

Microsoft SQL Server 2005/2008 のミラー データベースと Point-in-Time スナップショットはバックアップできません。データベース リストにも表示されません。データベースのミラーリングおよび Point-in-Time スナップショットの詳細については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

バックアップ ジョブ中に特定のファイルが除外されます。CA ARCserve Backup には、バックアップ ジョブにファイルを含めたりスキップしたりする際に使用できるレジストリ キーが 2 つあります。使用しているデータベース エージェントのタイプによって、ファイルの制御に使用するレジストリ キーが決まります。バックアップ ジョブの実行中に SQL データベース ファイルを含めるには、レジストリ キー BackupDBFiles を「1」に設定します。SQL データベース ファイルには、SkipDSAFiles を使用しないでください。詳細については、[「バックアップ時のデータベース ファイルのスキップまたは組み込み」](#) (114 ページ)のトピックを参照してください。

重要: バックアップを実行するとシステムの実行速度が低下する場合があります。バックアップ パフォーマンスを向上させ、データベースを使用したアプリケーションに対する影響を最小限に抑えるため、データベースが頻繁に更新されていないときにバックアップを実行するようにします。

必要なフル バックアップ

データベース管理タスクの中には、実行後の次のバックアップでデータベースのフルバックアップが必要となるものがあります。そのようなタスクを実行した後で、データベースの差分バックアップ、トランザクション ログ バックアップ、一部のデータベースのバックアップ(フルまたは差分)を行った場合、そのバックアップと最新のフル バックアップを使用しても、データベースを正しくリストアできない場合があります。

この問題を回避するために、以下のいずれかの操作を行った後はデータベースのフルバックアップを行います。

- 新しいデータベースを作成した場合
- データベースの復旧モデルを変更した場合
- データベースのファイルまたはファイル グループの数を変更した場合
- ファイル グループ間のファイルの編成を変更した場合
- ファイル グループ間のテーブルの編成を変更した場合
- パーティション化されたテーブルまたはインデックスのパーティション スキームを変更した場合
- フル バックアップ ジョブを実行中にキャンセルした場合
- データベース定義を変更した場合(テーブルの追加や削除、テーブル定義の変更など)
- インデックスを追加または削除した場合
- バックアップからデータベースをリストアした場合

データベースの整合性チェック

データベースの稼働率が低い(特に大規模なデータベースの場合)は、データベースの整合性チェック(DBCC)を実行する必要があります。この処理には時間を要しますが、Microsoft SQL Server データベースが十分な機能を発揮しているかどうかを判定するために必要な作業です。

DBCC では、データベースの物理的および論理的な整合性がテストされます。バックアップの[データベースの整合性チェック]オプションを有効にすると、DBCC が以下のテストを実行します。

- **DBCC CHECKDB** - 指定したデータベース内にあるすべてのオブジェクトの割り当てと構造上の整合性をチェックします。デフォルトでは、インデックスのチェックが行われます。これにより、実行時間が増加する場合があります。
- **DBCC CHECKCATALOG** - 指定したデータベースの複数のシステム テーブル内、およびテーブル間の整合性をチェックします。

推奨されるバックアップ方法

バックアップ方法については、以下の方法をお勧めします。

- データベースのアクティビティが低から中程度の場合、以下の頻度をお勧めします。
 - フル バックアップ: 週 1 回
 - 差分バックアップ: 1 日 1 回
 - トランザクション ログ バックアップ: 2 ~ 4 時間ごと
- データベースのアクティビティが高レベルで、サイズが小規模から中規模である場合は、以下の頻度をお勧めします。
 - フル バックアップ: 週 2 回
 - 差分バックアップ: 1 日 2 回
 - トランザクション ログ バックアップ: 1 時間ごと
- フルまたは一括ログ復旧モデルを使用した大規模なデータベースで、データベースのアクティビティが高レベルの場合、以下の頻度をお勧めします。
 - フル バックアップ: 週 1 回
 - 差分バックアップ: 1 日 1 回
 - トランザクション ログ バックアップ: 20 分ごと
- 単純復旧モデルを使用した大規模なデータベースで、データベースのアクティビティが高レベルの場合、以下の頻度をお勧めします。
 - フル バックアップ: 週 1 回
 - 差分バックアップ: 1 日 2 回

フル バックアップ

データベースのフル バックアップは、バックアップ コマンドを実行した時点のデータベース全体のコピーを作成します。これには最後のバックアップからデータが変更されているかどうかに関係なく、すべてのスキーマ データ、ユーザ データ、ファイルとファイル グループ、およびトランザクション ログの一部が含まれます。ただし、トランザクション ログのバックアップをこれとは別に定期的に行うことが重要です。ログ ファイル全体を取得し、ログが大きくなりすぎる前にログを切り捨てることができます。

フル バックアップは、[エージェント オプション]の[バックアップ方式]、[グローバル エージェント オプション]、またはジョブ スケジューラの[ローテーション オプション]から選択できます。

[エージェント オプション]ダイアログで、[バックアップ方式]に[フル]を選択した場合は、[データベース サブセット]オプションを設定し、バックアップ ジョブをきめ細かく制御できます。例：

- [フル]バックアップ方式を選択し、[データベース サブセット]の[データベース全体]を組み合わせることで、すべてのスキーマ、データ、ファイルとファイル グループを、データが変更されているかどうかに関係なくバックアップできます。
- [フル]バックアップ方式を選択し、[データベース サブセット]の[ファイルとファイル グループ]を組み合わせることで、特定のファイル グループ内のすべてのファイルをまとめてバックアップできるほか、特定のデータ ファイルを隔離できます。ファイル グループを使用して読み取り/書き込み可能ファイルから読み取り専用ファイルを分離する場合、これが読み取り専用ファイル グループをバックアップする頻度を制限する 1 つの方法です。
- [フル]バックアップ方式を選択し、[データベース サブセット]の[データベースの一部]を組み合わせることで、データが変更されているかどうかに関係なく、すべての読み取り/書き込みファイル グループ(プライマリ ファイル グループを含む)のすべてのファイルをバックアップできます。

差分バックアップ

差分バックアップでは、最後にデータベースのフル バックアップ(データの同じ部分/同じデータ ファイル/同じデータベース サブセットの)が行われてから変更されたデータのみが記録されます。通常は、差分バックアップのデータ量はデータベースのフル バックアップよりも少ないため、短時間で終了することができますが、トランザクション ログのバックアップよりはデータ量が多いため、時間がかかります。最新の差分バックアップ データでリストアを実行するには、少なくとも最後に実行されたフル バックアップのデータが必要になります。最後のフル バックアップとこの差分バックアップの間に実行された差分バックアップやトランザクション ログのバックアップのデータは必要ありません。差分バックアップからのリストアは、トランザクションを再処理する必要がないため、トランザクション ログからのリストアよりも短時間でリストアできます。

注: データベースの稼働率が高い場合や最後にフル バックアップを行ったときから長時間が経過している場合、差分バックアップにフル バックアップと同じくらい時間がかかることがあります。

差分バックアップのタイミング

差分バックアップは、フル バックアップを補うために実行します。差分バックアップは、実行時間が短くデータ量が少ないため、データベースのフル バックアップよりも頻繁に実行することができます。頻繁なデータベースのフル バックアップよりもバックアップ用のメディアに必要な容量が小さく、データベースのパフォーマンスに対する影響も少ないため、効率も高くなります。また、差分バックアップを使用すると、リストア中に回復するトランザクション ログの数を最小にすることができます。これは、差分バックアップ以降のトランザクション ログ バックアップのみをリストアするだけでよいからです。

以下の場合には差分バックアップが最適です。

- データベースの最後のフル バックアップ以降に追加された変更が、比較的小規模の場合。特に、差分バックアップは、同じデータが頻繁に変更される場合に実行すると最も効率的です。
- トランザクション ログのバックアップを実行できない単純復旧モデルを使用しており、頻繁にバックアップを実行したいが、データベースのフル バックアップは非効率的な場合。
- 完全復旧モデルまたは一括ログ復旧モデルを使用したデータベースのリストア時に、トランザクション ログのバックアップを再生する時間を最小限に抑えたい場合。

注: データベース ファイルやログ ファイルを追加した場合、復旧モデルを変更した場合など、データベースの構造や設定を変更した後は、差分バックアップおよびトランザクション ログのバックアップを実行する前に、データベースのフル バックアップを実行する必要があります。詳細については、「[必要なフル バックアップ](#) (41 ページ)」を参照してください。

トランザクション ログ バックアップ

トランザクション ログは Microsoft SQL Server データベース アクティビティを記録します。完全復旧モデルまたは一括ログ復旧モデルを使用する場合は、頻繁にバックアップしてください。トランザクション ログをバックアップするには、データベースのバックアップとは別に、独立したトランザクション ログのバックアップを実行します。トランザクション ログのバックアップには、他のバックアップと比べて、以下のような利点を提供します。

- 一般的に差分バックアップよりも短時間
- 一般的にフル データベース バックアップよりも高速で小規模(最近切り取られていない限り)
- 一般的に、実行中にデータベースのパフォーマンスに与える影響が最小限
- 通常、バックアップを実行した時点の状態ではなく、特定の時点での状態にリストアすることが可能

データベース ファイルやログ ファイルを追加した場合、復旧モデルを変更した場合など、データベースの構造や設定を変更した後は、差分バックアップおよびトランザクション ログのバックアップを実行する前に、データベースのフル バックアップを実行する必要があります。詳細については、「[必要なフル バックアップ](#) (41 ページ)」を参照してください。

破損したデータベースのトランザクション ログ バックアップが可能な場合があります。データベースが[問題あり]または[破損]状態でも、そのトランザクション ログ ファイルが保持されている場合は、切り捨てなしでトランザクション ログ バックアップを実行できます。これにより、データベースを障害発生直前の状態に回復することができます。

重要: データベースのフル バックアップおよび差分バックアップでは、トランザクション ログはバックアップされません。別のトランザクション ログ バックアップを実行するか、または[データベースの後にトランザクション ログをバックアップする]オプションを使用してバックアップする必要があります。トランザクション ログはトランザクション ログ バックアップの一部としてのみ切り捨てられます。バックアップおよび切り捨てが行われない場合は、ディスクがいっぱいになるまで増え続ける可能性があります。この問題が発生した場合は、切り捨てによるトランザクション ログ バックアップを実行し、トランザクション ログ ファイルを圧縮してディスク容量を解放する必要があります。SQL 2005 以降でログ ファイルのサイズをかなり縮小するには、切り捨てによる複数のログ バックアップが必要になります。

注: 単純復旧モデルを使用しているデータベースは、トランザクション ログ バックアップを許可または必要としません。Microsoft SQL Server は、これらのデータベースのトランザクション ログのメンテナンスを自動的に管理します。

トランザクション ログの切り捨て

トランザクション ログは、バックアップのときに切り捨てることができます。トランザクション ログを切り捨てるには、バックアップを設定するときに[アクティブでないエントリをトランザクション ログから削除する]オプションを選択します。トランザクション ログを切り捨てないと、サイズが大きくなる可能性があります。

ファイルおよびファイル グループのバックアップ

データベースのサイズやパフォーマンスによっては、データベースのフル バックアップを行うのが効率的ではない場合があります。このような場合は、1 つまたは複数のファイル グループやファイルを選択し、バックアップを行います。

データベース全体ではなくファイル単位でバックアップをする場合は、データベースにあるすべてのファイルが必ず定期的にバックアップされるようなバックアップ手順を確立し、ファイルやファイル グループを個別でバックアップするデータベースのトランザクション ログのバックアップを別途実行する必要があります。ファイルのバックアップをリストアしたら、続けてトランザクション ログ バックアップを適用して、データベース全体と整合性を保つ必要があります。詳細については、MS SQL Server のマニュアルを参照してください。

Microsoft SQL Server 2000 またはそれ以降では、ファイルとファイルグループのフルおよび差分バックアップの両方が実行できます。ファイルとファイルグループの差分バックアップが実行された場合、このセッションのリストアでは、リストアされる各ファイルに対して最後に実行されたフル バックアップが使用されます。共通のファイルを含む異なるファイル セットでフルおよび差分バックアップを実行した場合、ARCserve ではこれらのバックアップをリストアするための正しい従属関係を構築できないため、手動で構築することが必要になります。

重要: Microsoft SQL Server 7.0 および 2000 の場合、データベースの差分バックアップでは、前回のデータベース フル バックアップの後に行われたファイルとファイル グループのフル バックアップは一切使用されません。SQL Server 2005 以降では、データベースの差分または部分差分バックアップを行うと、前回のフル バックアップ後に行われたすべてのフル バックアップ (ファイルとファイル グループ、一部のデータベースなど) が使用されます。自動選択機能は、この状況を検出できません。そのため、SQL Server 2005 で、ファイルとファイル グループのバックアップを、データベースの差分および一部の差分バックアップと併せて行う場合、リストア順序を手動で指定する必要があります。

注: ファイルとファイルグループのバックアップから、データベース全体または一部のリストアを実行することはできません。ファイルとファイルグループのバックアップからは、ファイルとファイルグループのリストアのみを実行できます。

CREATE INDEX ステートメントがファイルおよびファイル グループのバックアップに与える影響

CREATE INDEX ステートメントの影響を受ける場合、そのファイル グループ全体をバックアップする必要があります。これは以下の状況で必要になります。

- あるファイル グループにインデックスを作成すると、1 回のバックアップ操作でファイル グループ全体をバックアップする必要があります。Microsoft SQL Server では、インデックス作成の影響を受けたファイル グループに属するファイルを個別にバックアップすることはできません。
- テーブルが存在するファイル グループとは異なるファイル グループにインデックスを作成した場合は、両方のファイル グループ(テーブルが存在するファイル グループと作成したインデックスが存在するファイル グループ)を同時にバックアップする必要があります。
- テーブルが存在するファイル グループとは異なるファイル グループに複数のインデックスを作成した場合は、すべてのファイル グループを同時にバックアップする必要があります。

BACKUP ステートメントは、これらすべてのファイル グループの状況を検出して、バックアップが必要な最小限の数のファイル グループを通知します。Microsoft SQL Server では、バックアップ ジョブの実行時にエラー メッセージでこの情報を報告します。この情報は、Agent for Microsoft SQL Server により、アクティビティ ログに書き込まれます。

部分バックアップ

Microsoft SQL Server 2005 では、部分バックアップと呼ばれる特別なタイプのファイルとファイルグループのバックアップが導入されています。このバックアップでは、プライマリ ファイル グループと、読み取り専用以外のすべてのファイルグループが自動的に選択されます。データベース自体が読み取り専用の場合、プライマリ ファイルグループのみが含まれます。

通常のファイルとファイルグループのバックアップとは異なり、部分バックアップは、単純復旧モデルを使用するデータベースで実行できます。変更可能なすべてのデータが対象となるからです。読み取り専用のファイル グループに大量の静的データを含む大規模なデータベースの場合、部分バックアップを使用することにより、定期的なバックアップの実行に必要なサイズと時間を削減できます。最新のフル データベース バックアップを維持し、データベース構造が変更されない限り、フル データベース バックアップを再実行せずに、部分的なフルおよび差分バックアップを使用できます。

また、すべての対象のファイルグループが部分バックアップ セッションに含まれている場合、部分バックアップから部分リストアを実行できます。前回、データベースのフルバックアップを実行していれば、部分バックアップからデータベースのリストアを実行することもできます。

注: 単純復旧モデルを使用している場合、部分フル バックアップの後は、再度データベースのフル バックアップを実行してからでないと、データベース差分バックアップを実行することはできません。すべてのリカバリ モデルに対して、データベース差分バックアップの後に部分フル バックアップを実行する場合、部分フル バックアップはデータベース差分バックアップに基づいて行われます。

重要: SQL Server 7.0 および 2005 の場合、データベースの差分バックアップでは、前回のデータベース フル バックアップの後に行われたファイルとファイル グループのフル バックアップは一切使用されません。SQL Server 2005 以降では、データベースの差分または部分差分バックアップを行うと、前回のフル バックアップ後に行われたすべてのフル バックアップ(ファイルとファイル グループ、一部のデータベースなど)が使用されます。自動選択機能は、この状況を検出できません。そのため、SQL Server 2005 で、ファイルとファイル グループのバックアップを、データベースの差分および一部の差分バックアップと併せて行う場合、リストア順序を手動で指定する必要があります。

リストアの概要

「リストア」とは、データベースのバックアップおよび必要な場合 1 つ以上のトランザクション ログのバックアップから、データベースをロードすることです。データベースが消失したり損傷したりした場合、最新のデータベース バックアップとそれ以降のログ バックアップを再ロードすることによって、データベースをリストアできます。リストアすると、データベース内の情報はバックアップの情報で上書きされます。CA ARCserve Backup と Agent for Microsoft SQL Server では、Microsoft SQL Server の RESTORE ステートメントによるリストアを実行できます。

オンラインで稼働中のデータベースをリストアするとき、Microsoft SQL Server は、リストア ジョブが始まった時点でコミットされていないがアクティブであったトランザクションをロールバックします。リストアが完了すると、データベースはそのリストアで使用したバックアップの BACKUP ステートメントが開始されたときと同じ状態になります。ただし、その時点で実行中だったトランザクションはリストアされません。

バックアップからデータがリストアされると、Microsoft SQL Server は残りの未使用のページをすべて再初期化します。たとえば、100 MB のサイズを持つデータベースに格納されているデータが 5 MB のみでも、Microsoft SQL Server は 100 MB の領域をすべて書き換えます。したがって、データベースのリストアには、少なくとも同サイズのデータベースを作成する場合と同じ時間がかかります。

リストア中、データベースは Microsoft SQL Server によってロックされるため、データベースを変更することはできません。ただし、ユーザは、このときでも他の Microsoft SQL Server データベースにアクセスしたり修正したりすることはできます。

注：ユーザがデータベースにアクセスしている際にリストアが試行されると、Microsoft SQL Server はリストア処理を実行できません。

重要：デフォルトでは、Microsoft SQL Server 2005 は、データベースがオンラインで、フルまたは一括ログ 復旧モデルを使用している場合、リストア処理を許可しません。このようなデータベースをリストアするには、トランザクション ログのバックアップを実行して (ログの末尾のバックアップを使用) データベースをオフラインにし、トランザクションが失われないようにします。または、[すべてのファイルを上書きする] オプション (「WITH REPLACE」) でリストアする必要があります。これに対する唯一の例外は、[破損ページの修正 - オンライン] です。

データベースのリストア中に障害が発生した場合、Microsoft SQL Server はシステム管理者に通知しますが、部分的にリストアされたデータベースは回復されません。リストアジョブを完了するには、データベースのリストアを再度実行する必要があります。

注：リストア ジョブをキャンセルすると、データベースはロード状態のままとなり、リストアシーケンスが完了するまで使用することはできません。ジョブがキャンセルされたときにリストア中だったセッションが、リストア シーケンス内の最初のセッションではない場合、リストア シーケンスを最初から開始する必要があります。

リストア先に指定されたデータベースには、少なくともバックアップされたデータベースに割り当てられたのと同じサイズの記憶領域が必要です。バックアップされたデータベースの実際のデータ量は、この要件には関係ありません。割り当てられている記憶領域を確認するには、Microsoft SQL Enterprise Manager、Management Studio、または DBCC の CHECKALLOC ステートメントを使用します。データベースがオフラインの場合は、そのセッションの [エージェント リストア オプション] ダイアログ ボックスに表示されたファイル リスト、または ARCserve データベース マネージャ ビューで、ファイルのサイズをチェックします。

メディアに障害が発生した場合は、Microsoft SQL Server を再起動します。メディアに障害が発生した後、Microsoft SQL Server がデータベースにアクセスできない場合、データベースに「問題あり」というマークが付けられてロックされ、警告メッセージが表示されます。破損したデータベースを削除する (Microsoft SQL Server から切り離す) ことが必要な場合もあります。この場合は、Microsoft SQL Enterprise Manager または Management Studio を使用して実行します。

リストアの種類と方式

以下のバックアップ セッションからリストアできます。

- データベースのフル バックアップおよび差分バックアップ
- 部分フル バックアップおよび差分バックアップ
- トランザクション ログのバックアップ
- ファイルとファイル グループのフル バックアップおよび差分バックアップ

いずれの種類のリストアでも、以下のリストア方式を使用できます。

- [ツリー単位]: このオプションでは、CA ARCserve Backup でバックアップされたコンピュータとオブジェクトのツリーが表示されます。リストアを実行するには、適切なコンピュータとインスタンスを展開して、リストアするデータベースを選択します。表示されるデータベースは、最新のバックアップ セッションのもので、デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- [セッション単位]: このオプションでは、CA ARCserve Backup でバックアップしたときに使用されたメディアが一覧表示されます。リストアを実行するには、必要なバックアップが格納されているメディアを展開し、リストアする特定のデータベースまたはログを含むセッションを選択します。

注: Microsoft SQL Server データベースの場合、CA ARCserve Backup では、ツリー単位およびセッション単位のリストアのみがサポートされています。

依存性のチェックリスト、種類別

ツリー単位またはセッション単位方式を使用すると、さまざまな種類のリストアを実行できます。各方式には、正常にリストアを実行するために特定の依存性や要件があります。以下の表に、リストア方式別の要件を示します。

データベース リストアの依存性チェックリスト

データベースのリストアでは、データベースをまるごとリストアおよび回復します。データベースは、データベース フル バックアップ、データベース差分バックアップ、部分フルバックアップ、または部分差分バックアップからリストアできます。

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
データベース フル バックアップ	なし	なし
データベース差分バックアップ ¹	前回のデータベース フル バックアップ	なし

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
部分フル バックアップ	前回のデータベース フル バックアップ	なし
部分差分バックアップ ¹	以下のうち新しい方を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 前回のデータベース フル バックアップ ■ 前回の部分フル バックアップ 	なし

注:

¹ SQL Server 2005 以降では、すべてのデータ ファイルの差分バックアップは、該当データ ファイルの前回のフル バックアップに依存します。データ ファイルが部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに含まれている場合、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップ後、かつ次回のデータベース フル バックアップ前に作成されたデータベース差分バックアップは、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに依存します。同じことは、ファイル/ファイル グループ フル バックアップと部分差分バックアップに含まれているデータ ファイルにも当てはまります。または、ファイルの選択内容がファイル/ファイル グループ フル バックアップとファイル/ファイル グループ差分バックアップにわたっている場合にも当てはまります。このリリースの CA ARCserve Backup では、これらの条件は検出されません。

別の方法として、データベース フル バックアップまたは部分フル バックアップ、およびデータベース差分バックアップまたは部分差分バックアップとの間のトランザクション ログ バックアップをリストアすると、差分バックアップからデータベースを正しい状態にリストアすることができます。ただし、この方法は、間に実行されたファイル/ファイル グループ フル バックアップまたは部分フル バックアップをリストアするよりも時間がかかります。

トランザクション ログ リストアの依存性チェックリスト

トランザクション ログのリストアでは、トランザクション ログの内容がリストアおよび処理されます。この処理は、ログの「適用」や「再構成」などとも呼ばれます。Microsoft SQL Server はログに含まれる変更内容を再実行し、トランザクション ログのバックアップ時にはコミットされていなかったトランザクションをロールバックします。トランザクション ログを適用すると、前回のトランザクション ログ バックアップが実行された時点まで、データベースを最新の状態に回復できます。コミットされていないトランザクションで、Microsoft SQL Server によってロールバックされないものは、Microsoft SQL Log Backup トランザクションのみです。これは、リストア処理の一部としてロールバックされません。トランザクション ログのリストアは、トランザクション ログ バックアップからのみ実行できます。

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
トランザクション ログ バックアップ	<p>以下のいずれかを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 前回のトランザクション ログ バックアップ ■ 前回のトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) ■ 前回のデータベース バックアップ ¹ ■ 前回の部分バックアップ ¹ ■ あるいは、部分、ファイルおよびファイル グループ、または破損ページ リストア ¹ 用に選択されたセッション 	<p>なし (トランザクション ログ リストアとして選択された場合)</p> <p>次回のトランザクション ログ バックアップ (ファイル/ファイル グループまたは破損ページ修正リストアの一部として含まれている場合)</p>

注:

¹ トランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) の前回のバックアップもトランザクション ログである場合、この特定のセッションのみが有効な前提条件になります。

ファイル/ファイル グループ リストアの依存性チェックリスト

ファイル/ファイル グループのリストアでは、選択されたファイル/ファイル グループがリストアおよび回復されます。ファイル/ファイル グループは、ファイル/ファイル グループ バックアップ、部分バックアップ、またはデータベース バックアップからリストアできます。

差分またはログ リストアと同様に、ファイル/ファイル グループのリストアは、バックアップ時の元のデータベース、あるいはロード状態またはスタンバイ状態のまま保持されてきたデータベースのコピーに対してのみ適用できます。ミラー データベースは、スタンバイ コピーまたは元のデータベースなどの目的として使用できます。

ファイル/ファイル グループ リストアの実行時には、順序が重要になります。

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
データベース フル バックアップ	なし ²	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
部分フル バックアップ	なし ²	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
ファイル/ファイル グループ フル バックアップ	なし ²	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
データベース差分バックアップ ¹	前回のデータベース フル バックアップ	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
部分差分バックアップ ¹	以下のうち新しい方を使用します。	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 前回のデータベース フル バックアップ ■ 前回の部分フル バックアップ 	アップ <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
ファイル/ファイル グループ差分バックアップ ¹	選択セッション内に含まれるファイルがある前回のフル バックアップ	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ

注:

¹ SQL Server 2005 以降では、すべてのデータ ファイルの差分バックアップは、該当データ ファイルの前回のフル バックアップに依存します。データ ファイルが部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに含まれている場合、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップ後、かつ次回のデータベース フル バックアップ前に作成されたデータベース差分バックアップは、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに依存します。同じことは、ファイル/ファイル グループ フル バックアップと部分差分バックアップに含まれているデータ ファイルにも当てはまります。または、ファイルの選択内容がファイル/ファイル グループ フル バックアップとファイル/ファイル グループ差分バックアップにわたっている場合にも当てはまります。このリリースの CA ARCserve Backup では、これらの条件は検出されません。

別の方法として、データベース フル バックアップまたは部分フル バックアップ、およびデータベース差分バックアップまたは部分差分バックアップとの間のトランザクション ログ バックアップをリストアすると、差分バックアップからデータベースを正しい状態にリストアすることができます。ただし、この方法は、間に実行されたファイル/ファイル グループ フル バックアップまたは部分フル バックアップをリストアするよりも時間がかかります。

² ファイル/ファイル グループ リストアまたはオフラインの破損ページ修正を実行するには、データベースはロード状態またはスタンバイ状態である必要があります。これは、トランザクション ログの末尾のバックアップを実行することで通常達成できますが、[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能] オプションを使用して、選択セッションまたはより古いセッションのデータベース リストアを実行することも達成できます。ただし、より古いセッションをリストアする場合には、目的のより古いセッションと選択セッション間のトランザクション ログ セッションをすべてリストアする必要があります。このようにしないと、ファイル/ファイル グループ リストア後のトランザクション ログ リストアがその他のデータベース ファイルに適用できなくなり、失敗する可能性があります。

部分リストアの依存性チェックリスト

部分リストアでは、プライマリ ファイル グループ、およびリストア オプションに新規データベースとして指定したその他の任意のファイル グループがリストアおよび回復されます。結果としてそのデータベースのサブセットが作成されます。リストアされなかったファイル グループは、オフラインとしてマークされアクセスできません。

オフライン状態のファイル グループがあるため、部分リストアから作成されたデータベースは、データベース バックアップに適していない場合があります。このような状況を解決するには、Microsoft SQL Server Enterprise Manager または Management Studio を使用して、部分的にリストアされたデータベースに残りのファイル グループをリストアするか、データベース構造からそれらのファイル グループを削除します。

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
データベース フル バックアップ	なし	なし
部分フル バックアップ	なし	なし
データベース差分バックアップ	前回のデータベース フル バックアップ	なし
部分差分バックアップ ¹	以下のうち新しい方を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 前回のデータベース フル バックアップ ■ 前回の部分フル バックアップ 	なし

注:

¹ SQL Server 2005 以降では、すべてのデータ ファイルの差分バックアップは、該当データ ファイルの前回のフル バックアップに依存します。データ ファイルが部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに含まれている場合、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップ後、かつ次回のデータベース フル バックアップ前に作成されたデータベース差分バックアップは、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに依存します。同じことは、ファイル/ファイル グループ フル バックアップと部分差分バックアップに含まれているデータ ファイルにも当てはまります。または、ファイルの選択内容がファイル/ファイル グループ フル バックアップとファイル/ファイル グループ差分バックアップにわたっている場合にも当てはまります。このリリースの CA ARCserve Backup では、これらの条件は検出されません。

別の方法として、データベース フル バックアップまたは部分フル バックアップ、およびデータベース差分バックアップまたは部分差分バックアップとの間のトランザクション ログ バックアップをリストアすると、差分バックアップからデータベースを正しい状態にリストアすることができます。ただし、この方法は、間に実行されたファイル/ファイル グループ フル バックアップまたは部分フル バックアップをリストアするよりも時間がかかります。

破損ページ修正の依存性チェックリスト

破損ページのリストアでは、破損状態としてマークされているディスク上のデータ ページのみがリストアされます。SQL Server 2005 以降には、データベースの残りの部分はそのまま変更せずに、破損部分のみを隔離する機能があります。完全復旧モデルデータベースでこれが発生した場合、データベースでは、リストアを大幅に高速に処理できる破損ページ修正が使用できる可能性があります。このリストア方式の依存性は、ファイル/ファイル グループ リストアでの依存性に似ています。

この処理には、オンラインとオフライン バージョンの両方があります。

- オンライン -- データベースはオンラインのままになり、破損していないテーブルには引き続きアクセスできます。オンライン修正では、SQL Server の Enterprise Edition が必要です。
- オフライン -- リストアが実行される前に、ログの末尾のバックアップを使用してデータベースをオフラインにする必要があります。

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
データベース フル バックアップ	なし ²	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
部分フル バックアップ	なし ²	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
ファイル/ファイル グループ フル バックアップ	なし ²	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ

選択されたセッション	前提条件	処理後条件
データベース差分バックアップ ¹	前回のデータベース フル バックアップ	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
部分差分バックアップ ¹	以下のうち新しい方を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 前回のデータベース フル バックアップ ■ 前回の部分フル バックアップ 	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ
ファイル/ファイルグループ差分バックアップ ¹	選択セッション内に含まれるファイルがある前回のフル バックアップ	以下のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ ■ 連続するすべてのトランザクション ログ バックアップ (切り捨てあり) およびトランザクション ログの末尾のバックアップ

注:

¹ SQL Server 2005 以降では、すべてのデータ ファイルの差分バックアップは、該当データ ファイルの前回のフル バックアップに依存します。データ ファイルが部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに含まれている場合、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップ後、かつ次回のデータベース フル バックアップ前に作成されたデータベース差分バックアップは、この部分フル バックアップまたはファイル/ファイル グループ フル バックアップに依存します。同じことは、ファイル/ファイル グループ フル バックアップと部分差分バックアップに含まれているデータ ファイルにも当てはまります。または、ファイルの選択内容がファイル/ファイル グループ フル バックアップとファイル/ファイル グループ差分バックアップにわたっている場合にも当てはまります。このリリースの CA ARCserve Backup では、これらの条件は検出されません。

別の方法として、データベース フル バックアップまたは部分フル バックアップ、およびデータベース差分バックアップまたは部分差分バックアップとの間のトランザクション ログ バックアップをリストアすると、差分バックアップからデータベースを正しい状態にリストアすることができます。ただし、この方法は、間に実行されたファイル/ファイル グループ フル バックアップまたは部分フル バックアップをリストアするよりも時間がかかります。

² ファイル/ファイル グループ リストアまたはオフラインの破損ページ修正を実行するには、データベースはロード状態である必要があります。これは、トランザクション ログの末尾のバックアップを実行することで通常達成できますが、[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを使用して、選択セッションまたはより古いセッションのデータベース リストアを実行することも達成できます。ただし、より古いセッションをリストアする場合には、目的のより古いセッションと選択セッション間のトランザクション ログ セッションをすべてリストアする必要があります。このようにしないと、ファイル/ファイル グループ リストア後のトランザクション ログ リストアがその他のデータベース ファイルに適用できなくなり、失敗する可能性があります。

Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメント

master、model、および msdb の各システム データベースのフル データベース バックアップを含む Microsoft SQL Server インスタンスをバックアップするとき、Agent for Microsoft SQL Server は Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメントと呼ばれる追加バックアップ セッションを生成します。このセッションには、ファイルとしてリストアできる master および model データベースが含まれます。その間、Microsoft SQL Server インスタンスはオフラインになっています。このセッションのリストアは、master データベースの再構築処理を実行します。結果として、Microsoft SQL Server をオンラインにするため、オンラインになったバックアップからリストアできるようになります。

惨事復旧エレメント セッションは、「Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメント」という名前の後に Microsoft SQL Server の名前付きインスタンスのインスタント名が付されてツリー単位のビューに表示されます。セッション単位のビューでは、ボリューム名 `sqlldr@` の後にインスタンス名が付されます。Microsoft SQL Server のデフォルト インスタンスの場合、SQL Server のバージョンにかかわらず、インスタンス名は「MSSQLSERVER」になります。

Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメント セッションの元の場所へのリストアでは、master および model のデータベース ファイルが存在された場所にファイルがリストアされます。別の場所にリストアするためにディスクやディレクトリを選択すると、選択したディレクトリにファイルが配置されます。別の場所にリストアするためにコンピュータのみを選択すると、選択したコンピュータの元のファイル パスにリストアされます。

注: データベースがオンラインのときに、SQL Server 惨事復旧エレメントを元の場所にリストアしようとする、Microsoft SQL Server は既存のファイルを使用しているため、リストアは失敗します。

惨事復旧エレメントをリストアした直後に、通常のオンライン バックアップから、master データベース、オフラインの場合は msdb データベース、および model データベースをリストアする必要があります。

重要: 惨事復旧エレメントは、バックアップされたインスタンスに固有のものです。別のインスタンスに使用すると、そのインスタンスは開始されないか、開始後に誤動作する可能性があります。

注: CA ARCserve Backup Disaster Recovery Option の場合、惨事復旧リストアを実行するときに、Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメント セッションが含まれます。Disaster Recovery Option を使用して、ARCserve データベースを格納するコンピュータをリストアする場合、惨事復旧処理が完了した後にまず 3 つのシステム データベースをリストアする必要があります。詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

マスタ データベースのリストア

master データベースをリストアする前に、データベース ファイルが見つからない場合は、そのインスタンスの Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメントをリストアするか、Microsoft SQL Server Master の再構築ユーティリティを使用してそれを再構築することが必要な場合があります。master データベースをリストアする場合は、リストア処理で SQL Server インスタンスに対する排他アクセスが必要です。master データベースをリストアするには、Microsoft SQL Server をシングル ユーザ モードで実行する必要があります。Microsoft SQL Server master データベースの再構築の詳細については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

master データベースをリストアする前に、Microsoft SQL Server を使用している可能性があるすべてのアプリケーションを終了する必要があります。これには、SQL Server Automation Agent (「SQL Agent」サービス)などの Microsoft SQL Server の一部であるセカンダリ サービスが含まれます。ただし、CA ARCserve Backup 自体は唯一例外です。CA ARCserve Backup は、Agent for ARCserve Database によって、インスタンスに含まれている可能性のある ARCserve データベースを使用中でない状態が確保されます。

上記の検出を、master データベースのリストア時に、Agent for Microsoft SQL Server が自動的に行います。このエージェントは、リストア処理の実行に先だって、シングル ユーザ モードで Microsoft SQL Server を再起動し、master データベースのリストア完了時には Microsoft SQL Server をマルチユーザ モードに戻します。

重要: CA ARCserve Backup は master データベースをリストアする Microsoft SQL Server インスタンスの内部にあるデータベースを使用している可能性があるため終了できませんが、CA ARCserve Backup 以外のアプリケーションおよびサービスは、すべて終了する必要があります。そうしないと、これらのその他のアプリケーションのいずれか 1 つが、SQL Server インスタンスを再開した後に再接続され、エージェントのリストアの実行を妨げる可能性があります。

第 4 章: Microsoft SQL Server データベースのバックアップ

このセクションでは、CA ARCserve Backup、Agent for Microsoft SQL Server、および Microsoft SQL Server 7.0、Microsoft SQL Server 2000、Microsoft SQL Server 2005、および Microsoft SQL Server 2008 を使用した、データベースとトランザクション ログのバックアップについて説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[バックアップの概要 \(61 ページ\)](#)

[動的および明示的なジョブ パッケージ \(69 ページ\)](#)

[データベースのバックアップ \(73 ページ\)](#)

[Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 クラスタ環境でのバックアップ \(75 ページ\)](#)

バックアップの概要

バックアップとは、別のデバイス（通常はメディア ドライブ）に、データベース、トランザクション ログ、データベースの差分データ、前回のバックアップ以降に行った変更の一覧、ファイルやファイル グループの集合体などの、コピーやイメージを作成することを言います。CA ARCserve Backup と Agent for Microsoft SQL Server では、SQL Server の BACKUP ステートメントによるバックアップを実行できます。

データベースのバックアップを行うと、テーブル、データ、システム オブジェクト、およびユーザ定義オブジェクトのコピーが作成されます。データベースおよびトランザクション ログを定期的にバックアップしておく、メディアに障害が発生した場合に、データベースを回復することができます。

重要: データベースのフル バックアップおよび差分バックアップでは、トランザクション ログはバックアップも切り捨ても行われません。トランザクション ログのバックアップおよび切り捨てを行うには、トランザクション ログのバックアップを別途実行する必要があります。ログ ファイルを切り捨てるには、トランザクション ログ バックアップの実行時に [アクティブでないエントリをトランザクション ログから削除する] オプションを選択します。トランザクション ログのバックアップの詳細については、この章の「トランザクション ログ バックアップ」を参照してください。

CA ARCserve Backup を使用して、Microsoft SQL Server データベースのバックアップを開始すると、Agent for Microsoft SQL Server はデータベースのオンライン バックアップを開始します。データベースが使用中であっても、バックアップが実行されます。ただし、バックアップされるデータは、ステートメントが実行された時点の状態になります。実行中のトランザクションはバックアップされません。バックアップを開始した後に変更されたデータは、データベースのバックアップ コピーには取り込まれません。

バックアップ ウィザードおよびリストア ウィザードを使用する場合は、ファイル システムのバックアップとリストア ジョブのみがサポートされている点に注意してください。

バックアップ マネージャのエージェント オプション

本リリースから、バックアップ オプションについて、データベースごとに設定するか、バックアップ ジョブ内のすべてのデータベースにデフォルト オプションのセットを定義するかを選択できるようになりました。エージェントは、各データベースに対してオプションを適切に適用します。

- データベース レベル オプション -- これらのオプションは選択したデータベースに対してのみ適用され、グローバル エージェント オプションを拡張したり、それに優先して使用されます。データベース レベル オプションは、[エージェント オプション]ショートカット メニューから使用します。
- グローバル エージェント オプション -- これらのオプションを使用すると、選択した SQL Agent タイプのオブジェクトすべてに対してデフォルトのジョブ オプションを指定できます。グローバル エージェント オプションは、r12.5 より以前のリリースのエージェントではサポートされていません。

グローバル レベルで適用されるグローバル エージェント オプションでは、すべての Microsoft SQL Server データベースに対してデフォルトのジョブ オプションを指定できます。データベース レベルで特定のオブジェクトに対して選択されたオプションは、グローバル エージェント オプションとして指定した内容を拡張したり、それに優先することになります。一般に、グローバル レベルで適用されたオプションは、[ジョブ スケジューラ]タブで指定したオプションを拡張したり、それに優先することになります。

注： エージェントは、特定のデータベースにデータベース レベルで指定したオプションと、適切なグローバル エージェント オプションを組み合わせます。

以下の CA ARCserve Backup コンポーネントに対して、グローバル エージェント オプションを指定できます。

- Agent for Microsoft SQL Server -- CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server r12.5 以降でサポートされる Agent for CA ARCserve Backup Database を含みます。
- CA ARCserve Backup Agent for Virtual Machines -- CA ARCserve Backup Agent for Virtual Machines r12.5 以降でサポートされます。

上記のエージェントを使用してジョブをパッケージングする場合、以下の動作を考慮してください。

- CA ARCserve Backup r12.5 より前のリリースの上記エージェントでは、グローバル エージェント オプションはサポートされていません。また、上記以外のエージェントを使用して Microsoft SQL Server データベースをバックアップした場合にも、グローバル エージェント オプションは無効です。
- 古いリリースのエージェントを CA ARCserve Backup r12.5 にアップグレードした場合、アップグレードしたエージェントは既存のローカル オプションと、適合するすべてのグローバル オプションの両方に対して有効であり、データベース レベル(ローカル)オプションとは競合しません。
- 古いエージェントを使用してジョブをパッケージングした場合、ローカル オプションはそのまま保持されます。

バックアップ方式

以下のバックアップ方式が提供されています。

グローバルまたはローテーション オプションを使用する

[グローバルまたはローテーション オプションを使用する]は、デフォルトで設定されるオプションです。

CA ARCserve Backup は、Microsoft SQL Server データベースのバックアップ時に、ジョブ スケジューラから増分および差分グローバル バックアップ方式を適用できます。これにより、ローテーション スキーマを使用して、Microsoft SQL Server データベースの差分バックアップとトランザクション ログのバックアップを実行し、各データベースの制限に基づいて動的に調整することができます。

CA ARCserve Backup r12 より前のリリースのエージェントでは、ジョブ スケジューラからグローバル バックアップ方式またはローテーション スキーマを選択すると、ローカル データベース オプションより優先して適用されます。本リリースでは、グローバル バックアップ方式またはローテーション スキーマが適用されるのは、データベースのデータベース レベル オプションおよび SQL Server のグローバル エージェント オプションで[グローバルまたはローテーション オプションを使用する]を選択した場合のみです。

このオプションを使用すると、選択したデータベースが、ジョブ スケジュールのバックアップ方式に従ってバックアップされます。ジョブ方式は、以下の論理を使用して分類されます。

- フル ジョブ方式は、データベースのフル バックアップになります。
- 差分ジョブ方式は、このデータベースでフル バックアップを行っていない限り、データベースの差分バックアップになります。
- 増分ジョブ方式は、データベースがまだフル バックアップされていない場合を除き、完全または一括ログ復旧モデルを使用しているデータベースではトランザクション ログ バックアップ(切り捨てあり)を、単純復旧モデルを使用しているデータベースでは差分バックアップを実行します。

- 3つのメイン システム データベース(master、model、または msdb)は、グローバル エージェント オプションのジョブ方式およびバックアップ方式の対象としては除外されます。このオプションを上記のデータベースに対して選択すると、フル バックアップが実行されます。

フル

フル バックアップが実行されます。選択したデータベース サブセットに含まれているファイルはすべて、ファイル全体がバックアップされます。

差分

前回のフル バックアップ以降に変更されたデータのみをバックアップします。たとえば、日曜日の夜にデータベース全体のバックアップを行った場合、月曜日の夜に差分バックアップを行い、月曜日に変更されたデータのみをバックアップします。

注: グローバル エージェント オプションで選択した場合、このオプションはシステム データベースでは無視されます。これまでにフル バックアップされたことがないデータベースでは、[フル]に戻ります。

トランザクション ログ

トランザクション ログのみをバックアップします。このオプションは、フルおよび一括ログ復旧モデルを使用したデータベースのみで使用できます。単純復旧モデルを使用したデータベースの場合は、[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで[トランザクション ログ]を選択すると、CA ARCserve Backup は差分バックアップを実行します。

注: このオプションをグローバル エージェント オプションで選択した場合、システム データベースでは無視されます。これまでにフル バックアップされたことがないデータベースでは、[フル]に戻ります。

[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで選択したバックアップ方式は、ジョブ スケジューラでジョブに設定したグローバル バックアップ方式またはローテーション フェーズの選択より優先されます。[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブを使用してバックアップ方式を選択する場合は、以下の点に注意してください。

- 3つのシステム データベース(master、model、および msdb)は、[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブのバックアップ方式からは除外されます。
- これまでにフル バックアップされたことがないデータベースの場合、CA ARCserve Backup は[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで設定されたバックアップ方式を無視し、デフォルトでフル バックアップを実行します。
- 単純復旧モデルを使用したデータベースの場合、[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで[トランザクション ログ]を選択すると、CA ARCserve Backup は差分バックアップを実行します。

データベースに対して[グローバルまたはローテーション オプションを使用する]以外を選択した場合、それは[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで選択した内容よりも優先されるため、データベースの[エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスの[グローバル オプションより優先させる]オプションの設定によってバックアップ方式が影響を受けることはありません。

データベース サブセット

データベース サブセット オプションを使用すると、バックアップするデータベース コンポーネントの種類を定義できます。このオプションを使用して、データベース全体のバックアップまたはデータベース内に含まれる一部のファイルやファイル グループのバックアップを選択します。データベースのサイズやパフォーマンスの制約により、データベース全体をバックアップできない場合は、特定のファイルやファイル グループのみを選択できます。

[データベース サブセット]オプションは、データベースの[バックアップ方式]で[トランザクション ログ]が選択されている場合は無効になります。以下のデータベース サブセット オプションのうち、[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで利用できるのは、[データベースの後にトランザクション ログをバックアップする]オプションのみです。

データベース全体

データベース全体をバックアップします。

ファイルとファイル グループ

データベース内の選択したファイルをバックアップします。データベースのサイズやパフォーマンス要件によっては、データベースのフル バックアップを行うのが現実的でない場合があります。このような場合は、このオプションでファイルまたはファイル グループを選択し、バックアップを行います。このオプションは、フルおよび一括ログ復旧モデルを使用したデータベースのみで使用できます。

注: Microsoft SQL Server 7.0 データベースの場合、[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで、データベース サブセットを[ファイルとファイル グループ]に、バックアップ方式を[差分]に設定すると、CA ARCserve Backup はファイルとファイル グループのフル バックアップを実行します。

データベースの一部

プライマリ ファイル グループ、およびその他の任意の読み取り/書き込みファイル グループがバックアップされます。読み取り専用データベースの場合、プライマリ ファイル グループのみがバックアップされます。このオプションを使用するには、SQL Server 2005 以降のバージョンが必要です。

データベースの後にトランザクション ログをバックアップする

データベース、データベースの一部、または選択した一連のデータ ファイルがバックアップされた後で、トランザクション ログがバックアップされます。これにより、1つのジョブでフルまたは差分バックアップと、トランザクション ログのバックアップの両方を実行できるようになります。このオプションは、フルおよび一括ログ復旧モデルを使用するデータベースに対してのみ利用できます。[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで設定されても単純復旧モデルを使用するデータベースでは無視されます。

以下の点に注意してください。

- [グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブでこのオプションを選択し、ジョブ スケジューラを使用して増分バックアップを指定した場合、CA ARCserve Backup は、データベースでトランザクション ログのバックアップを 1 回だけ実行します。このとき、増分バックアップのデフォルトの動作(トランザクション ログを切り捨て)ではなく、[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで選択された[ログ切り捨てオプション]が使用されます。
- データベース レベルのエージェント オプションでこのオプションを選択し、データベース レベルのバックアップ方式を[グローバルまたはローテーション オプションを使用する]に指定し、グローバル エージェント オプションのバックアップ方式を[トランザクション ログ]に設定した場合、CA ARCserve Backup は、データベースでトランザクション ログ バックアップを 1 回だけ実行します。このとき、データベース レベルで設定された[ログ切り捨てオプション]を使用します。
- [グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブでこのオプションを選択し、データベース レベル オプションで[トランザクション ログ]を選択した場合、データベースでは、このオプションおよび付随する[ログ切り捨てオプション]のグローバル設定は無視されます。

ログ切り捨てオプション

[ログ切り捨てオプション]には、以下が含まれます。

アクティブでないエントリをトランザクション ログから削除する

(切り捨て)トランザクション ログ ファイルを切り捨て、バックアップに含まれるエントリを削除し、ファイルのスペースを再利用します。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

アクティブでないエントリをトランザクション ログから削除しない

(切り捨てなし)バックアップ後、バックアップしたログ エントリをそのまま維持します。これらのエントリは、次のトランザクション ログのバックアップに含まれます。

ログの末尾をバックアップし、データベースは復元中の状態にする

(回復なし)ログをバックアップし、データベースの状態をリストア中にします。このオプションは Microsoft SQL Server 2000 またはそれ以降でのみ利用できます。リストアまたは回復に先立って、前回のバックアップ以降のアクティビティをキャプチャし、データベースをオフラインにするには、このオプションを使用します。

ログ切り捨てオプションは、バックアップ方式として[トランザクション ログ]を選択している場合、または[データベースの後にトランザクション ログをバックアップする]をオンにしている場合にのみ利用できます。

重要: ARCserve データベースのバックアップの際に、ログ切り捨てオプションの[ログの末尾をバックアップし、データベースは復元中の状態にする]を使用しないでください。このオプションを使用してバックアップを実行すると、データベースがオフラインの状態になり、リストアを行い、データベースをオンラインに戻すための ARCserve データベースのバックアップを検索できなくなります。このオプションを使用して ARCserve データベースのバックアップを実行する場合は、`ca_recoverdb` コマンド ライン ユーティリティを使用して、ARCserve データベースをリストアし、それをオンラインに戻すことができます。

ログ切り捨てオプションは、データベース レベルの[エージェント オプション]ダイアログボックスの[グローバル オプションより優先させる]設定の影響を受けません。[トランザクション ログ]または[データベースの後にトランザクション ログをバックアップする]が選択されているデータベースでは、データベースの[ログ切り捨てオプション]が使用されません。

データベースの整合性チェック(DBCC)オプション

データベースの整合性チェック(DBCC)では、データベースの物理的および論理的な整合性がテストされます。DBCC には、以下のオプションがあります。

バックアップ前

データベースのバックアップ前に DBCC を実行します。(このオプションはリストアでは使用できません。)

バックアップ後

データベースのバックアップ後に DBCC を実行します。(このオプションはリストアでは使用できません。)

DBCC が失敗した場合もバックアップを続行する

バックアップ前の整合性確認でエラーが報告された場合でも、データベース バックアップを実行します。(このオプションはリストアでは使用できません。)

リストア後

データベースのリストア後に DBCC を実行します。(このオプションはバックアップでは使用できません。)

リストア前

データベースのオンライン破損ページ修正の前に DBCC を実行します。(SQL Server 2005 またはそれ以降の Enterprise Edition のみ。このオプションはバックアップでは使用できません。)

インデックスをチェックしない

ユーザ定義のテーブル用インデックスをチェックせずに、DBCC を実行します。

注: システム テーブルのインデックスは、このオプションの選択に関係なくチェックされます。

データベースの物理的な整合性をチェックする

破損ページおよび一般的なハードウェア障害を検出しますが、データベーススキーマの規則に違反するデータの検証は行いません。ただし、ページとレコードヘッダの物理構造の整合性、およびページのオブジェクト ID とインデックス ID 間の整合性のチェックは行われます。このオプションは Microsoft SQL Server 2000 またはそれ以降でのみ利用できます。SQL Server 7.0 のデータベースでは、このオプションを[グローバル エージェント オプション]タブから選択した場合は無視されます。

DBCC 中に生成されたすべてのエラー メッセージは、Agent for Microsoft SQL Server のログ ファイル `sqlpagw.log` に記録されます。このログ ファイルはバックアップ エージェントのディレクトリに格納されています。

例: DBCC オプションの仕組み

以下の例は、DBCC オプションが[エージェント バックアップ オプション]ダイアログボックスの[グローバル オプションより優先させる]との組み合わせで、どのように動作するのかを示しています。

- [グローバル オプションより優先させる]を指定した場合、データベース レベルで選択する DBCC オプションが、適用される唯一の DBCC オプションになります。
- [グローバル オプションより優先させる]を指定しなかった場合、データベースに対して指定したすべての DBCC オプションとグローバル オプションで選択したすべての DBCC オプションが共に適用されます。

[グローバル オプション]ダイアログ ボックスの[エージェント オプション]タブで、以下のデータベースの整合性チェック オプションを指定します。

- バックアップ後
- インデックスをチェックしない

[エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスで、[グローバル オプションより優先させる]を選択せず、以下のデータベースの整合性チェック オプションを指定します。

- バックアップ前
- DBCC が失敗した場合もバックアップを続行する

注： [エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスを開くには、バックアップ マネージャを開いて[ソース]タブをクリックし、CA ARCserve Backup サーバを参照して展開します。CA ARCserve Backup データベースを右クリックして、コンテキストメニューから[エージェント オプション]を選択します。

バックアップ ジョブをサブミットすると、指定した DBCC オプションが論理的な順序で適用されます。つまり、バックアップを開始する前に、DBCC を実行します。DBCC が失敗した場合でも、バックアップを実行します。バックアップの完了後は、インデックスをチェックしません。

その他のオプション

SQL Server によって生成されたチェックサムを含める

Microsoft SQL Server からのエラー確認情報を含めます。この情報を使用して、バックアップされたデータの整合性をリストアの際に検証できます。このオプションは、SQL Server 2005 またはそれ以降で利用でき、SQL 7.0 または 2000 のデータベースの[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブで設定した場合は無視されます。

グローバル オプションより優先させる

指定したデータベースのみ、[グローバル オプション]の[エージェント オプション]タブのチェック ボックス式のオプションがエージェントにすべて無視されます。

注： [バックアップ方式]および[トランザクション ログ切り捨てオプション]は、これとは別に優先されるため、このオプションの影響を受けません。このオプションは、データベース単位でのみ利用できます。

動的および明示的なジョブ パッケージ

CA ARCserve Backup には、バックアップ ジョブをパッケージまたはセットアップする方法として以下の 2 つの方法があります。

- 動的なジョブのパッケージ
- 明示的なジョブのパッケージ

動的なジョブのパッケージ

バックアップ ジョブを定義するときにデータベース インスタンスを動的なジョブ パッケージに指定すると、CA ARCserve Backup では、バックアップ ジョブの実行時に、このオブジェクトのコンポーネント(インスタンスの子ボリューム、ファイルなど)がすべてバックアップ対象として選択されます。

たとえば、まずサーバ全体のバックアップを選択し、サーバを動的ジョブ パッケージ用にマークして、サーバ上のボリュームを変更した場合、次のバックアップ ジョブを実行するとき、バックアップが実行される時点のボリュームがバックアップされます。動的なジョブ パッケージに指定したサーバに加えられた変更はすべて、次のバックアップに含まれます。

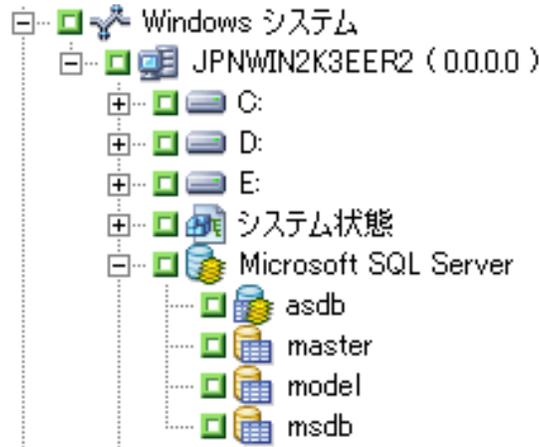
注: バックアップの対象に SQL サーバ インスタンス全体を選択した場合、その後で各データベースに個別にバックアップ オプションを設定しても、その設定は無視されます。データベースを個別に選択した場合のみ、ジョブの変更時に、データベース別のオプションがパッケージされ、そのまま維持されます。

重要: 動的にジョブをパッケージすると、選択したバックアップ ソース配下のオブジェクト(サブ オブジェクト)も動的なジョブ パッケージに指定され、バックアップの対象として選択されます。動的なジョブ パッケージに指定したオブジェクトのサブ オブジェクトに対して独自に指定していたオプションは、そのジョブがサブミットされる時にすべて無効になります。

動的なジョブ パッケージのオブジェクト作成

オブジェクトの動的なジョブ パッケージ方法

1. バックアップ マネージャの[ソース]タブで、ディレクトリ ツリーを展開し、動的にジョブをパッケージするオブジェクトを表示します。
2. そのオブジェクトの隣にある四角形をクリックします。対象オブジェクトの隣にある四角形、および対象オブジェクトのすべてのサブ オブジェクトの隣にある四角形が緑色になります。この例では、Microsoft SQL Server を選択して、動的にジョブをパッケージしています。目的の項目の配下にあるすべてのオブジェクトが、動的にパッケージされています。



明示的なジョブのパッケージ

バックアップ ジョブを定義するときにデータベース オブジェクトを明示的なジョブ パッケージに指定する場合、サブ オブジェクトの一部または全部は動的なジョブ パッケージに指定しておます。上位オブジェクトは動的パッケージには指定しません。

たとえば、あるサーバの C ドライブと E ドライブのみをバックアップの対象として選択すると、そのサーバ、つまり親は明示的にパッケージされます。ジョブがスケジュールされてから実行されるまでの間に、サーバにドライブが追加された場合、追加されたドライブはバックアップの対象になりません。しかし、C ドライブと E ドライブは動的なパッケージとなっているため、ジョブがスケジュールされてから実行されるまでの間に、これらのドライブの内容に加えられた変更はすべて、バックアップの対象となります。

明示的なジョブ パッケージを使用すると、ローカルのバックアップ オプションをカスタマイズできます。たとえば、サーバの C ドライブと E ドライブを動的にパッケージしたバックアップ ジョブを実行する場合は(サーバは明示的なパッケージ)、C ドライブと E ドライブに対して、それぞれ異なるオプションのセットを選択できます。

注: ボリュームまたはデータベース オプションをカスタマイズするには、そのボリュームまたはデータベースの親アイテムを明示的にパッケージする必要があります。

明示的なジョブ パッケージのオブジェクト作成

オブジェクトの明示的なジョブ パッケージ方法

1. バックアップ マネージャの[ソース]タブで、ディレクトリ ツリーを展開し、明示的にジョブをパッケージするオブジェクトを表示します。
2. そのオブジェクトのサブ オブジェクトの隣にある四角形をクリックします。そのサブオブジェクトの隣にある四角形は緑色になります。また、上位オブジェクトの隣にある四角形は半分が緑色、半分が白色になります。以下の例では、C ドライブと E ドライブは動的なジョブ パッケージとして表示されています。これらのドライブが存在するコンピュータ WIN は、明示的なジョブ パッケージとして表示されています。



データベースのバックアップ

CA ARCserve Backup のバックアップ マネージャを使用して、データベースをバックアップします。

データベースのバックアップ方法

1. サーバ上で Microsoft SQL Server が実行されていることを確認します。Microsoft SQL Server サービスが開始されていることが必要です。

2. 必要に応じて、CA Backup Universal Agent を開始します。

注: エージェントがインストールされており、マシンの再起動時に自動的に開始するように設定されている場合、このサービスは自動的に開始されます。

3. バックアップ マネージャを開いて、Microsoft SQL Server が実行されているコンピュータの名前の下で Microsoft SQL Server のインスタンスを見つけます。Microsoft SQL Server インスタンスを展開してデータベース一覧を表示します。

4. [オプション]ボタンをクリックして[グローバル オプション]を開き、必要に応じて、さらに[エージェント オプション]タブをクリックして[グローバル エージェント オプション]を開きます。グローバル エージェント オプションの設定の詳細については、[「バックアップ マネージャのエージェント オプション」](#) (62 ページ)を参照してください。

5. Microsoft SQL Server 7.0 または 2000 インスタンスをバックアップする場合、Microsoft SQL Server インスタンスを右クリックして、コンテキスト メニューから[転送方式]を選択します。[リモート プロトコル]ダイアログ ボックスが表示されます。データ転送方式を選択して、[OK]をクリックします。

Microsoft SQL Server 2005 または 2008 のインスタンスからバックアップを取る場合は、次のステップに進みます。

デフォルトの方式は、仮想デバイスです。

注: バックアップ オペレータの権限はあるが、システム管理者の権限はない場合、または仮想デバイスが使用できない場合にのみ、[名前付きパイプ]を選択します。名前付きパイプは Microsoft SQL Server 2005 およびそれ以降では利用できません。

このエージェントの前回までのリリースでは、仮想デバイスは常にローカル バックアップと TCP/IP バックアップに使用されていました。

6. Microsoft SQL Server インスタンスの下にあるデータベースを選択します。バックアップ マネージャの右ペインに選択したデータベースの情報が表示されます。

注: データベースを選択し、バックアップ オプションを正しく適用する方法については、[「動的および明示的なジョブのパッケージ」](#) (69 ページ)を参照してください。

7. データベース オブジェクトを右クリックし、コンテキスト メニューから[エージェント オプション]を選択します。Microsoft SQL Server の[エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスが開きます。利用できるオプションは、Microsoft SQL Server インスタンスのバージョンや対象データベースの復旧モデルによって異なります。
8. 実行するバックアップ方式と実行するサブセットのタイプを選択します。バックアップ方式とサブセットの詳細については、「バックアップ方式」を参照してください。
9. ファイルとファイルグループのサブセットを選択する場合は、[参照]ボタンをクリックします。[ファイル グループとファイルの選択]ダイアログ ボックスが開きます。
バックアップするファイルおよびファイル グループを選択して、[OK]をクリックします。
10. 必要に応じて、[データベースの整合性チェック]オプションを選択します。データベースの整合性チェックの詳細については、この章の「データベースの整合性チェック」および Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。
11. バックアップ方式として[トランザクション ログ]を選択した場合、または[データベースの後にトランザクション ログをバックアップする]をオンにした場合は、[ログ切り捨てオプション]を選択します。
12. [OK]をクリックします。
13. このジョブでバックアップするデータベースごとに、これまでの手順を繰り返します。
14. バックアップ マネージャの[デスティネーション]タブで、バックアップ先を選択します。
注: バックアップ先を選択するときに、[グループ]フィールドまたは[メディア]フィールドで[*]記号を使用すると、部分的なワイルドカードを作成できます。たとえば、GroupA および GroupB という 2 つのデバイス グループがあり、一方のグループはメンバ名がすべて「GroupA」で始まっており、他方のグループはメンバ名がすべて「GroupB」で始まっているとします。この場合、[グループ]フィールドに「GroupA*」と入力すると、GroupA のメンバすべてを選択できます。デバイスやメディアを選択する方法の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。
15. [スケジュール]タブをクリックして、このバックアップ ジョブのスケジュール オプションを選択します。バックアップのスケジュールリングの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。
16. [開始]をクリックします。[セキュリティおよびエージェント情報]ダイアログ ボックスが表示されます。
注: このダイアログ ボックスの[エージェント]列と[エージェント]ボタンは、Agent for Microsoft SQL Server ではなく、Client Agent for Windows を指しています。このダイアログ ボックスでは、クライアント エージェントの情報を編集できます。クライアント エージェントの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

17. ターゲット マシンと Microsoft SQL Server のユーザ名とパスワードを確認します。Microsoft SQL Server のセキュリティ情報を変更するには、[セキュリティ]をクリックして表示されるダイアログ ボックスで必要な情報を変更します。
18. セキュリティ情報を確認または変更した後で、[OK]ボタンをクリックします。[ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスが開きます。
19. [ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスでは、必要に応じてジョブの実行時刻を指定したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、バックアップ ジョブに説明を入力したり、ソース優先度を選択したりすることができます。
20. [OK]をクリックします。
ジョブがサブミットされます。

[即実行]を選択した場合は、[ジョブ ステータス]ウィンドウが開きます。このウィンドウで、ジョブの現在のステータスをモニタします。[ジョブ ステータス]ウィンドウの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

Microsoft SQL Server 2000、2005、または 2008 クラスタ環境でのバックアップ

以下のセクションでは、Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 クラスタ環境でのバックアップ手順について説明します。

サーバ、プロトコル、セキュリティ、およびバックアップ方式の選択

Microsoft SQL Server 2000 の仮想サーバ環境のバックアップ時に、サーバ、プロトコル、セキュリティ、およびバックアップ方式を選択する方法

1. Microsoft クラスタ環境で Microsoft SQL Server 仮想サーバが実行されていることを確認します。
2. CA ARCserve Backup を起動して、バックアップ マネージャを開きます。
3. [オプション]をクリックし、[グローバル エージェント オプション]の設定が必要な場合は、さらに[エージェント オプション]タブをクリックします。詳細については、[「バックアップ マネージャのエージェント オプション」](#)(62 ページ)を参照してください。

4. [ソース]タブで、Microsoft SQL Server 仮想サーバ名 (物理ノードや Windows 仮想サーバではないので注意)を展開します。Microsoft SQL Server 仮想サーバ インスタンスは、そのインスタンスが関連付けられている Microsoft SQL Server 仮想サーバ オブジェクトの下位に表示されます。

注: クラスタ化された Microsoft SQL Server インスタンスは、それに関連する Microsoft SQL Server の仮想サーバ名でのみ参照することを推奨します。 インスタンスを別の場所から参照すると、Windows 仮想サーバまたは Microsoft SQL Server の仮想サーバをクラスタの別のノードに移動した場合に、バックアップが失敗する可能性があります。クラスタ化された Microsoft SQL Server 2000、2005 および 2008 のインスタンスは、MSCS のコンピュータ名で参照しないことを推奨します。

クラスタ化された CA ARCserve Backup インストールの ARCserve データベースとして使われる Microsoft SQL Server 2005 Express Edition のインスタンスは、クラスタ化された CA ARCserve Backup プライマリ サーバに関連付けられた仮想サーバ名で参照する必要があります。

5. Microsoft SQL Server インスタンスを右クリックし、ポップアップ ウィンドウから[転送方式]を選択します。[転送方式]ダイアログ ボックスが開きます。
6. [仮想デバイス]を選択し、[OK]をクリックします。
7. Microsoft SQL Server インスタンスを右クリックし、[セキュリティ]を選択します。[セキュリティ]ダイアログ ボックスが開きます。
8. [セキュリティ]ダイアログ ボックスに表示されているセキュリティ情報を確認して [OK]ボタンをクリックします。
9. Microsoft SQL Server インスタンスを展開してデータベース一覧を表示し、データベースを選択します。
10. データベースを右クリックし、コンテキスト メニューから[エージェント オプション]を選択します。[エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスが開きます。
11. 実行するバックアップの種類、および使用するサブセット オプションがある場合はそれを選択します。バックアップの種類の詳細については、[「バックアップ方式」](#) (63 ページ)を参照してください。
12. ファイルとファイルグループのサブセットを選択する場合は、[ファイル/ファイル グループの参照]ボタンをクリックします。[ファイル グループとファイルの選択]ダイアログ ボックスが開きます。バックアップするファイルまたはファイル グループを選択して、[OK]をクリックします。

13. 必要に応じて、[エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスの[データベースの整合性チェック]で、データベース整合性チェックのオプションを選択し、[OK]をクリックします。

注: データベース整合性チェックの詳細については、「Microsoft SQL Server データベースのバックアップ」の章および Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

14. このジョブでバックアップするデータベースまたはデータベース オブジェクトごとにこれらの手順を繰り返します。

第 5 章: Microsoft SQL Server データベースのリストア

このセクションでは、CA ARCserve Backup、Agent for Microsoft SQL Server、および Microsoft SQL Server 7.0、Microsoft SQL Server 2000、または Microsoft SQL Server 2008 を使用した、データベースとトランザクション ログのリストアについて説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[リストア オプション \(80 ページ\)](#)

[データベース ファイル オプション \(88 ページ\)](#)

[ツリー単位のリストア方式でリストアする \(91 ページ\)](#)

[セッション単位のリストア方式でリストアする \(94 ページ\)](#)

[SQL エージェント フィルタ オプション \(97 ページ\)](#)

[\[セッションの自動選択\]を使用した、代替ディスク場所へのリストア \(97 ページ\)](#)

[ディスクの代替場所への\[セッション単位\]のリストア \(98 ページ\)](#)

[Microsoft SQL Server 2005 または 2008 を使用したオフラインの破損ページの修正 \(102 ページ\)](#)

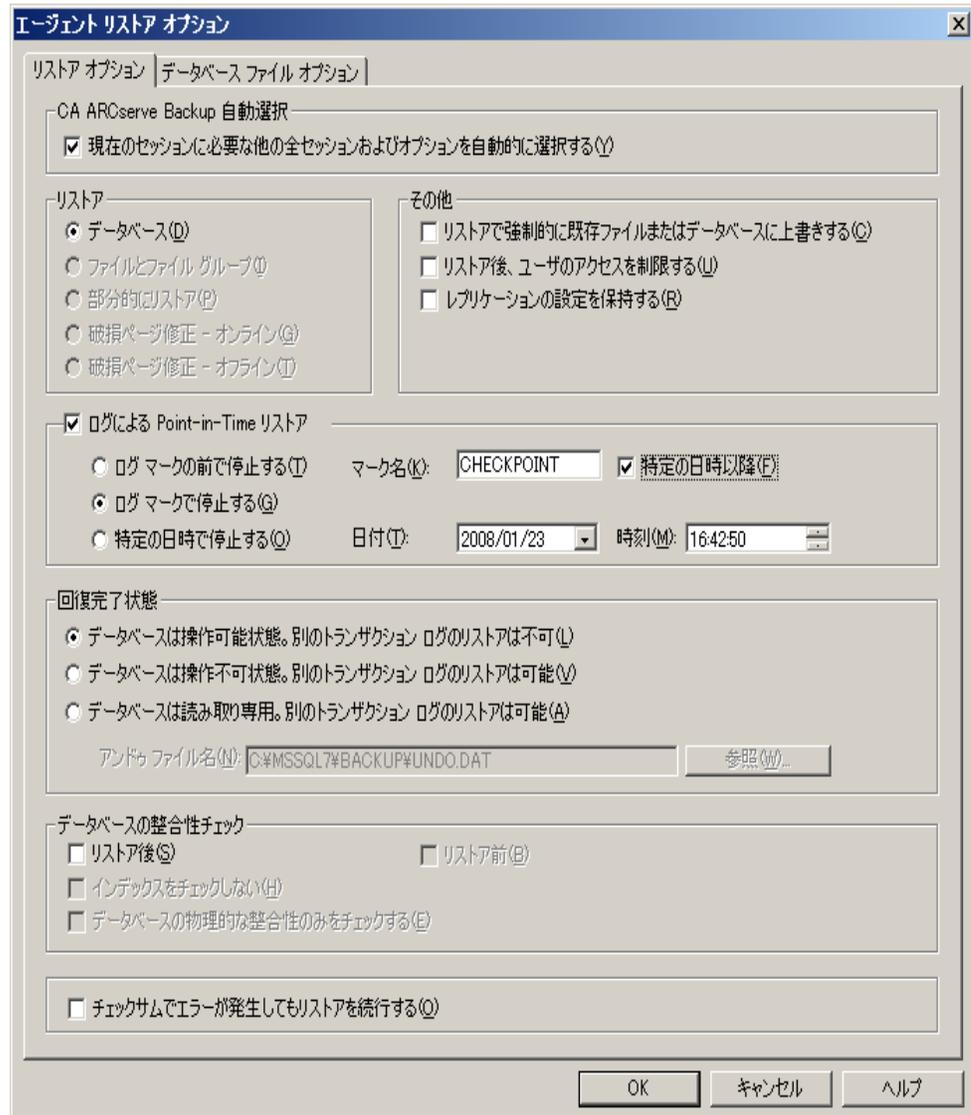
[Microsoft SQL Server 2005 または 2008 Enterprise、Data Center、または Developer Editions を使用したオンラインの破損ページの修正 \(103 ページ\)](#)

[Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 クラスタ環境でのツリー単位のリストア \(104 ページ\)](#)

[Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 環境でのセッション単位のリストア \(107 ページ\)](#)

リストア オプション

Agent for Microsoft SQL Server には、以下のダイアログ ボックスに表示されるリストア オプションが用意されています。



- [セッションの自動選択](#) (81 ページ)
- リストアのタイプ: データベース、ファイル、またはファイルグループ、部分 (Microsoft SQL Server 2000 またはそれ以降)、または破損ページ修正 (Microsoft SQL Server 2005)
- [ログによる Point-in-Time リストア](#) (82 ページ)

- [回復完了状態](#) (83 ページ)
- [データベースの整合性チェック](#) (67 ページ)
- [リストアで強制的に名前付きパイプを使用する](#) (86 ページ)
- [チェックサムでエラーが発生してもリストアを続行する](#) (86 ページ)
- [その他のオプション](#) (86 ページ)

自動選択オプション

自動選択オプションは、自動的に以下のとおり実行されます。

- リストア ジョブが正常に終了するために、リストアするセッションと共にリストアする必要のあるその他のセッションを選択する
- 適切に選択されたオプションを自動的に選択されたセッションに適用する

デフォルトでは、セッションの自動選択チェック ボックスがすべてのリストア ジョブでオンになっています。自動選択を使用すると、処理時間を短縮でき、リストア ジョブのパッケージでのエラーの発生を防止できます。

重要: セッションの自動選択をオンにした場合は、CA ARCserve Backup や BrightStor[®] Enterprise Backup の以前のバージョンからのバックアップを使用して、ディスク上の別の場所にデータベースをリストアできないことがあります。たとえば、ドライブ文字やディレクトリパスが異なる場所へのリストアや、別のファイル名でのリストアはできません。異なる場所へのリストアの詳細については、「セッションの自動選択を使用した、ディスクの代替場所へのリストア」を参照してください。

[ログによる Point-in-Time リストア]オプション

[ログによる Point-in-Time リストア]オプションでは、指定した日時の状態、または指定したトランザクションの状態にデータベースをリストアします。このオプションを選択した場合は、セッションの自動選択も指定する必要があります。このオプションは、選択したセッションがトランザクション ログのバックアップの場合にのみ選択可能です。

重要: 回復しようとするデータベースで一括ログ復旧モデルが使用されている場合は、[ログによる Point-in-Time リストア]オプションは使用できません。

[ログによる Point-in-Time リストア]オプションが選択された場合、必要なログを検出するために、Microsoft SQL Server はバックアップの開始時間と終了時間を格納する各トランザクション ログの記録をリストアします。それから Microsoft SQL Server は、指定された時刻の記録を検索します。

- Microsoft SQL Server が指定された時刻を検出した場合、ユーザが指定した日時の状態へログをリストアします。エージェントが CA ARCserve Backup にリストアを停止するよう指示し、データベースが完全に復元されます。同じ時間のログがほかにもある場合は、これらのログは無視され、後続のセッションはスキップされます。
- ログにこれらが含まれた後で特定の時間が来ると、Microsoft SQL Server がログをリストアし、データベースをリストア中状態のままにして、次のログ リストア操作を待機します。
- 指定されている時間がログに含まれている時間より前の場合は、Microsoft SQL Server はログをリストアできません。

[ログによる Point-in-Time リストア]オプションには制限があります。たとえば、セッションの自動選択を選択しないで[リストアで強制的に既存ファイルに上書き]を選択し、リストアするデータベースに属する 1 つ以上のログを選択した場合、最初にリストアする適切なデータベース、差分バックアップ、およびファイル グループのセッションを選択しないと、ジョブは不完全な状態になり、そのデータベースの後続のセッションは無視されます。

[ログによる Point-in-Time リストア]で使用できるオプションは、以下のとおりです。

特定の日時で停止する

ユーザが特定の日時を指定できる日時フィールドがあります。このオプションは、指定された日時の状態までデータベースを回復します。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

ログ マークで停止する

このオプションでは、特定の名前でマークされたトランザクションまでデータベースアクティビティを回復しますが、そのマークを伴うトランザクションも回復します。[特定の日時以降]オプションを選択しない場合、最初に指定された名前でマークされているトランザクションで回復が停止します。[特定の日時以降]オプションを選択する場合、指定した日時以後の、最初に指定された名前でマークされているトランザクションで回復が停止します。

注: このオプションは Microsoft SQL Server 2000 および Microsoft SQL Server 2005 で使用できます。

ログ マークの前で停止する

このオプションでは、特定の名前でマークされたトランザクションより前のデータベースアクティビティを回復します。マークを含むトランザクションは再度実行されません。[特定の日時以降]オプションを選択しない場合、最初に指定された名前でマークされているトランザクションで回復が停止します。[特定の日時以降]オプションを選択する場合、指定した日時以後の、最初に指定された名前でマークされているトランザクションで回復が停止します。

注: このオプションは Microsoft SQL Server 2000 および Microsoft SQL Server 2005 で使用できます。

特定の日時以降

Microsoft SQL Server が指定されたログ マークを探す際に、どの時点より後を探すかを指定できます。ログ マークのタイムスタンプが指定した時刻を過ぎた場合のみ、指定されたマークで回復が停止されます。同じ日付と時刻のエントリが[特定の日時に停止する]オプションでも使用されます。このオプションは[ログ マークで停止する]または[ログ マークの前で停止する]と共に使用します。

[回復完了状態]オプション

[回復完了状態]オプションを使用すると、リストア後のデータベースの最終状態を指定できます。以下のオプションを選択できます。

データベースは稼働状態 別のトランザクション ログのリストアは不可

このオプションを選択すると、コミットされていないトランザクションがリストア操作でロールバックされます。データベースは回復処理後に使用できます。

注: 自動選択を使用する場合、セッションごとに[回復完了状態]から手動で選択する必要はありません。CA ARCserve Backup がセッションの選択を行い、セッションごとに適切なオプションを自動的に適用します。セッションの自動選択オプションを使用しない場合は、Microsoft SQL Server のリストア手順に関するルールに従う必要があります。

詳細については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能

リストア処理で、コミットされていないトランザクションをロールバックしないようにします。また、データベースが別のファイルとファイルグループ、差分、またはトランザクション ログのリストアを受け入れられる状態にします。このリストア ジョブが完了した後に、ほかの差分バックアップまたはトランザクション ログを適用する場合は、このオプションまたは「読み取り専用」オプションを選択する必要があります。このオプションは、一般的に、自動選択を指定せずに複数のセッションからデータベースをリストアするときに使用されます。

データベースは読み取り専用。別のトランザクション ログのリストアは可能

スタンバイ(ウォーム バックアップ) データベースを準備します。スタンバイ データベースとは、実稼働のプライマリ サーバに障害が発生した場合にオンラインにできる、異なるサーバ上にあるセカンド データベースのことです。このデータベースには、プライマリ サーバ上にあるデータベースのコピーが格納されます。データベースは、読み取り専用の特別な形式でオンライン状態になります。別のリストアが行われる場合にはリストア状態に戻すことができます。アンドゥ ファイルとは、リストア中に作成され、SQL Server がこの変更を行うために必要とする情報が含まれます。アンドゥ ファイルの保存場所とファイル名は、リストア オプションで指定する必要があります。

注: スタンバイ データベースはバックアップに適しません。スタンバイ データベースが明示的にバックアップに指定された場合、バックアップは失敗します。スタンバイ データベースを含む SQL Server がバックアップに選択されると、エージェントによってスタンバイ データベースは除外されます。

スタンバイ サーバの詳細については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

データベースの整合性チェック(DBCC)オプション

データベースの整合性チェック(DBCC)では、データベースの物理的および論理的な整合性がテストされます。DBCC には、以下のオプションがあります。

バックアップ前

データベースのバックアップ前に DBCC を実行します。(このオプションはリストアでは使用できません。)

バックアップ後

データベースのバックアップ後に DBCC を実行します。(このオプションはリストアでは使用できません。)

DBCC が失敗した場合もバックアップを続行する

バックアップ前の整合性確認でエラーが報告された場合でも、データベース バックアップを実行します。(このオプションはリストアでは使用できません。)

リストア後

データベースのリストア後に DBCC を実行します。（このオプションはバックアップでは使用できません。）

リストア前

データベースのオンライン破損ページ修正の前に DBCC を実行します。（SQL Server 2005 またはそれ以降の Enterprise Edition のみ。このオプションはバックアップでは使用できません。）

インデックスをチェックしない

ユーザ定義のテーブル用インデックスをチェックせずに、DBCC を実行します。

注：システム テーブルのインデックスは、このオプションの選択に関係なくチェックされます。

データベースの物理的な整合性をチェックする

破損ページおよび一般的なハードウェア障害を検出しますが、データベーススキーマの規則に違反するデータの検証は行いません。ただし、ページとレコードヘッダの物理構造の整合性、およびページのオブジェクト ID とインデックス ID 間の整合性のチェックは行われます。このオプションは Microsoft SQL Server 2000 またはそれ以降でのみ利用できます。SQL Server 7.0 のデータベースでは、このオプションを[グローバル エージェント オプション]タブから選択した場合は無視されます。

DBCC 中に生成されたすべてのエラー メッセージは、Agent for Microsoft SQL Server のログ ファイル `sqlpagw.log` に記録されます。このログ ファイルはバックアップ エージェントのディレクトリに格納されています。

例: DBCC オプションの仕組み

以下の例は、DBCC オプションが[エージェント バックアップ オプション]ダイアログボックスの[グローバル オプションより優先させる]との組み合わせで、どのように動作するのかを示しています。

- [グローバル オプションより優先させる]を指定した場合、データベース レベルで選択する DBCC オプションが、適用される唯一の DBCC オプションになります。
- [グローバル オプションより優先させる]を指定しなかった場合、データベースに対して指定したすべての DBCC オプションとグローバル オプションで選択したすべての DBCC オプションが共に適用されます。

[グローバル オプション]ダイアログ ボックスの[エージェント オプション]タブで、以下のデータベースの整合性チェック オプションを指定します。

- バックアップ後
- インデックスをチェックしない

[エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスで、[グローバル オプションより優先させる]を選択せず、以下のデータベースの整合性チェック オプションを指定します。

- バックアップ前
- DBCC が失敗した場合もバックアップを続行する

注: [エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックスを開くには、バックアップ マネージャを開いて[ソース]タブをクリックし、CA ARCserve Backup サーバを参照して展開します。CA ARCserve Backup データベースを右クリックして、コンテキスト メニューから[エージェント オプション]を選択します。

バックアップ ジョブをサブミットすると、指定した DBCC オプションが論理的な順序で適用されます。つまり、バックアップを開始する前に、DBCC を実行します。DBCC が失敗した場合でも、バックアップを実行します。バックアップの完了後は、インデックスをチェックしません。

リストアで強制的に名前付きパイプを使用する

このオプションは、データを Microsoft SQL Server に返すのに名前付きパイプを使用するようにエージェントに強制します。Virtual Device Interface が適切に機能していない場合に、このオプションによってセッションをリストアする代替の方法が提供されます。このオプションは Microsoft SQL Server 7.0 および Microsoft SQL Server 2000 で使用できます。

チェックサムでエラーが発生してもリストアを続行する

このオプションは、Microsoft SQL Server 2005 が、バックアップに含まれるデータとチェックサムに不整合を検出した場合に、リストアの処理を続行できるようにします。

その他

以下は、選択可能なその他のオプションです。

リストアで強制的に既存ファイルまたはデータベースに上書きする

このオプションを使用すると、リストアしているデータベースの一部ではないと認識されたファイルが Microsoft SQL Server により上書きされます。「WITH REPLACE」オプションを使用することを求めるメッセージが Microsoft SQL Server から表示された場合のみ、このオプションを使用します。

Microsoft SQL Server は、データベースのリストアおよびファイルまたはファイル グループのリストア操作でこのオプションをサポートしています。

重要: Microsoft SQL Server 2005 では、デフォルトで、フルまたは一括ログ復旧モデルを使用してオンライン データベースを上書きすることができないよう設定されています。代わりにエラー メッセージが表示され、ログの末尾のバックアップを実行してデータベースをオフラインにするか、「WITH REPLACE」オプションを使用してリストアするように通知されます。このオプションを選択すると、「WITH REPLACE」オプションをリストアに適用し、SQL Server によって既存のデータベースが上書きされます。

リストア後、ユーザのアクセスを制限する

新しくリストアされたデータベースへのアクセスを、db_owner、dbcreator、sysadmin の各ロールのメンバに制限するように指定します。Microsoft SQL Server 2000 と Microsoft SQL Server 2005 では、Microsoft SQL Server 7.0 の DBO_ONLY に代わって RESTRICTED_USER オプションが使用されています。このオプションは、[データベースは操作可能状態。別のトランザクション ログのリストアは不可]オプションと共に使用する必要があります。

レプリケーションの設定を保持する

パブリッシュされたデータベースを、それが作成された場所ではないサーバにリストアする際に、レプリケーション設定を維持します。その結果、Microsoft SQL Server では、データベースやログのバックアップがウォーム スタンバイ サーバにリストアされても、レプリケーションの設定がリセットされなくなります。ログ配布と共に動作するようレプリケーションを設定する場合に、[レプリケーションの設定を保持する]オプションを使用します。

[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを指定してリストアする場合、このオプションを選択することはできません。このオプションは、[データベースは操作可能状態。別のトランザクション ログのリストアは不可]オプションと共に使用する必要があります。

現在の ARCserve データベースを元の場所として使用する

[元の場所へリストア]が選択されている場合、このセッションにバックアップされたデータベースではなく、現在の ARCserve データベースが上書きされます。このオプションは、セッションおよびログ情報を、ある ARCserve ドメインから他の ARCserve ドメインにマイグレートするために使用します。

現在の ARCserve ドメイン メンバシップを残しておく

リストアを開始する前に、ARCserve ドメイン名、プライマリ サーバ ID、およびメンバ サーバ ID などの ARCserve ドメインに関する現在の情報を、デスティネーション データベースから取得します。リストア後も情報が保持されるようにするために、この情報がリストア完了後に書き込まれます。このオプションは、セッションの自動選択、[データベースを操作可能な状態にする]、および[現在の ARCserve データベースを元の場所として使用する]オプションが選択されている場合に有効になります。

データベース ファイル オプション

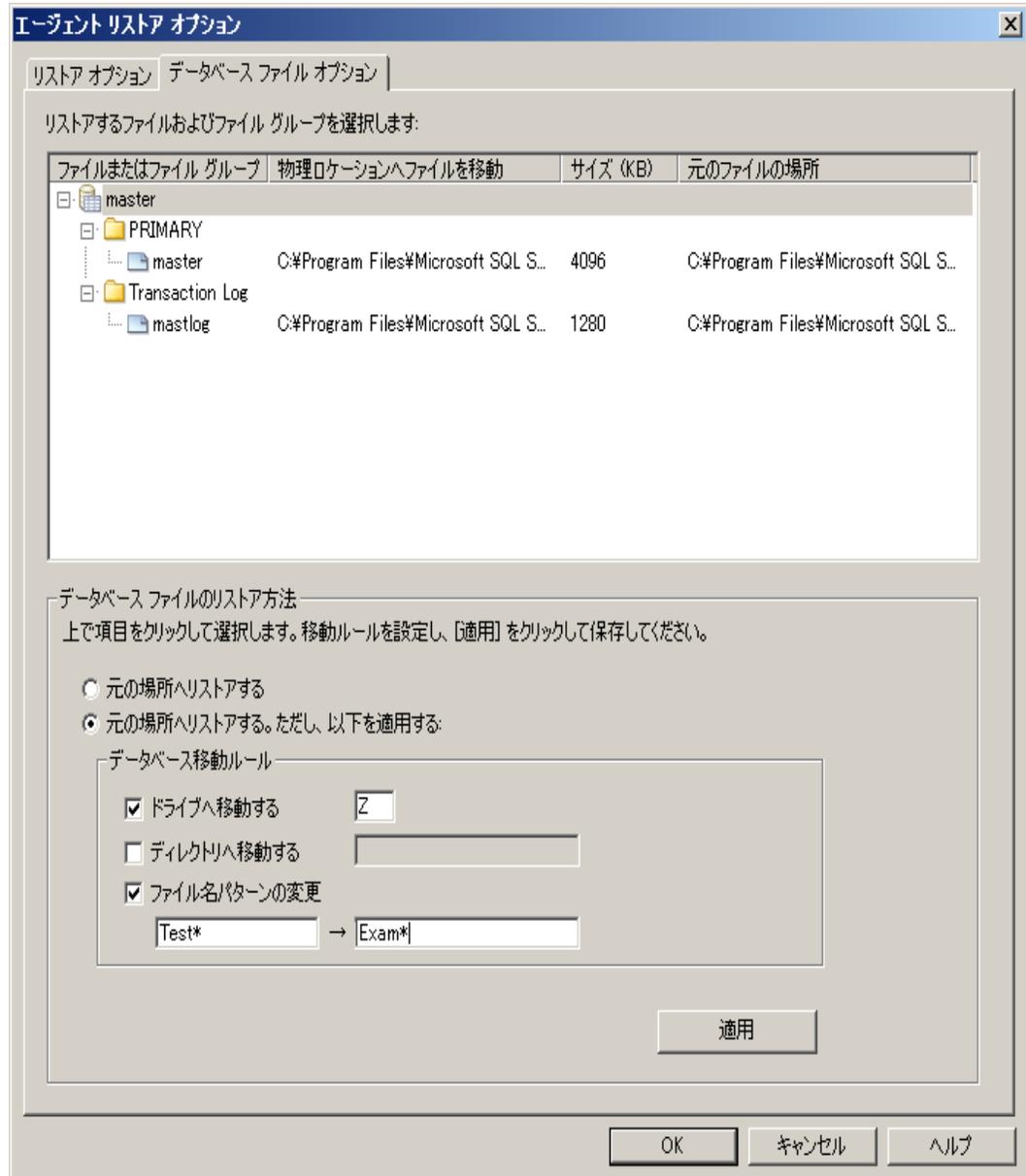
データベース ファイル オプションを使用して以下のことができます。

- データベースのファイル リストおよび関連情報を表示
- ファイルとファイル グループのリストアでリストアされるファイルを選択するか、部分リストアでリストアされるグループ ファイルを選択します。
- リストア時にファイルの格納場所または名前を変更します。格納場所を変更できるのは、フル バックアップからリストアする場合、または自動選択を使用している場合のみです。

ファイルは、個別に、または移動ルールを使用して異なる格納場所に移すことができます。移動ルールは、データベース全体、個々のファイル グループ、またはトランザクション ログに適用するか、個々のファイルに適用することができます。ファイルを移動するルールを特定のドライブやディレクトリ パスに指定するか、それぞれ独自にファイル名を変更することができます。データベースまたはファイル グループ レベルでファイル名を変更する場合は、ワイルドカードのパターンを使用してファイル名の変更を指定できます。

データベース ファイルのロケーションを変更する方法

1. [エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスで、[データベース ファイル オプション]タブを選択します。



2. ナビゲーション ツリーで、以下のいずれかのオプションを選択し、変更を適用します。
 - データベース内のすべてのファイルにルールを適用するには、データベースを選択します。
 - 特定のファイル グループに含まれるファイル、またはトランザクション ログにルールを適用するには、ファイル グループまたはトランザクション ログを選択します。
 - 単一のファイルを変更する場合は、ファイルを選択します。

3. [データベース ファイルのリストア方法]で、必要に応じて以下のオプションのいずれかを選択します。

[元の場所へリストア]

データベース レベルで適用可能です。 ドライブ文字、パス、およびファイル名への変更をクリアします。 変更を有効にするには、このオプションを選択後、[適用]ボタンをクリックする必要があります。

[元の場所へリストアする。ただし、以下を適用する]

データベース、ファイル グループとトランザクション ログ、およびファイル レベルで適用可能です。 リクエストされた変更を、バックアップが実行された時のファイルの格納場所に基づいて、ドライブ文字、パス、およびファイル名に適用します。

[以下を除き、移動ルールを継承する]

ファイル グループとトランザクション ログ、およびファイル レベルで利用可能です。 リクエストされた変更を、すでに行われた変更に基づいて、ドライブ文字、パス、およびファイル名に適用します。

4. [データベース移動ルール]、[ファイル グループ移動ルール]、または[ファイル移動ルール]とラベルされたボックスの中で、以下のオプションの中から 1 つ以上選択します。
 - [ドライブへ移動する]チェック ボックスをオンにし、隣のフィールドに別のドライブ文字を入力します。
 - [ディレクトリへ移動する]チェック ボックスをオンにし、隣のフィールドに別のディレクトリ パスを入力します。
 - [ファイル名パターンの変更]チェック ボックスをオンにし、データベース全体、ファイル グループ、またはトランザクション ログのファイル名を変更します。 名前を変更するファイル名に一致するワイルドカードのパターンを以下のフィールドに入力し、変更後の名前となるワイルドカードのパターンを[変更後]フィールドに入力します。

たとえば、Group で始まるすべてのファイルを Member に変更する場合は、フィールドに Group* と入力し、[変更後]フィールドに Member* と入力します。

- [ファイル名を変更する]チェック ボックスをオンにし、異なるファイル名を入力して単一のファイルの名前を変更します。
5. [適用]ボタンをクリックします。
変更がツリーに適用されます。
注: 変更を適用しないで別の選択を行ったり、[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスを閉じてしまった場合は、選択したものが失われます。
指定したルールによって、ディスク上の同じ物理的な位置が 2 つのファイルに与えられる結果となった場合、ダイアログ ボックスの最下部、および影響の及ぶファイルとルールが適用されたオブジェクトの両方の隣のツリーに、赤色のインジケータが表示されます。
 6. 適用する変更ごとに、手順 2 から 5 を繰り返します。
注: ワイルドカードのパターンを使用してファイル名を変更する場合で、元のファイル名のパターンが適用先のファイルに 1 つ以上一致しない場合は、ダイアログ ボックスの最下部、および影響の及ぶファイルとルールが適用されたオブジェクトの両方の隣のツリーに、黄色のインジケータが表示されます。

ツリー単位のリストア方式でリストアする

ツリー単位の方式を使用してリストアする方法

1. リストア マネージャの[ソース]タブで、ドロップダウン リストから、[ツリー単位]を選択します。
2. ナビゲーション ツリーで、データベースをバックアップするコンピュータを展開して、データベース インスタンスを表示します。黄色のデータベース アイコンをクリックして、リストアするデータベースを含むデータベース インスタンスを展開し、データベース名をクリックして選択します。
3. 最新のバックアップを使用するには、以下の手順に従います。

最新以外のバックアップを使用するには、[バージョン履歴]をクリックします。
[バージョン履歴]ダイアログ ボックスが開きます。

注: [バージョン履歴]ダイアログ ボックスには、各バックアップ セッションが保存されているメディア名、バックアップのセッション番号、バックアップ方式、バックアップを行った日時に関する情報が表示されます。[バージョン履歴]ダイアログ ボックスを使用すると、バックアップ メディアに保存されている特定のセッションを選択してリストアできます。

4. データベース名を右クリックし、コンテキスト メニューから[エージェント オプション]を選択します。[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。ダイアログ ボックスは、選択したセッションのバックアップ方法およびデータベースのバックアップ元となる SQL Server のバージョンに応じて異なります。

5. 以下の手順のいずれかを実行して、リストア オプションを選択します。
 - [OK] ボタンをクリックしてデフォルトのオプションを適用し、セッションの自動選択オプションで最適なリストア手順およびリストア ジョブ オプションを選択するようにします。 デフォルトでは、セッションの自動選択チェック ボックスがすべてのリストア ジョブでオンになっています。
 - このリストア手順で使用するオプションを手動で選択し、[OK] をクリックします。オプションの詳細については、「リストア オプション」を参照してください。
6. [ソース] タブに戻ったら、目的のセッションがリストア用に選択されていることを確認します。
7. リストア マネージャで[デスティネーション] タブをクリックし、以下のいずれかの手順でデスティネーションを選択します。
 - 元のサーバ上に元のデータベース名を使用して元のインスタンスをリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア] オプションを選択します(未選択の場合)。
 - 異なるサーバ上で、同じバージョンとインスタンス名を持つ Microsoft SQL Server インスタンスにリストアする場合、[ファイルを元の場所へリストア] チェックボックスをオフにして、リストア先マシンを選択します。 リストア先のマシンには、元と同じ名前を持つインスタンスがあり、同じ Microsoft SQL Server のバージョンまたはそれ以降のバージョンがあることが必要です。
 - 元のデータベース名を使用して異なるサーバまたは元のサーバ上の異なるインスタンスにリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア] オプションをオフにして、リストア先のサーバの Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。
 - 異なるデータベース名を使用してリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア] オプションをオフにして、リストア先のサーバを選択し、リストア先サーバ上の Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。 以下の例のように、表示されているパスの末尾に「¥」記号を入力し、続けてデータベースの新しい名前を入力します。

¥¥SERVER1¥MSSQLSERVER¥Lightning

¥¥SERVER2¥WEATHER¥Thunder

注: Microsoft SQL Server 7.0 のインスタンスからバックアップしたデータベースを Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 のインスタンスにリストアする場合、ターゲット インスタンスがデフォルトのインスタンスであっても、明示的にこのインスタンスを選択する必要があります。

8. [開始]をクリックします。
[リストア メディア]ダイアログ ボックスが表示されます。
9. リストア ジョブが実行されるバックアップ サーバを選択し、[OK]をクリックします。
[セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスが開きます。
10. Microsoft SQL Server がロードされている Windows マシンのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じて変更します。ユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。
 - a. [マシン]タブでセッションを選択し、[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログ ボックスが開きます。
 - b. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
 - c. このセッションにセッション パスワードが割り当てられている場合は、そのセッション パスワードを入力します。
 - d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
 - e. [OK]をクリックします。
11. デスティネーション サーバのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを変更します。データベース サーバのユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。
 - a. [DBAgent]タブを選択します。
 - b. セッションを選択して[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログ ボックスが開きます。
 - c. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
 - d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
 - e. [OK]をクリックします。
12. [セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスで[OK]ボタンをクリックします。[ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスが開きます。
13. [ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスでは、必要に応じてジョブの実行時刻を指定したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、バックアップ ジョブに説明を入力したり、ソース優先度を選択したりすることができます。
14. ジョブをサブミットするには[OK]ボタンをクリックします。[即実行]を選択した場合は、[ジョブ ステータス]ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用してジョブをモニタします。[ジョブ ステータス]ウィンドウの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

セッション単位のリストア方式でリストアする

セッション単位の方式を使用してリストアする方法

1. リストア マネージャの[ソース]タブで、ドロップダウン リストから[セッション単位]を選択します。CA ARCserve Backup でバックアップしたときに使用したメディアが一覧表示されます。
2. 特定のサーバからのセッション、または特定のサーバ上にある特定のデータベースからのセッションのみを表示するフィルタを作成する場合は、次の手順に従います。
 - a. [フィルタ]タブを選択します。[フィルタ]ダイアログ ボックスが開きます。
 - b. [SQL エージェント フィルタ]タブをクリックします。[SQL エージェント フィルタ]ダイアログ ボックスが開きます
 - c. 特定のサーバからのセッションをリストアする場合は、マシン名を入力します。特定のサーバ上にある特定のデータベースからのセッションをリストアする場合は、マシン名とデータベース名を入力します。

Microsoft SQL Server 2000 または Microsoft SQL Server 2005 でデータベースの特定のインスタンスをリストアする場合は、マシン名、インスタンス名、およびデータベース名を入力することもできます。

- d. [OK]をクリックします。

注: フィルタの設定を適用すると、メディア項目を展開して結果を表示できるようになります。メディア項目をすでに展開していた場合は、そのメディア項目をいったん折り畳んでから再び展開すると結果が表示されます。

3. リストアするバックアップが保存されているメディアを展開し、リストアするデータベースまたはログを含むセッションを選択します。

注: Microsoft SQL Server バックアップでは、メディア上の各セッションに対し 1 つのデータベース全体、部分、ファイルとファイルグループ、またはトランザクションログ バックアップがあります。

4. リストアするバックアップ セッションが含まれているセッションを右クリックし、ポップアップ ウィンドウから[バックアップ エージェント オプション]を選択します。

[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。このダイアログ ボックスは、選択したセッションのバックアップ方法およびデータベースのバックアップ元となる SQL Server のバージョンに応じて異なります。

5. 以下の手順のいずれかを実行して、リストア オプションを選択します。
 - [OK] ボタンをクリックしてデフォルトのオプションを適用し、セッションの自動選択オプションで最適なリストア手順およびリストア ジョブ オプションを選択するようにします。デフォルトでは、セッションの自動選択チェック ボックスがすべてのリストア ジョブでオンになっています。
 - このリストア手順で使用するオプションを手動で選択し、[OK] をクリックします。オプションの詳細については、「リストア オプション」を参照してください。

重要: [エージェント リストア オプション] ダイアログ ボックスの自動選択オプションを使用すると、自動的にリストアが必要なセッションが選択され、選択したオプションをセッションごとに適切に適用されます。
6. [ソース] タブに戻ったら、目的のセッションがリストア用に選択されていることを確認します。
7. リストア マネージャで[デスティネーション] タブをクリックし、以下のいずれかの手順でデスティネーションを選択します。
 - 元のサーバ上に元のデータベース名を使用して元のインスタンスをリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア] オプションを選択します(未選択の場合)。
 - 異なるサーバ上で、同じバージョンとインスタンス名を持つ Microsoft SQL Server インスタンスにリストアする場合、[ファイルを元の場所へリストア] チェックボックスをオフにして、リストア先マシンを選択します。リストア先のマシンには、元と同じ名前を持つインスタンスがあり、同じ Microsoft SQL Server のバージョンまたはそれ以降のバージョンがあることが必要です。
 - 元のデータベース名を使用して異なるサーバまたは元のサーバ上の異なるインスタンスにリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア] オプションをオフにして、リストア先のサーバの Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。
 - 異なるデータベース名を使用してリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア] オプションをオフにして、リストア先のサーバを選択し、リストア先サーバ上の Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。以下の例のように、表示されているパスの末尾に「¥」記号を入力し、続けてデータベースの新しい名前を入力します。

¥¥SERVER1¥MSSQLSERVER¥Lightning

¥¥SERVER2¥WEATHER¥Thunder
 - 注: Microsoft SQL Server 7.0 のインスタンスからバックアップしたデータベースを Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 のインスタンスにリストアする場合、ターゲット インスタンスがデフォルトのインスタンスであっても、明示的にこのインスタンスを選択する必要があります。

8. [開始]をクリックします。
[リストア メディア]ダイアログ ボックスが表示されます。
9. リストア ジョブが実行されるバックアップ サーバを選択し、[OK]をクリックします。
[セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスが開きます。
10. Microsoft SQL Server がロードされている Windows マシンのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じて変更します。ユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。
 - a. [マシン]タブでセッションを選択し、[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログ ボックスが開きます。
 - b. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
 - c. このセッションにセッション パスワードが割り当てられている場合は、そのセッション パスワードを入力します。
 - d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
 - e. [OK]をクリックします。
11. デスティネーション サーバのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを変更します。データベース サーバのユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。
 - a. [DBAgent]タブを選択します。
 - b. セッションを選択して[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログ ボックスが開きます。
 - c. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
 - d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
 - e. [OK]をクリックします。
12. [セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスで[OK]ボタンをクリックします。[ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスが開きます。
13. [ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスでは、必要に応じてジョブの実行時刻を指定したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、バックアップ ジョブに説明を入力したり、ソース優先度を選択したりすることができます。
14. ジョブをサブミットするには[OK]ボタンをクリックします。[即実行]を選択した場合は、[ジョブ ステータス]ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用してジョブをモニタします。[ジョブ ステータス]ウィンドウの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

SQL エージェント フィルタ オプション

リストア マネージャの SQL エージェント フィルタ オプションを使用して、特定のサーバに属する特定のデータベースのバックアップ セッションを表示できます。また、Microsoft SQL Server 2000 または Microsoft SQL Server 2005 の場合は、特定のインスタンスのバックアップ セッションも表示できます。このオプションは、セッション単位のリストア方式を使用する際に利用できます。

あるサーバ名に属するデータベースのバックアップ セッションの表示方法

1. リストア マネージャを開き、[リストア]メニューから[フィルタ]を選択します。
2. [フィルタ]ダイアログ ボックスで[SQL エージェント フィルタ]タブを選択します。
3. Microsoft SQL Server 7.0 を使用している場合は、マシン名、またはマシン名とデータベース名を入力します。

Microsoft SQL Server 2000 または Microsoft SQL Server 2005 を使用している場合は、マシン名とデータベース名、またはマシン名、インスタンス名、データベース名のすべてを入力します。

注： 名前に同じ文字列が含まれているデータベースが複数あるときには、該当する複数のデータベースが表示されます。

4. [OK]をクリックします。

注： フィルタの設定を適用すると、メディア項目を展開して結果を表示できるようになります。メディア項目をすでに展開していた場合は、そのメディア項目をいったん折り畳んでから再び展開すると結果が表示されます。

[セッションの自動選択]を使用した、代替ディスク場所へのリストア

[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスにデータ ファイルのファイル パスのエントリが表示されている場合にのみ、セッションの自動選択オプションを使用しても、データベースをディスクの別の場所へリストアできます。たとえば、ドライブ文字やディレクトリ パスが異なる場所へのリストアや、別のファイル名でのリストアができます。

注： BrightStor ARCserve Backup Version 9.0 以前のバージョンまたは BrightStor Enterprise Backup Release 10.0 を使用して作成したトランザクション ログのバックアップおよび差分バックアップの場合、[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスでそれらのファイル一覧を完全に表示することはできません。

セッションの自動選択を使用してデータベースまたはセッションを別の場所にリストアできるかどうかの判断方法

1. ツリー単位のリストアの場合は、データベースを右クリックします。セッション単位のリストアの場合は、このデータベースの最新のバックアップ セッションを右クリックします。
ポップアップ ウィンドウが開きます。
2. [エージェント オプション]を選択します。
[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。
3. 2 番目のフォルダ タブで、ファイル グループとデータ ファイルが表示された場合、自動選択を使用できます。この章の適切な手順に従ってデータをリストアします。

ディスクの代替場所への[セッション単位]のリストア

[以下のデータベース ファイルにリストア]セクションにファイル グループとデータ ファイルが表示されていない場合、セッションをディスクの代替場所にリストアするには、それらのセッションを個別にリストアする必要があります。セッションをディスクの代替場所に個別にリストアするには、以下のいずれかの方式を使用します。

- [\[セッション単位\]のリストアを 1 回のリストア ジョブで実行する](#) (98 ページ)。
- [\[セッション単位\]のリストアを、セッションごとに個別のリストア ジョブで実行する](#) (99 ページ)。
- [\[ツリー単位\]のリストアを、セッションごとに個別のジョブで実行する](#) (100 ページ)。

[セッション単位]のリストアを 1 回のリストア ジョブで実行する

CA ARCserve Backup のリストア マネージャを使用して、1 回のリストア ジョブでセッション単位のリストアを実行します。

1 回のリストア ジョブでセッション単位のリストアを実行する方法

1. リストア マネージャの[ソース]タブで、ドロップダウン リストから[セッション単位]を選択します。CA ARCserve Backup でバックアップしたときに使用したメディアが一覧表示されます。
2. リストアするバックアップが格納されているメディアを選択し、そのバックアップが含まれているセッションを展開して、現在のバックアップ セッションを選択します。
3. バックアップ セッションを右クリックし、ポップアップ ウィンドウから[エージェント オプション]を選択します。エージェントの[リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。

4. セッションの自動選択チェック ボックスをオフにし、[回復完了状態]で[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを選択します。

注: このオプションが選択されていない場合は、別のトランザクション ログのリストアはできません。

5. [OK]をクリックします。
6. データベースの必要な追加バックアップでは、2 番目に新しいセッションを選択し、エージェントの[リストア オプション]ダイアログ ボックスを開き、セッションの自動選択をオフにして、[回復完了状態]で[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを選択します。 [OK]をクリックします。
7. 初回バックアップ セッションは、他のバックアップ セッションが依存しているフルバックアップ セッションなので、ファイルのパスおよび名前を適宜変更します。
重要: フル バックアップ セッション以外のセッションでは、ファイルの名前またはパスを編集しないでください。
8. リストア ジョブのパッケージを完了して、リストア ジョブをサブミットします。 [セッション単位]のリストア方法については、このガイドの該当するセクションを参照してください。

[セッション単位]のリストアを、セッションごとに個別のリストア ジョブで実行する

データベースをセッションごとの個別のジョブでリストアする場合、各ジョブをホールド状態にして、ジョブが 1 つ終了するたびに、その次のジョブを個別に実行するようにします。

データベース リストア ジョブを個別のジョブとしてパッケージする方法

1. リストア マネージャの[ソース]タブで、ドロップダウン リストから[セッション単位]を選択します。 CA ARCserve Backup でバックアップしたときに使用したメディアが一覧表示されます。
2. リストアするバックアップが格納されているメディアを選択し、そのバックアップが含まれているセッションを展開して、リストアするデータベースの最新のフル バックアップ セッションを選択します。 これ以降のバックアップ セッションは、この最新のフル バックアップセッションに依存することになります。
3. バックアップ セッションを右クリックし、ポップアップ ウィンドウから[エージェント オプション]を選択します。 エージェントの[リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。
4. セッションの自動選択オプションをオフにし、ファイル名またはパスを適宜変更します。
5. [回復完了状態]で[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを選択します。

6. [OK]をクリックして[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスを閉じ、リストア ジョブをサブミットします。
7. リストアするデータベースの次のセッションを選択します。
8. バックアップ セッションを右クリックし、ポップアップ ウィンドウから[エージェント オプション]を選択します。エージェントの[リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。
9. セッションの自動選択オプションをオフにします。
10. これがリストアする最後のセッションでない場合は、[回復完了状態]の[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを選択します。

これがリストアする最後のセッションである場合は、[データベースは操作可能状態。別のトランザクション ログのリストアは不可]オプションが、[回復完了状態]のもとで選択されていることを確認します。
11. [OK]をクリックして、エージェントの[リストア オプション]ダイアログ ボックスを閉じ、リストア ジョブをサブミットします。[セッション単位]のリストア方法については、この章の該当するセクションを参照してください。
12. エージェントの[リストア オプション]ダイアログ ボックスが閉じる時点まで手順を繰り返し、すべてのバックアップ ジョブがリストア用にサブミットされるまで、リストア ジョブをサブミットします。

注: 次のジョブをオプションを選択する前に、前の選択をオフにしてください。

[ツリー単位]のリストアを、セッションごとに個別のリストア ジョブで実行する

ツリー単位方式でリストアする場合は、各セッションを個別のリストア ジョブとしてサブミットする必要があります。各ジョブをホールド状態にして、ジョブが 1 つ終了するたびに、その次のジョブを個別に実行するようにします。

ツリー単位のリストア方式を使ってセッションを個別のジョブとしてリストアする方法

1. リストア マネージャの[ソース]タブで、ドロップダウン リストから、[ツリー単位]を選択します。
2. ナビゲーション ツリーで、リストアするデータベースがバックアップされているコンピュータを展開します。黄色のデータベース アイコンをクリックして、リストアするデータベースを含むデータベース インスタンスを展開し、データベースを選択します。
3. [バージョン履歴]ボタンをクリックします。[バージョン履歴]ダイアログ ボックスが開きます。右方向へスクロールし、[方式]および[バックアップ時刻]という列を表示させます。

注: 各エントリは、時刻の逆順で表示されています。つまり、時刻がより新しいバックアップほど、リストの上位に表示されています。

4. [方式]の列で[データベース]と表示されているエントリで、最新のものを選択し、[選択]をクリックします。
5. 選択したデータベース セッションを右クリックし、コンテキスト メニューから[エージェント オプション]を選択します。[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。
6. ファイルの名前やパスを適宜変更し、[回復完了状態]の[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを選択します。
7. [OK]ボタンをクリックして[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスを閉じ、このリストア ジョブをサブミットします。ツリー単位のリストア手順は、「ツリー単位のリストア方式でリストアする」を参照してください。
8. [バージョン履歴]をもう一度クリックし、次のバックアップ セッションを選択します。
9. [エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。セッションの自動選択オプションをオフにします。
10. これがリストアする最後のセッションでない場合は、[回復完了状態]の[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションを選択します。

これがリストアする最後のセッションである場合は、[データベースは操作可能状態。別のトランザクション ログのリストアは不可]オプションが、[リストア完了状態]のもとで選択されていることを確認します。
11. [OK]ボタンをクリックして、[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスを閉じます。
12. リストア ジョブをサブミットします。ツリー単位のリストア手順は、「ツリー単位のリストア方式でリストアする」を参照してください。
13. [エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスを閉じてリストア ジョブをサブミットする時点から、リストアするすべてのバックアップ セッションがサブミットされるまで、これらの手順を繰り返します。

Microsoft SQL Server 2005 または 2008 を使用したオフラインの破損ページの修正

Microsoft SQL Server 2005 および 2008 には、データベース内のデータが破損している場合にそれを検出し、データ ページ レベルで破損を隔離する機能があります。システムデータベース「msdb」の「suspect_pages」テーブルの中で、あらゆる時点の既知の破損したページの最新リストを見つけることができます。SQL 2005 では、破損ページの検出および隔離に加えて、破損したデータ ページのみが上書きされるリストアを実行する機能も導入されました。これにより、わずかに破損したデータベースを素早く運用状態に戻すことができます。

注: この手順を開始する前に、データベースをオフラインにしないでください。

Microsoft SQL Server 2005 を使用してオフラインの破損ページ修正を実行する方法

1. データベースが単純復旧モデルを使用している場合は、完全復旧モデルに変更します。
2. (オプション)すでにレポートされているもの以外に破損したページがある場合にそれを特定するために、データベース上でデータベースの整合性チェック(DBCC CheckDB)を実行します。これは、手順 4 の一部として実行できます。
3. データベースを使用しているすべてのクライアントの接続を解除します。(解除しないと、以下の手順は失敗します)。
4. [ログの末尾をバックアップし、データベースは復元中の状態にする](ログ末尾)オプションを使用してトランザクション ログのバックアップを実行します。手順 2 を別途実施していない場合は、[バックアップ前]オプションおよび[DBCC が失敗した場合もバックアップを続行する]オプションも選択する必要があります。
5. データベースのオフラインの破損ページ修正のリストアを、以下の手順で実行します。
 - a. リストア マネージャを開きます。
 - b. [ソース]タブで、[ツリー単位]ビューを使用してデータベースの検出および選択を行います。
 - c. [エージェント リストア オプション]を開きます。
 - d. セッションの自動選択が選択されていることを確認します。
 - e. サブセットとして、[破損ページ修正 - オフライン]を選択します。
 - f. [回復完了状態]で、[データベースを操作可能な状態にする]を選択します。

- g. (オプション)リストア後にデータベースの整合性チェックを選択できます。
 - h. [OK]をクリックします。
 - i. [デスティネーション]タブで、[元の場所へリストア]を選択していない場合は選択します。
 - j. リストアを開始します。
6. 復旧モデルを手順 1 で変更した場合は、単純復旧モデルに変更します。
 7. データベースの使用を再開します。

Microsoft SQL Server 2005 または 2008 Enterprise、Data Center、 または Developer Editions を使用したオンラインの破損ページの修 正

Microsoft SQL Server 2005 および 2008 には、データベース内のデータが破損している場合にそれを検出し、データ ページ レベルで破損を隔離する機能があります。いずれかの時点で、既知の破損したページの最新リストが、システム データベース [msdb] の [suspect_pages] テーブルの中で見つかります。SQL 2005 では、破損ページの検出および隔離に加えて、破損したデータ ページのみが上書きされるリストアを実行する機能も導入されました。これにより、わずかに破損したデータベースを素早く稼動状態に戻すことができます。

注: この手順を開始する前に、データベースをオフラインにしないでください。

Microsoft SQL Server 2005 または 2008 Enterprise、Data Center、または Developer Editions を使用してオンラインの破損ページの修正を実行する方法

1. データベースが単純復旧モデルを使用している場合は、完全復旧モデルに変更します。
2. (オプション)すでにレポートされているもの以外に破損したページがある場合にそれを特定するために、データベース上でデータベースの整合性チェック(DBCC CheckDB)を実行します。これは、手順 4 の一部として実行できます。
3. データベースのオンラインの破損ページ修正のリストアを、以下の手順で実行します。
 - a. リストア マネージャを開きます。
 - b. [ソース]タブで、[ツリー単位]ビューを使用してデータベースの検出および選択を行います。
 - c. [エージェント リストア オプション]を開きます。
 - d. [自動選択]が選択されていることを確認します。
 - e. サブセットとして、[破損ページの修正 - オンライン]を選択します。

- f. [回復完了状態]で、[データベースを操作可能な状態にする]を選択します。
 - g. (オプション)リストア前にデータベースの整合性チェックを選択し、他に破損したページがないかを特定できます。(DBCC ではデータベースがオンラインである必要があるため、リストア前に DBCC ができるのはこのリストア タイプのみであることに注意してください。)
 - h. (オプション)リストア後にデータベースの整合性チェックを選択できます。
 - i. [OK]をクリックします。
 - j. [デスティネーション]タブで、[元の場所へリストア]を選択していない場合は選択します。
 - k. リストアを開始します。
- 4. 破損したページを含むテーブルを照会します。
 - 5. トランザクション ログ バックアップをデフォルト オプションで実行します。
 - 6. セッションの自動選択オプションを選択せず、[回復完了状態]を[データベースは操作可能状態]に設定して、この最新のトランザクション ログ バックアップのリストアを実行します。
 - 7. 復旧モデルを手順 1 で変更した場合は、単純復旧モデルに変更します。
 - 8. データベースの使用を再開します。

Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 クラスタ環境でのツリー単位のリストア

Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 クラスタ環境でツリー単位方式を使用してリストアする方法

- 1. リストア マネージャの[ソース]タブで、ドロップダウン リストから、[ツリー単位]を選択します。
- 2. ナビゲーション ツリーで、リストアするデータベースがバックアップされている Microsoft SQL Server の仮想サーバ名を展開します。黄色のデータベース アイコンをクリックして、データベース インスタンスを展開し、リストアするデータベースをクリックして選択します。

3. 最新のバックアップを使用するには、次の手順に進みます。

最新以外のバックアップを使用するには、[バージョン履歴]をクリックします。
[バージョン履歴]ダイアログ ボックスが開きます。リストアに使用するバックアップセッションを選択して、[選択]をクリックします。

注: [バージョン履歴]ダイアログ ボックスには、各バックアップ セッションが保存されているメディア名、バックアップのセッション番号、バックアップ方式、バックアップを行った日時に関する情報が表示されます。[バージョン履歴]ダイアログ ボックスを使用すると、バックアップ メディアに保存されている特定のセッションを選択してリストアできます。

4. データベース名を右クリックし、コンテキスト メニューから[エージェント オプション]を選択します。[エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。実際に表示されるダイアログ ボックスの内容は、リストア用に選択したセッションによって異なる場合があります。
5. 以下の手順のいずれかを実行して、リストア オプションを選択します。

- [OK]ボタンをクリックしてデフォルトのオプションを適用し、セッションの自動選択オプションで最適なリストア手順およびリストア ジョブ オプションを選択するようにします。デフォルトでは、セッションの自動選択チェック ボックスがすべてのリストア ジョブでオンになっています。
- このリストア手順で使用するオプションを手動で選択し、[OK]をクリックします。オプションの詳細については、「リストア オプション」を参照してください。

重要: [エージェント リストア オプション] ダイアログ ボックスの自動選択オプションを使用すると、自動的にリストアが必要なセッションが選択され、選択したオプションをセッションごとに適切に適用されます。

6. [ソース]タブに戻ったら、目的のセッションがリストア用に選択されていることを確認します。
7. リストア マネージャで[デスティネーション]タブをクリックし、以下のいずれかの手順でデスティネーションを選択します。
 - 元のサーバ上に元のデータベース名を使用して元のインスタンスをリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア]オプションを選択します(未選択の場合)。
 - 異なるサーバ上で、同じバージョンとインスタンス名を持つ Microsoft SQL Server インスタンスにリストアする場合、[ファイルを元の場所へリストア]チェックボックスをオフにして、リストア先マシンを選択します。リストア先のマシンには、元と同じ名前を持つインスタンスがあり、同じ Microsoft SQL Server のバージョンまたはそれ以降のバージョンがあることが必要です。

- 元のデータベース名を使用して異なるサーバまたは元のサーバ上の異なるインスタンスにリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア]オプションをオフにして、リストア先のサーバの Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。
- 異なるデータベース名を使用してリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア]オプションをオフにして、リストア先のサーバを選択し、リストア先サーバ上の Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。以下の例のように、表示されているパスの末尾に「¥」記号を入力し、続けてデータベースの新しい名前を入力します。

¥¥SERVER1¥MSSQLSERVER¥Lightning

¥¥SERVER2¥WEATHER¥Thunder

注： Microsoft SQL Server 7.0 のインスタンスからバックアップしたデータベースを Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 のインスタンスにリストアする場合、ターゲット インスタンスがデフォルトのインスタンスであっても、明示的にこのインスタンスを選択する必要があります。

8. [開始]をクリックします。
[リストア メディア]ダイアログ ボックスが表示されます。
9. リストア ジョブが実行されるバックアップ サーバを選択し、[OK]をクリックします。
[セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスが開きます。
10. Microsoft SQL Server がロードされている Windows マシンのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じて変更します。ユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。
 - a. [マシン]タブでセッションを選択し、[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログ ボックスが開きます。
 - b. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
 - c. このセッションにセッション パスワードが割り当てられている場合は、そのセッション パスワードを入力します。
 - d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
 - e. [OK]をクリックします。

注： マシンの認証にドメイン管理者のユーザ名とパスワードを使用することを推奨します。ドメイン管理者は、Microsoft SQL Server インスタンスが実行されているコンピュータには依存しません。DomainName¥UserName の形式でドメイン ユーザを指定します。

11. デスティネーション サーバのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを変更します。データベース サーバのユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。
 - a. [DBAgent]タブを選択します。
 - b. セッションを選択して[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログボックスが開きます。
 - c. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
 - d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
 - e. [OK]をクリックします。
12. [セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスで[OK]ボタンをクリックします。[ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスが開きます。
13. [ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスでは、必要に応じてジョブの実行時刻を指定したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、バックアップ ジョブに説明を入力したり、ソース優先度を選択したりすることができます。
14. ジョブをサブミットするには[OK]ボタンをクリックします。[即実行]を選択した場合は、[ジョブ ステータス]ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用してジョブをモニタします。[ジョブ ステータス]ウィンドウの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 環境でのセッション単位のリストア

セッション単位のリストア方式を使用してリストアする方法

1. リストア マネージャの[ソース]タブで、ドロップダウン リストから[セッション単位]を選択します。CA ARCserve Backup でバックアップしたときに使用したメディアが一覧表示されます。
2. 特定のサーバからのセッション、または特定のサーバ上にある特定のデータベースからのセッションのみをリストアするフィルタを作成する場合は、次の手順に従います。
 - a. リストア マネージャの[フィルタ]タブをクリックします。[フィルタ]ダイアログボックスが開きます。
 - b. [SQL エージェント フィルタ]タブをクリックします。[SQL エージェント フィルタ]ダイアログ ボックスが開きます。

- c. 特定のサーバからのセッションをリストアするには、マシン名を入力します。特定のデータベースのセッションをリストアするには、マシン名とデータベース名を入力します。データベースの特定のインスタンスをリストアするには、マシン名、インスタンス名、およびデータベース名を入力し、[OK]をクリックします。

注：フィルタの設定を適用すると、メディア項目を展開して結果を表示できるようになります。メディア項目をすでに展開していた場合は、そのメディア項目をいったん折り畳んでから再び展開すると結果が表示されます。

フィルタを作成しない場合は次の手順に進みます。

3. リストアするバックアップが保存されているメディアを選択し、バックアップが含まれているセッションを展開して、リストアするデータベースまたはログを選択します。
 4. リストアするデータベースまたはログの名前を右クリックし、コンテキスト メニューから [エージェント オプション]を選択します。[Backup Agent リストア オプション]ダイアログ ボックスが開きます。
 5. 以下の手順のいずれかを実行して、リストア オプションを選択します。
 - [OK]ボタンをクリックしてデフォルトのオプションを適用し、セッションの自動選択オプションで最適なリストア手順およびリストア ジョブ オプションを選択するようにします。デフォルトでは、セッションの自動選択チェック ボックスがすべてのリストア ジョブでオンになっています。
 - このリストア手順で使用するオプションを手動で選択し、[OK]をクリックします。オプションの詳細については、「リストア オプション」を参照してください。
- 重要：** [エージェント リストア オプション] ダイアログ ボックスの自動選択オプションを使用すると、自動的にリストアが必要なセッションが選択され、選択したオプションをセッションごとに適切に適用されます。
6. [ソース]タブに戻ったら、目的のセッションがリストア用に選択されていることを確認します。
 7. リストア マネージャで[デスティネーション]タブをクリックし、以下のいずれかの手順でデスティネーションを選択します。
 - 元のサーバ上に元のデータベース名を使用して元のインスタンスをリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア]オプションを選択します(未選択の場合)。
 - 異なるサーバ上で、同じバージョンとインスタンス名を持つ Microsoft SQL Server インスタンスにリストアする場合、[ファイルを元の場所へリストア]チェックボックスをオフにして、リストア先マシンを選択します。リストア先のマシンには、元と同じ名前を持つインスタンスがあり、同じ Microsoft SQL Server のバージョンまたはそれ以降のバージョンがあることが必要です。

- 元のデータベース名を使用して異なるサーバまたは元のサーバ上の異なるインスタンスにリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア]オプションをオフにして、リストア先のサーバの Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。
- 異なるデータベース名を使用してリストアするには、[ファイルを元の場所へリストア]オプションをオフにして、リストア先のサーバを選択し、リストア先サーバ上の Microsoft SQL Server インスタンスを選択します。以下の例のように、表示されているパスの末尾に「¥」記号を入力し、続けてデータベースの新しい名前を入力します。

¥¥SERVER1¥MSSQLSERVER¥Lightning

¥¥SERVER2¥WEATHER¥Thunder

- 注： Microsoft SQL Server 7.0 のインスタンスからバックアップしたデータベースを Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 のインスタンスにリストアする場合、ターゲット インスタンスがデフォルトのインスタンスであっても、明示的にこのインスタンスを選択する必要があります。

8. [開始]をクリックします。

[リストア メディア]ダイアログ ボックスが表示されます。

9. リストア ジョブが実行されるバックアップ サーバを選択し、[OK]をクリックします。

[セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスが開きます。

10. Microsoft SQL Server がロードされている Windows マシンのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じて変更します。ユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。

- a. [マシン]タブでセッションを選択し、[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログ ボックスが開きます。
- b. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
- c. このセッションにセッション パスワードが割り当てられている場合は、そのセッション パスワードを入力します。
- d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
- e. [OK]をクリックします。

注： マシンの認証にドメイン管理者のユーザ名とパスワードを使用することを推奨します。ドメイン管理者は、Microsoft SQL Server インスタンスが実行されているコンピュータには依存しません。DomainName¥UserName の形式でドメイン ユーザを指定します。

11. デスティネーション サーバのユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを変更します。データベース サーバのユーザ名とパスワードを確認または変更するには、以下の手順に従います。
 - a. [DBAgent]タブを選択します。
 - b. セッションを選択して[編集]ボタンをクリックします。[ユーザ情報]ダイアログボックスが開きます。
 - c. ユーザ名とパスワードを確認し、必要に応じてそれらを入力または変更します。
 - d. 入力したユーザ名、パスワード、およびセッション パスワードを、これからリストアするすべてのセッションに適用する場合は、[[ユーザ名とパスワード]をすべてのセッションに適用]オプションを選択します。
 - e. [OK]をクリックします。
12. [セッション ユーザ名およびパスワード]ダイアログ ボックスで[OK]ボタンをクリックします。[ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスが開きます。
13. [ジョブのサブミット]ダイアログ ボックスでは、必要に応じてジョブの実行時刻を指定したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、バックアップ ジョブに説明を入力したり、ソース優先度を選択したりすることができます。
14. ジョブをサブミットするには[OK]ボタンをクリックします。[即実行]を選択した場合は、[ジョブ ステータス]ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用してジョブをモニタします。[ジョブ ステータス]ウィンドウの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

付録 A: トラブルシューティングと惨事復旧

この付録では、CA ARCserve Backup および Agent for Microsoft SQL Server で発生する可能性のある代表的なエラー メッセージと、一般的な解決策および惨事復旧に関する重要な情報について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

- [CA ARCserve Backup およびエージェントの一般的な注意事項](#) (111 ページ)
- [Agent for Microsoft SQL のアップグレード時の注意事項](#) (113 ページ)
- [バックアップ時のデータベース ファイルのスキップまたは組み込み](#) (114 ページ)
- [エージェントおよび CA ARCserve Backup のエラー メッセージ](#) (116 ページ)
- [Microsoft SQL Server のエラー メッセージ](#) (119 ページ)
- [Microsoft SQL Server のレプリケーション](#) (121 ページ)
- [バックアップに適さないデータベースのエージェント動作の設定](#) (121 ページ)
- [Microsoft SQL Serverの惨事復旧](#) (123 ページ)

CA ARCserve Backup およびエージェントの一般的な注意事項

以下に、CA ARCserve Backup および Agent for Microsoft SQL Server の一般的な注意事項を説明します。

- CA ARCserve Backup では、ファイル名、ファイル グループ名、およびデータベース名には特殊文字(/、¥、*、<、>、? など)は使用できません。CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL では、データベース名、ファイルグループ名、および論理ファイル名に、角かっこ([])は使用できません。
- ファイル/ファイル グループのリストア時に、ファイルまたはファイル グループ セッションに続くログ セッションが存在しない場合は、ファイルが変更されているかどうかを CA ARCserve Backup が確認できません。そのため、最終的な回復完了状態を判断できません。デフォルトでは、[データベースは操作不可状態。別のトランザクション ログのリストアは可能]オプションが選択されます。ファイルまたはファイル グループをバックアップした場合は、直後に必ずログもバックアップしてください。[データベースの後にトランザクション ログをバックアップする]オプションの使用をお勧めします。
- Microsoft Windows Small Business Server 2003 SharePoint データベースは、Microsoft SQL Server Desktop Engine (MSDE)のインスタンス内に保存されます。SharePoint インスタンスは、SQL ネイティブの認証をサポートしていません。このデータベース インスタンスについては、Windows 認証を使用する必要があります。

- Windows 認証を使用して Microsoft SQL Server にログインして、仮想データベースのバックアップ処理やリストア処理を実行する場合は、Microsoft SQL Server に対するシステム管理者権限を持っている必要があります。これは Microsoft の要件です。
- CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server では、インスタンス名、データベース名、ファイル グループ名、データ ファイル名の文字数が合計で 170 文字を超えている場合、SQL Server データベースのバックアップおよびリストアはサポートされません。
- Microsoft SQL Server 2008 では、FILESTREAM と呼ばれるデータ タイプが導入されました。これはバイナリ データの大きなブロックをディスク上のファイルに格納します。FILESTREAM データは、ディスク上にディレクトリとして存在する論理 SQL Server ファイルに格納されます。SQL Server では FILESTREAM データのサイズが正確にレポートされないため、このデータのサイズはエージェントが直接計算します。このデータに大量のレコードが含まれている場合、計算に時間がかかり、参照時やバックアップ時のデータベース プロパティ照会に遅延が発生することがあります。
- 長いファイル名を使用するデータベースをリストアおよび移動したときにエラー メッセージが表示される場合は、データベースのファイル名を短い名前に変更してからリストア処理を実行します。
- SQL Server データベースのバックアップ時やリストア時に、CA ARCserve Backup サーバがエージェントからの応答をどれくらい待機するかを SendTimeOut パラメータおよび ReceiveTimeOut パラメータで定義します。これで、ネットワーク エラーなどの問題により、届く可能性のない応答をジョブが待機し続けることを防ぐことができます。このタイムアウト期間に達すると、待機中のジョブはネットワーク エラーにより失敗します。

ただし、大規模なリモートの SQL Server データベースをリストアする場合、特に SQL データ ファイルの作成が含まれる場合(別の SQL Server にリストアするときなど)、Agent for Microsoft SQL は応答に時間がかかります。これは SQL Server によるファイル作成に時間がかかり、この処理が完了するのを待たなければ Agent for Microsoft SQL は応答できないためです。

デフォルトのタイムアウト値は、1200 秒(20 分)に設定されています。大規模なデータ ファイルを含む SQL Server データベースをリストアするときは、この値を大きくする必要があります。たとえば、60 GB の SQL Server データベースの場合、値を 7200 秒(120 分)程度に設定する必要があります。通常は、デフォルト値(1200)でほとんどのデータベースのリストアやネットワーク エラーに対応できます。ただし、大規模な SQL Server データベースのリストア処理中にネットワークのタイムアウト エラーが発生する場合は、タイムアウト値を大きくする必要があります。リストアが完了した後、この値を再度 1200 に設定します。

SendTimeOut および ReceiveTimeOut キーは、CA ARCserve Backup サーバ マシンの以下の場所にあります。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\Base\Task\Remote
```

注：この設定は、Universal Agent サービスのもとで動作するすべてのエージェントに適用されます。

- [バックアップ メディアとディスクの比較]および[バックアップ メディア内容のスキャン]は、エージェントのセッションでは実行されません。
- CA ARCserve Backup マネージャおよび CA ARCserve Backup Universal Agent がエージェントと同じサーバにインストールされている場合、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server をアンインストールおよび再インストールする前に、CA ARCserve Backup マネージャおよび CA ARCserve Backup Universal Agent を停止する必要があります。
- TCP/IP 接続に失敗した場合、またはポート番号が変更された場合は、Universal Agent サービスを再起動します。
- ドメイン内のコンピュータでアカウント ログオン イベントのパススルー認証をサポートするには、NetLogon サービスを起動する必要があります。
- SQL Server CA ARCserve Backup データベースを保存する MSDE 2000 インスタンスは、SQL Server 2000 の他のエディションと同じようにサポートされていますが、MSDE 2000 はデータベースのサイズを 2 GB に制限しているため、CA ARCserve Backup データベースの保存にはお勧めしません。

注：MSDE 1.0 による SQL Server CA ARCserve Backup データベースの保存はサポートされていません。

- クラスタ環境では、Universal Agent をローカル システムとしてではなく、ドメイン管理者として実行します。これは、Microsoft SQL Server データベースのバックアップ時に、エージェントと Microsoft SQL Server のアクセス権の競合を避けるためです。

Agent for Microsoft SQL のアップグレード時の注意事項

以下に、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL のアップグレードに関する注意事項を説明します。

- Microsoft SQL Server をアップグレード(たとえば SQL Server 7.0 から SQL Server 2000 へ)したり、追加のインスタンスをインストールした後は、アカウント設定ユーティリティを使用して、適切な変更内容でこのエージェントを更新する必要があります。アカウント環境設定ユーティリティを実行しないと、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server では新規インスタンスまたは変更されたインスタンスが認識されないため、追加または更新されたインスタンスの追加機能を使用できない場合があります。また、アカウント設定ユーティリティを実行した後は、ただちにアップグレードしたインスタンスや新規インスタンスの最初のバックアップを行う必要があります。アカウント設定の詳細については、[「エージェントのアカウント設定の更新」](#)(129 ページ)を参照してください。

- クラスタ対応環境内の 64 ビット オペレーティング システム上で BrightStor ARCserve Backup r11.5 SP3 からこのリリースの CA ARCserve Backup へアップグレードした後に、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL のインストール ディレクトリにある DBAConfig.exe を実行して、保護する SQL Server インスタンスを設定する必要があります。

バックアップ時のデータベース ファイルのスキップまたは組み込み

CA ARCserve Backup r12 から、特定のデータベース ファイルをバックアップ ジョブの実行時に組み込んだりスキップしたりするのに使用するレジストリ キーが 2 つになりました。これらのキーの使用は、利用しているデータベース エージェントの種類によって決まります。

SkipDSAFiles レジストリ キーを使用するエージェント

Agent for Oracle、Agent for SAP R/3

- *.dbf
- Control*.*
- Red*.log
- Arc*.001

Agent for Domino

- *.nsf
- *.ntf
- Mail.box

Agent for Sybase

- マスタ デバイスの物理ファイル
- マスタ デバイス以外の物理ファイル
- ミラー デバイスの物理ファイル

Agent for Informix

- *.000

SkipDSAFiles レジストリ キーを使用する方法

1. ローカル サーバのバックアップを実行する場合:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ComputerAssociates¥CA ARCserve Backup¥Base¥Task¥Backup

2. エージェント バックアップを実行する場合:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ComputerAssociates¥CA ARCserve Backup¥ClientAgent¥Parameters

3. レジストリ キーを次のように設定します。値の名前: SkipDSAFiles

タイプ: DWORD

値: バックアップする場合は「0」、スキップする場合は「1」

BackupDBFiles レジストリ キーを使用するエージェント

Agent for Microsoft SQL

オンライン データベースの一部であるデータおよびトランザクション ログ ファイルのリストは、ファイル バックアップの開始時に Microsoft SQL Server から取得されます。通常は以下のファイルが含まれますが、他のファイルも含まれる場合があります。

- *.ldf
- *.mdf
- *.ndf

distmdl.mdf、distmdl.ldf、mssqlsystemresource.mdf、mssqlsystemresource.ldf は除きます。これらのファイルはスキップできません。また、SQL Server インスタンスがシャット ダウンされた場合は、データベース ファイルはスキップされません。

Exchange データベース レベル エージェント/Exchange ドキュメント レベル エージェント

- *.chk
- *.log
- Res1.log
- Res2.log
- *.edb
- *.stm

注: Exchange ブリック レベル エージェントはサポートされなくなりました。

BackupDBFiles レジストリ キーを使用する方法

1. ローカル サーバのバックアップを実行する場合:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ComputerAssociates¥CA ARCserve Backup¥Base¥Task¥Backup

2. エージェント バックアップを実行する場合:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ComputerAssociates¥CA ARCserveBackup¥ClientAgent¥Parameters

3. レジストリ キーを次のように設定します。値の名前: BackupDBFiles

タイプ: DWORD

値: スキップする場合は「0」(デフォルト)、バックアップする場合は「1」

エージェントおよび CA ARCserve Backup のエラー メッセージ

このセクションでは、CA ARCserve Backup および Agent for Microsoft SQL Server で発生する可能性のある代表的なエラー メッセージについて説明します。

バックアップまたはリストアが失敗する

バックアップまたはリストアに失敗しました。

原因:

バックアップまたはリストアが失敗する場合は、さまざまな原因が考えられます。

解決方法:

この問題を解決するには、以下の手順に従います。

- 不適切に設定されたデータベース オプションが原因でバックアップまたはリストアが失敗したのかどうかを確認します。詳細については、「SQL Server データベース オプションの有効な設定」を参照してください。
- Agent for Microsoft SQL Server のログ ファイル sqlpagw.log で、エラーの詳細を確認します。このログ ファイルは Backup Agent ディレクトリに格納されています。
- バックアップおよびリストアの詳細な操作手順については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

ブラウザ ツリーにアイコンが表示されない

バックアップ ソース ツリーまたはリストア デスティネーション ツリーに Microsoft SQL Server アイコンが表示されません。

原因:

原因として、Agent for Microsoft SQL Server がインストールされていない、CA ARCserve Universal Agent サービスが開始していないか正常に機能していない、または、以下に挙げるレジストリの場所にエージェント エントリが存在しないことが挙げられます。

SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\SQLPAAdp\Instances

SQL Server 7.0 インスタンスは、「dbasql170」という名前のキーで表されます。SQL Server 2000 およびそれ以降のインスタンスは、「dbasql@ インスタンス名」という名前のキーで表されます。

注: SQL 2000 およびそれ以降におけるデフォルト インスタンスのインスタンス名は、MSSQLSERVER です。

解決方法:

Agent for Microsoft SQL Server がインストールされていることを確認します。CA ARCserve Universal Agent サービスを再起動します。レジストリにエージェント エントリがあることをチェックし、必要に応じて Agent for Microsoft SQL Server を再インストールします。

E8535

クライアント エージェントからのデータを受信できません。

原因:

ネットワーク接続が失われたか、指定時間内にエージェントからの応答を受信しませんでした。Windows のエラー コードは、障害の原因を知らせるメッセージに記載されている場合があります。

解決方法:

ネットワーク接続をチェックして、Agent for Microsoft SQL Server のサービスが実行されていることを確認します。以下の Windows のレジストリ キーの ReceiveTimeout 値を増やしてください。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\CA\ARCserve Backup\Base\Task\Remote

この値の単位は秒です。デフォルト値は 1200 (20 分)です。

注: この設定は、Universal Agent サービスの下で操作するすべてのエージェントで共有されます。

AE50009 または AE50010

指定されたユーザとして Windows にログインできません。

指定されたユーザとして Microsoft SQL Server にログインできません。

原因:

CA ARCserve Backup が Agent for Microsoft SQL Server に接続できない場合、次のような原因が考えられます。

- ターゲット サーバの認証に失敗している。
- 指定された Windows ユーザが必要な Backup Operator 権限を持っていない。
- データベースの認証に失敗している。
- ターゲット データベースのインスタンスが停止しているか、またはインスタンスにアクセスできない。

このメッセージには、Windows または SQL Server からの特定のエラー コードとメッセージが追加されます。

解決方法:

このエラーを解決する方法

1. CA Backup Agent Universal Agent サービスがターゲット サーバ上で実行されていることを確認します。
2. ターゲット サーバ上で、ターゲット データベース サーバのインスタンスが実行されているかどうかを確認します。実行されていない場合は再起動します。
3. ターゲット サーバへのログオンに使用したユーザ名とパスワードを確認します。
4. ターゲット サーバへのログオンに使用する、ドメイン アカウントまたはローカル アカウント認証を指定します。
5. ターゲット サーバのメモリに十分な空き容量があることを確認します。
6. Agent for Microsoft SQL Server の DLL がターゲット サーバに存在しているかどうかを確認します。
7. ターゲット サーバのレジストリに DLL のパスが正しく記述されているかどうかを確認します。

Microsoft SQL Server のエラー メッセージ

Microsoft SQL Server でエラーが発生する場合、さまざまな原因が考えられます。また、Microsoft SQL Server のエラーは、CA ARCserve Backup のエラー メッセージとして表示される場合があります。Microsoft SQL Server でエラーが発生した場合は、NativeError に示される値を確認します。

3023

データベースでのバックアップおよびファイル操作は順番に実行してください。

原因:

特定のデータベースのバックアップまたはリストア処理が実行中にもかかわらず、そのデータベースに対して別のバックアップまたはリストア処理が試行されました。

解決方法:

SQL Server Enterprise Manager など、データベースにアクセスするすべてのプログラムを終了します。データベースに対して実行中の処理が完了するまで待ってから、次の処理を再試行します。

3101

データベースは使用中なので、排他アクセスを獲得できませんでした。

原因:

別のプログラムがアクセス中のデータベースに対して、リストア処理が試行されました。

解決方法:

SQL Server Enterprise Manager など、データベースにアクセスするすべてのプログラムを終了してから処理を再試行します。

3108

master データベースをリストアするときは、シングル ユーザ モードで、RESTORE DATABASE を使用してください。

原因:

シングル ユーザ モードでデータベース サーバを起動していない状態で、master データベースに対してリストア処理が試行されました。

解決方法:

シングル ユーザ モードでデータベース サーバを起動する方法については、「マスタ データベースのリストア」を参照してください。

4305 または 4326

このバックアップ セットのログは...に終了します。これはデータベースに適用するには早すぎます。

原因:

トランザクション ログのリストアが間違った順序で試行されました(新しいトランザクション ログの後に古いトランザクション ログのリストアが試行されたか、最新のバックアップ処理の後にそのバックアップよりも古いトランザクション ログのリストアが試行されました)。

解決方法:

データベースの最新の全体バックアップまたは差分バックアップを再びリストアしてから、トランザクション ログをバックアップしたときの順序で最適用します。

詳細については、「Microsoft SQL Server Books Online」を参照してください。

Microsoft SQL Server データベースの制限事項

Microsoft SQL Server データベースには次のような制限があります。

- Microsoft SQL データベースに特殊文字(/、*、<>、? など)を含む名前を付けた場合、Microsoft SQL Server のデフォルトでは、ファイル、ファイル グループ、またはデータベースに、その特殊文字を含んだままその名前が付けられます。ファイル、ファイル グループ、またはデータベースの名前に特殊文字が含まれている場合、それらのバックアップ ジョブまたはリストア ジョブを実行するには、特殊文字を含まない名前に変更しておく必要があります。また、角かっこ文字([])は、どのオブジェクト名でも使用できません。

- Microsoft SQL Server 7.0 の[ログによる Point-in-Time リストア]オプション、または Microsoft SQL Server 2000 の[特定の日時に停止する]、[ログ マークで停止する]、[ログ マークの前で停止する]オプションを使用していて、指定したタイム スタンプやマークが Microsoft SQL Server によって検出されなかった場合、データベースは読み込み状態のままとなり、リストア ジョブの結果は未完了になります。

Microsoft SQL Server のレプリケーション

Microsoft 社では Microsoft SQL Server のレプリケーション機能はホット バックアップ用に設計されたものではないと説明しています。レプリケーションを使用した状態でバックアップおよびリストアを実行する場合は、必ず詳細について Microsoft SQL Server データベースの管理者ガイドを参照してください。

バックアップに適さないデータベースのエージェント動作の設定

Agent for Microsoft SQL Server には、バックアップに適さないデータベースの認識および処理方法を管理するためのルール セットが事前に定義されています。バックアップに適しているかどうかは、データベースのステータスおよびその他のプロパティによって決まります。CA ARCserve Backup は、以下の要因に応じて、エラーまたは警告を通知し、ジョブを「失敗」または「未完了」としてマークします。

- データベースが不適格な理由
- データベースが明示的または黙示的にバックアップに選択された理由

データベース ステータスによって整理された以下の情報を使用して、デフォルトの動作を認識し、必要に応じて、デフォルトの応答を変更することができます。そのためには、CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server がインストールされているコンピュータの Windows レジストリのエージェント設定にコントローラ値を追加します。データベース ステータスごとに、選択した種類のデフォルト動作がリストされ、デフォルト動作を変更する設定の名前が表示されます。DWORDS の作成と設定の手順は表の後にあります。

データベース ステータス	データベースを選択した場合	インスタンス全体を選択した場合
スタンバイ(読み取り専用、追加のリストアの受信待機中)	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Standby Explicit	メッセージの種類: 警告 ジョブの結果: 成功 設定の名前: Standby Implicit
ミラー(SQL 2005/2008 フェールオーバー ミラーリング) ¹	メッセージの種類: 警告 ジョブの結果: 未完了 設定の名前: Mirror Explicit	メッセージの種類: なし ジョブの結果: 成功 設定の名前: Mirror Implicit ¹

データベース ステータス	データベースを選択した場合	インスタンス全体を選択した場合
問題あり(ファイルが壊れている、または足りない)、単純復旧モデル ²	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Suspect Explicit	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Suspect Implicit
オフライン	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Offline Explicit	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Offline Implicit
ロード / リストア(オフライン、追加のリストア受信待機中)	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Loading Explicit	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Loading Implicit
復旧(リストアされたデータの処理中)	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Restoring Explicit	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Restoring Implicit
見つからない(バックアップに選択したデータベースが存在しません)	エラー メッセージが投稿されました。 ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Restoring Explicit	メッセージの種類: N/A ³ ジョブの結果: N/A 設定の名前: N/A ³
アクセスできない(特定のユーザが何か他の理由でアクセスできない)	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定名: Inaccessible Explicit	メッセージの種類: エラー ジョブの結果: 失敗 設定の名前: Inaccessible Implicit

注:

¹ インスタンス全体を選択した場合、ミラー データベースはデータベース リストに表示されず、無視されます。 ミラー データベースがバックアップ対象に明示的に選択されるのは、ミラーリング パートナーシップの主要(アクティブ)メンバである間に選択され、その後のフェールオーバーにより、ミラー状態に入った場合になります。

² 完全復旧モデルまたは一括ログ復旧モデルを使用するデータベースが「問題あり」状態にある場合、エージェントは自動的に切り捨てなしでトランザクション ログのバックアップを実行しようとしています。これが、選択されたバックアップ オプションと一致する場合、このバックアップの結果にのみ、そのことが示されます。別のバックアップ方式を選択すると警告が表示され、選択したオプションを使用する代わりに切り捨てなしのトランザクション ログ バックアップが試行されていることが通知されます。

³ インスタンス全体を選択した場合、データベースが動的に一覧表示されるため、Agent for Microsoft SQL Server では、SQL Server インスタンスから削除されたデータベースについて認識できません。

SQL 2005 Point-In-Time スナップショットは、完全に無視されます。

動作を変更するには、以下の手順に従います。

1. レジストリ エディタで、レジストリ キー
「HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\SQLPAdp\Common」を見つけます。
2. 「Common」に新しいキー「Responses」を追加します。
3. 表に示された名前を使用して新しい DWORD を追加し、値を以下のように設定します。

0 = エージェントのデフォルト動作を使用します

1 = 警告メッセージが発生しました。ジョブの結果は「成功」に設定されます

2 = エラー メッセージが発生しました。ジョブの結果は「失敗」に設定されます

3 = 警告メッセージが発生しました。ジョブの結果は「未完了」に設定されます

4 = エラー メッセージが発生しました。ジョブの結果は「未完了」に設定されます

注: 値エントリを削除した場合、値を 0 に設定したのと同じこととなります。

Microsoft SQL Server の惨事復旧

Agent for Microsoft SQL Server は Microsoft SQL Server のバックアップ/リストア機能を使用しますが、これらの機能によって、データベースを構成する物理ファイルが実際にバックアップされるわけではありません。そのため、リストア処理が正常に実行されるには、必ずデータベース インスタンスがオンラインになっていなければなりません。

マスタ データベース

Microsoft SQL Server を実行するには、master データベースで以下の条件を満たす必要があります。

- master データベースと model データベースが存在している必要があります。
- master データベースと model データベースを作成するには、Microsoft SQL Server を再インストールし、Microsoft SQL Server のセットアップを使用して master データベースを再構築します。または、Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメントのセッションか、master データベースのオフライン バックアップをメディアからリストアします。

- master データベースおよび model データベースを作成した後、リストア コマンドを実行するために Microsoft SQL Server を起動する必要があります。

SQL 惨事復旧エレメントをリストアした場合は、リストアのすぐ後に、master、msdb、model の各データベースの通常のリストアを実行する必要があります。master データベースをリストアするには、Microsoft SQL Server をシングル ユーザ モードで起動する必要があります。master データベースのリストアの詳細については、[「master データベースのリストア」](#) (59 ページ)を参照してください。

リストアの潜在的な問題

master データベースは、Microsoft SQL Server に割り当てられているすべてのリソースを追跡します。Microsoft SQL Server の環境設定を大幅に変更した場合は、オフライン バックアップを実行しておかないと、リストア時に問題が発生する可能性があります。

たとえば、master データベースと 5 つのデータベースがある Microsoft SQL Server 設定では、master データベースをバックアップし、1 つのデータベースを削除し (Microsoft SQL Server から切断し)、それを構成しているファイルを削除します。オフラインバックアップを実行しないで、この時点で master データベースのバックアップをリストアすると、削除されたデータベースの情報が含まれます。結果として、そのデータベースには Microsoft SQL Server によって「問題がある (ユーザがアクセスできない)」というマークが付けられます。この場合は、そのデータベースを再び削除する必要があります。

上記のような問題を回避するために、少なくとも 1 回はオフライン バックアップを実行する必要があります。また、Microsoft SQL Server の環境設定に大幅な変更 (データベースの作成、デバイスの追加、データベースの削除など)を加えた場合は、オフラインバックアップを実行する必要があります。

同一のジョブで master、model、および msdb の各データベースのフル バックアップを実行すると、Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメントのバックアップ セッションが生成されます。このセッションを、惨事復旧用のオフライン バックアップとして使用することができます。

データベースをリストアする際の推奨する作業順序

競合の発生を回避するために、以下の順序でデータベースをリストアすることをお勧めします。

1. シングル ユーザ モードで master データベースをリストアします。
2. master データベースをリストアした直後に、マルチユーザ モードで msdb データベースをリストアします。
3. msdb データベースをリストアした直後に、マルチユーザ モードで model データベースをリストアします。

4. ほかのすべてのデータベースを、通常のマルチ ユーザ モードでリストアします。
5. ディストリビューション データベースがある場合は、レプリケーション用にリストアします。

注： 上記はあくまでも推奨する順序であり、必須ではありません。しかし上記の順序に従うことで、惨事復旧の作業を単純化して所要時間を短縮できます。msdb データベースをリストアする前に、master データベースと一緒に他のデータベースをリストアすると、Microsoft SQL Server では、msdb データベースがリストアされる際に、これら他のデータベースのバックアップおよびリストア履歴の一部が消失する可能性があります。

詳細については、MS SQL Server のマニュアルを参照してください。

惨事復旧の事例

通常、惨事復旧は以下の手順で行います。

1. 必要に応じて、Windows を再インストールします。
2. 必要に応じて、CA ARCserve Backup を再インストールします。
3. 必要に応じて、Agent for Microsoft SQL Server および Client Agent for Windows を再インストールします（Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメントをリストアするには、Client Agent が必要です）。
4. 以下の手順のいずれかを実行します。
 - Microsoft SQL Server 惨事復旧エレメント セッションがある場合、それをリストアします。
 - オフライン バックアップが存在する場合は、そのバックアップをリストアします。
 - オフライン バックアップや惨事復旧エレメントのセッションがなく、Microsoft SQL 7.0 または 2000 の rebuildm.exe ユーティリティがある場合は、このユーティリティを使用して master および model データベースを再作成します。SQL 2005 および 2008 の場合は、SQL Server のインストール ソフトウェアにこの機能があります。詳細については、Microsoft のマニュアルを参照してください。
 - オフライン バックアップまたは惨事復旧エレメントバックアップがない場合で、Microsoft SQL rebuildm.exe ユーティリティもない場合は、Microsoft SQL Server または MSDE ベースのアプリケーションを再インストールします。
5. master データベースをリストアします。
6. Microsoft SQL Server を通常のマルチ ユーザ モードで再起動します。
7. msdb データベースをリストアします。

8. model データベースをリストアします。
9. レプリケーション用のディストリビューション データベースを除き、データベースとトランザクション ログをすべてリストアします。
10. レプリケーションが使用されている場合、レプリケーション データベースをリストアします。

Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 クラスタ環境での惨事復旧の実行

Microsoft SQL Server 2000、2005 または 2008 のクラスタ環境で惨事復旧を実行する方法

1. Microsoft SQL Server を再インストールし、Microsoft SQL Server の仮想サーバを再作成します。
2. 必要に応じて、Agent for Microsoft SQL Server を再インストールします。
3. Microsoft SQL Server の master データベースをリストアします。
4. Microsoft SQL Server を通常のマルチ ユーザ モードで再起動し、残りのデータベースのリストアを、最初に msdb、次に model、レプリケーション用のディストリビューション データベースがあれば最後にそれを実行します。

注：惨事復旧の詳細については、「Disaster Recovery Option ユーザ ガイド」を参照してください。

付録 B: Microsoft SQL Server のセキュリティ設定

この付録では、CA ARCserve Backup 用に Microsoft SQL Server のセキュリティを設定する方法について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Microsoft SQL Server 認証の種類](#) (127 ページ)
[認証要件](#) (127 ページ)
[ユーザ認証を変更する方法](#) (128 ページ)

Microsoft SQL Server 認証の種類

Microsoft SQL Server には、次の 2 種類のユーザ認証方法が用意されています。

- アクティブな Windows ログイン認証の使用
- Microsoft SQL Server 固有のユーザ認証を使用する方法

Microsoft では可能な限り Windows 認証のみを使用するよう推奨していますが、Microsoft SQL Server 認証の方が適切な場合や、Microsoft SQL Server 認証が必要な場合があります。たとえば、データベースをクラスタで運用している場合は、Microsoft SQL Server 7.0 または Microsoft SQL Server 2000 で Microsoft SQL Server 認証を使用する必要があります。

認証要件

Microsoft SQL Server 認証を使用する場合は、管理者権限を持つユーザ アカウントを指定する必要があります。デフォルトでは、Microsoft SQL Server によって管理者権限を持つ「sa」というアカウントが作成されます。ただし、Agent for Microsoft SQL Server では、同等の権限を持つアカウントであるならいずれも使用できます。

Windows 認証を使用する場合は、データベースを実行しているマシンの管理者と同等の権限を持つアカウントには、通常、データベース インスタンスに対してもシステム管理者アクセス権限が付与されています。

注: Microsoft SQL Server の BUILTIN\Administrators ログイン エントリが削除されているか、このエントリに管理者権限が含まれていない場合、またはこのユーザ用に別の Microsoft SQL Server ログイン エントリがあり、そのエントリが管理者権限を持たない場合は、データベースに対するシステム管理者権限が、Windows 管理者またはドメイン管理者に自動的に付与されることはありません。

ユーザ認証を変更する方法

どの認証オプションを選択した場合でも、エージェントを設定した上で、それと一致するように Windows 側の設定が変更されていることを確認する必要があります。また、認証オプションを変更した場合も、既存のバックアップ ジョブをすべて更新して、認証オプションの変更を反映させる必要があります。Microsoft SQL Server 2000 およびそれ以降を使用している場合は、SQL Server のインスタンスごとにこの設定を更新する必要があります。

ユーザ認証を変更し、Windows と CA ARCserve Backup の両方の設定を更新して変更を反映するには、以下の処理を実行します。

1. Microsoft SQL Server の認証方法を確認、変更します。
2. Agent for Microsoft SQL Server アカウント設定を更新します。
3. ODBC (Open Database Connectivity) 設定を確認、変更します。
4. CA ARCserve Backup の既存のバックアップ ジョブを更新します。

この処理の手順の詳細については、次のセクションで説明します。

Microsoft SQL Server の認証方法の確認と変更

SQL Server 7.0 または 2000 の Microsoft SQL Server 認証方法の確認と変更の方法

1. Microsoft SQL Server を実行中のシステムで、Microsoft SQL Server Enterprise Manager を開きます。
2. ツリー ペインで[コンソール ルート]を展開して、ツリーの低位から該当の Microsoft SQL Server のインスタンスを見つけます。
3. そのインスタンスを右クリックしてドロップダウン リストから[プロパティ]を選択します。[プロパティ]ダイアログ ボックスが開きます。

4. [プロパティ]ダイアログ ボックスで[セキュリティ]タブを選択します。
5. [セキュリティ]グループ ボックスの[認証]フィールドで、[混合モード(Windows 認証と SQL Server 認証)]を選択して Microsoft SQL Server 認証を有効にするか、[Windows 認証]を使用して Windows の認証情報(ユーザ名とパスワード)のみを有効にするかどうかを選択します。
6. [OK]をクリックします。
7. 変更を有効にするために、SQL Server インスタンスを再起動します。

SQL Server 2005 および 2008 の Microsoft SQL Server 認証方法を確認または変更する方法

1. Microsoft SQL Server を実行中のシステムで、SQL Server Management Studio を開きます。
2. 変更する Microsoft SQL Server に接続します。
3. オブジェクト エクスプローラ ペインで、インスタンスを右クリックして、ドロップダウンリストの[プロパティ]を選択します。[プロパティ]ダイアログ ボックスが開きます。
4. [プロパティ]ダイアログ ボックスで[セキュリティ]タブを選択します。
5. [サーバー認証]で、[SQL Server 認証モードと Windows 認証モード]を選択して Microsoft SQL Server ベースの認証を有効にするか、[Windows 認証モード]を選択して、Windows 認証のみを有効にするかの、いずれかを行います。
6. [OK]をクリックします。
7. 変更を有効にするために、SQL Server インスタンスを再起動します。

エージェントのアカウント設定の更新

Agent for Microsoft SQL Server のアカウント設定を更新する方法

1. Windows の[スタート]メニューから Microsoft SQL Agent アカウント環境設定ユーティリティを起動します。[アカウントの設定]ダイアログ ボックスが表示されます。
2. 処理の最初の段階で変更した Microsoft SQL Server のインスタンスを見つけます。詳細については、「Microsoft SQL Server の認証方法の確認と変更」を参照してください。

3. 以下の条件に従って、Microsoft SQL Server 認証または Windows 認証を選択します。
 - Microsoft SQL Server で「Windows 認証」を選択した場合は、Windows 認証モードを選択します。
 - 「混合モード (Windows 認証と SQL Server 認証)」を選択し、Microsoft SQL 専用のユーザを使用して Microsoft SQL Server をバックアップする場合は、Microsoft SQL 認証を選択します。
 - 「混合モード (Windows 認証と SQL Server 認証)」を選択し、Microsoft SQL ユーザまたは Windows ユーザを使用して Microsoft SQL Server をバックアップする場合は、Windows 認証モードを選択します。
4. Microsoft SQL 認証を選択した場合は、システム管理者権限を持つ Microsoft SQL Server ユーザのユーザ名とパスワードを入力します。
5. SQL Server をクラスタ環境で運用している場合は、クラスタに関する情報が正しいことを確認します。
6. [完了]をクリックして変更を適用します。

ODBC 設定の確認と変更

ODBC 設定を確認して変更する方法

1. Microsoft SQL Server が実行しているシステムのスタートメニューで、[コントロール パネル] (必要な場合) を選択して、[管理ツール] を選択します。
2. [データ ソース (ODBC)] を選択します。[ODBC データソーステスト管理者] ダイアログ ボックスが開きます。
3. システムの [DSN フォルダ] タブで、適切な Microsoft SQL Server のインスタンス (1 つまたは複数) のエントリを選択します。Microsoft SQL Server 7.0 の場合、エントリは「DBASQL7」です。Microsoft SQL Server 2000 および 2005 のデフォルトのインスタンスは「dbasql_MSSQLSERVER」です。その他のインスタンスの場合は、「dbasql_」の後にインスタンス名が続きます。
4. [構成] をクリックします。[Microsoft SQL Server 用の DSN の設定] ダイアログ ボックスが開きます。名前のフィールドには、選択したエントリと同じ名前が表示されます。[説明] フィールドには「SQL Backup Agent」と表示されます。[サーバー] フィールドには、Microsoft SQL Server が実行されているマシン名が表示されます。

5. 設定は一切変更せずに[次へ]をクリックします。ログイン ID の認証を確認するために、Microsoft SQL Server で Windows 認証または Microsoft SQL Server 認証のどちらを使用するかを指定するようメッセージが表示されます。
 - Microsoft SQL Server に[Windows 認証]を使用している場合は、[アカウントの設定]ダイアログ ボックスの[認証]列で[Windows 認証]が選択されていることを確認します。
 - Microsoft SQL Server で[混在モード(Windows 認証と SQL Server 認証)]を使用している場合は、Windows 認証を選択して Windows ユーザと Microsoft SQL Server 専用ユーザ両方のログインを有効にするか、Microsoft SQL Server 認証を選択して Microsoft SQL Server 専用ユーザのログインのみを有効にすることができます。
 - Microsoft SQL Server 認証を使用している場合は、指定したログイン ID にシステム管理者のアクセス権があることを確認します。この点が不明な場合は暫定的に「sa」を使用します(「sa」にパスワードを設定する方法については、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください)。パスワードを入力したら、同じパスワードをもう一度確認入力します。
6. [次へ]をクリックします。Microsoft SQL Server 認証を選択していて、ログイン ID またはパスワード(あるいはその両方)が間違っている場合は、エラー メッセージが表示されます。[OK]をクリックしてエラー メッセージを閉じ、正しいログイン ID およびパスワードを再入力して[次へ]をクリックします。
7. [次へ]をクリックして[完了]をクリックします。[ODBC Microsoft SQL Server セットアップ]ダイアログ ボックスが開きます。[データ ソースのテスト]をクリックします。

[SQL Server ODBC データ ソース テスト]ダイアログ ボックスが開きます。数秒後に簡単な接続テストの結果が表示されます。

 - [Microsoft SQL Server ODBC データ ソース テスト]ダイアログ ボックスに「テストは無事に終了しました。」と表示された場合は[OK]ボタンをクリックし、次に[ODBC Microsoft SQL Server セットアップ]ダイアログ ボックスで[OK]ボタンをクリックします。[ODBC データ ソース アドミニストレータ]ダイアログ ボックスに戻ります。[OK]をクリックします。
 - [SQL Server ODBC データ ソース テスト]ダイアログ ボックスでエラーまたは障害が報告された場合は、ODBC または Microsoft SQL Server でエラーが発生しています。トラブルシューティングについては、Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

バックアップ マネージャの更新

バックアップ マネージャとバックアップ ジョブを更新する方法

1. CA ARCserve Backup をインストールしたシステムで、CA ARCserve Backup を起動して、ジョブ ステータス マネージャを開きます。
2. この Microsoft SQL Server に繰り返しバックアップジョブ、または保留中のバックアップ ジョブがスケジュールされている場合は、ジョブ ステータス マネージャで [ジョブ キュー] タブを選択します。
3. 更新する最初のジョブを選択し、右クリックしてコンテキスト メニューから [変更] を選択します。バックアップ マネージャが開き、ジョブがロードされます。
4. [ソース] タブを選択します。
5. 左ペインのナビゲーション ツリーで、Microsoft SQL Server を実行中のサーバを展開してデータベースを表示します。サーバがツリーに存在しない場合の追加方法については、「実装ガイド」を参照してください。
6. データベースを右クリックし、コンテキスト メニューから [セキュリティ] を選択します。[セキュリティ] ダイアログ ボックスが開きます。
7. Windows セキュリティを使用している場合は、サーバへのアクセスに使用しているアカウントのユーザ名を指定し、パスワードのフィールドにパスワードを入力するか、または空白のままにしておきます。
SQL Server セキュリティを使用している場合は、Microsoft SQL Server アカウントのユーザ名とパスワードを入力して [OK] ボタンをクリックします。
8. [開始] ボタンをクリックして、バックアップ ジョブを再サブミットします。
9. 該当するバックアップ ジョブのそれぞれに対してこれらの手順を実行します。

注: この Microsoft SQL Server にリストア ジョブがスケジュールされている場合は、そのリストア ジョブをいったん削除して再作成する必要があります。

索引

C

- CA ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server
 - エラー - 111
 - トラブルシューティング - 111
- CREATE INDEX ステートメント、バックアップへの影響 - 47

D

- dbasql.log - 20, 67
- dbasql60.log - 20
- DBCC CHECKCATALOG - 41
- DBCC CHECKDB - 41

M

- master データベース
 - Windows 2000 でのリストア - 59
 - Windows 2003 でのリストア - 59
 - Windows XP でのリストア - 59
 - シングル ユーザ モードでのリストア - 59
 - リストアの要件 - 123
- Microsoft SQL Agent 設定ユーティリティ - 25
- Microsoft SQL Server
 - 惨事復旧 - 123
 - シングル ユーザ モードで開始 - 59
- Microsoft SQL Server 2000 クラスタ環境
 - アカウント設定 - 24
- Microsoft SQL Server 2000 クラスタ環境へのエージェントのインストール - 24
- Microsoft SQL Server 2000 で利用可能な機能 - 18
- Microsoft SQL Server 2000 の仮想サーバ環境
 - セッション単位でリストア - 107
 - ツリー単位でリストア - 104
 - バックアップ - 75
- Microsoft SQL Server の惨事復旧 - 123
- Microsoft SQL アカウント環境設定ユーティリティ - 129
- Microsoft SQL 認証 - 127

O

- ODBC 設定、確認と変更 - 130

S

- SAP R/3、SQL Server によるバックアップ - 20
- [SQL Server DBAgent 環境設定]ダイアログ ボックス - 25
- SQL エージェント フィルタ オプション - 97

T

- TCP ポート アドレスの設定
 - 実行後 - 25

あ

- アーキテクチャ図 - 12
- アーキテクチャの概要 - 12
- [アカウントの設定]ダイアログ ボックス - 129
- アクセス要件 - 16
- [以下のデータベース ファイルにリストア]オプション - 88
- インストール後の手順
 - インストール - 25
 - バックアップとリストアのパラメータの設定 - 25
- インストールの前提条件 - 23
- エージェントのアクティビティ ログ - 20
- エージェントのインストール
 - Microsoft SQL Server 2000 クラスタ環境 - 23
- [エージェント バックアップ オプション]ダイアログ ボックス - 73
- [エージェント リストア オプション]ダイアログ ボックス、Backup Agent リストア - 91
- エラー メッセージ - 111

か

- 機能、Microsoft SQL Server 2000 で利用可能 - 18
- クラスタ環境
 - すべてのノードへのエージェントのインストール - 39
 - セッション単位のリストア、Microsoft SQL Server 2000 - 107
 - 相違点 - 39
 - ツリー単位のリストア、Microsoft SQL Server 2000 - 104
 - バックアップ、Microsoft SQL Server 2000 - 75

さ

- 差分バックアップ - 44
 - 実行時期 - 44
 - 定義 - 44
 - ファイルおよびファイル グループ - 66
 - フル バックアップの補足 - 44
 - 方式 - 66
 - 利点 - 44
- 惨事 - 126
- 惨事復旧
 - シナリオ - 125
 - 標準 MS SQL Server 環境 - 125
 - 標準 MS SQL 環境 - 125
- 時刻を指定してリストア
 - オプション - 82
 - 制限 - 82
 - 説明 - 82
- システム管理者の権限 - 127
- ジョブ パッケージ - 69
- セキュリティ
 - 情報 - 91, 94, 104, 107
 - リストア時の指定 - 91
- [セキュリティおよびエージェント情報]ダイアログボックス - 73
- セッション単位のリストア
 - 説明 - 50
 - 手順 - 94
- セッションの自動選択 - 81
- 全体のバックアップ
 - 定義 - 66
- 選択したデータベースのバックアップ セッションの表示 - 97

た

- ダンプ - 13
- ツリー単位でリストア - 50
 - 説明 - 50
 - 手順 - 91
- ディスクの代替場所、リストア - 97
- データベース
 - 整合性 - 41
 - 損失や損傷のリストア - 48
 - ロック - 48
- データベースの整合性チェック
 - オプション - 41

- 定義 - 41
- データベースの整合性チェック オプション
 - 説明 - 67
- デスティネーション データベース - 48
- 動的なジョブ パッケージ - 69
- トランザクション ログ
 - 数の削減、差分バックアップ - 44
 - データベースの変更の記録 - 45
- トランザクション ログのバックアップ
 - オプション - 66
 - 定義 - 45
 - 別に実行 - 45
 - 利点 - 45

な

- 認証
 - SQL - 127
 - 種類 - 127
 - 設定の更新 - 128
 - 方法の変更 - 128

は

- バージョン履歴 - 91, 104
- パスワード変更 - 91, 94, 104, 107
- バックアップ
 - Microsoft SQL Server 2000 の仮想サーバ環境 - 75
 - Microsoft SQL Server クラスタ環境、リストア - 39
 - SAP R/3 - 20
 - TCP/IP - 73
 - [エージェント オプション]ダイアログ ボックス - 73
 - エージェントを使用したデータの流れ - 15
 - オプション - 66
 - 概要 - 61
 - 差分 - 44
 - 実行後にデータベースのフル バックアップが必要な操作 - 41
 - 種類 - 66
 - 処理 - 13
 - 推奨される方法 - 42
 - スケジューリング - 40
 - データベースの整合性チェック - 41
 - 手順 - 73
 - [デスティネーション]タブ - 73

デスティネーションの部分的なワイルドカード - 73
動的なジョブ パッケージ - 69
トランザクション ログ - 45
トランザクション ログ、別のバックアップ - 61
名前付きパイプ - 73
バックアップ マネージャ - 73
パラメータの設定 - 25
明示的なジョブ パッケージ - 70
[リモート プロトコル]オプション - 73
バックアップとリストア オプション - 18
バックアップとリストアのパラメータ、設定 - 25
バックアップのスケジューリング - 40, 73
バックアップの方式 - 66
バックアップ マネージャ
更新 - 132
バックアップに使用 - 73
標準の Microsoft SQL Server 環境へのエージェントのインストール - 24
標準の Microsoft SQL Server 環境、アカウントの設定 - 24
ファイルおよびファイル グループ
バックアップ方式 - 66
[ファイルを元の場所にリストア]オプション - 91, 94, 104, 107
複数インスタンス サポート - 18

ま

未使用ページの最初期化、再ロード - 48
明示的なジョブ パッケージ - 69
メディアの障害 - 48

や

ユーザ アカウントの指定 - 127

ら

リストア
master データベース - 59
Microsoft SQL Server 2000 の仮想サーバでのセッション単位のリストア - 107
Microsoft SQL Server 2000 の仮想サーバでのツリー単位のリストア - 104
SQL エージェント フィルタ オプション - 97
[以下のデータベース ファイルにリストア]オプション - 88

オプション - 80
概要 - 48
コミットされていないトランザクション - 48
時刻を指定してリストア - 82
自動選択 - 81
障害 - 48
セキュリティ - 91, 94, 104, 107
セッション単位のリストア - 50
セッション単位、1 回のリストア ジョブを使用 - 98
セッション単位、セッションごとに個別のリストア ジョブを使用 - 99
セッション単位のリストアを使用 - 94
セッションの自動選択 - 81
セッションの自動選択 - 81
[セッションの自動選択]オプション - 81
選択したデータベースのバックアップ セッションの表示 - 97
ツリー単位、セッションごとに個別のリストア ジョブを使用 - 100
ツリー単位でリストア - 50
ツリー単位のリストアを使用 - 91, 100, 104
ディスクの代替場所 - 97
デスティネーション データベース、要件 - 48
[バージョン履歴]ダイアログ ボックス - 91
パスワードの変更 - 91
バックアップ セッションの種類 - 50
パラメータの設定 - 25
[ファイルを元の場所にリストア]オプション - 91, 94, 104, 107
未使用ページの再初期化 - 48
問題の回避 - 124
[リストア後、ユーザのアクセスを制限する]オプション - 87
[レプリケーションの設定を保持する]オプション - 87
[リストア後、ユーザのアクセスを制限する]オプション - 87
リストア中の障害 - 48
リストアの問題の回避 - 124
リモートの Microsoft SQL Server のバックアップ - 73
リモートの Windows データベース サーバ、アクセス - 16
[リモート プロトコル]オプション - 73
履歴、バージョン - 91, 104

レプリケーション

設定の保持 - 97

レプリケーション設定の保持 - 97

[レプリケーションの設定を保持する]オプション - 87

ロード - 48